【らき☆すた】遠く、どこまでも近いモノ

コリ　たつや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【らき☆すた】遠く、どこまでも近いモノ

【Ｎコード】
Ｎ０７８８Ｆ

【作者名】
コリ　たつや

【あらすじ】
※本作品はＰＳ２版らき☆すたをプレイ済みであればこなた、未プレイであれば主人公の立場で読めるよう書いております。キャラの濃さ故に感情移入は無理と思います。※　「らき☆すた～陵桜学園桜藤祭～」の続編的ストーリー。主人公である火野サトシは最終学年の秋にもなって陵桜学園に転校することとなる。新しい学園生活に緊張しながらも期待を隠せない火野だが、なぜか生徒の誰もが自分のことを知っていて……？

戻る世界、届かない心

人間は目の前の非現実に対してあまりにも無力だ。

……例えば、幽霊。魔法使いでもいい。

非現実的存在が現実に現れたとしたら、人はどうするだろう？

目の前にそれはいるのに、人々はまるで呪文のように理論や常識を口にし、

そこに確かにあるその存在を、それでも真っ向から否定してしまうだろう。

プラズマがどうとか、角度がどうとか。

そんなものなんだよ、人間って言うのは。

簡単に固定概念を捨てれるものじゃあないんだ。

オレだって例外じゃなかった。

何事もなく平凡に生きてきたオレにとって、

この非現実は受け止めることのできるものじゃなかったんだ。

……それは責められることなのか？

そりゃあ、マンガやゲームの主人公なら、

怖いほどの順応力で平和を取り戻すんだろうさ。

だが、ここは現実だ。少なくともオレにとっては。
意味のわからない言い訳だが、この差はあまりにも大きい。
非現実など起きるはずもない世界で、
オレはいつも通りの日常を繰り返すだけのはずだったんだ。

アイツが全て奪ってしまった。

アイツが。

……人間は目の前の非現実に対してあまりにも無力だ。

―――――――

近く、どこまでも遠いモノ［1］

「サトシ～！早く起きなさ～い！転校初日から遅刻するつもり～？」

母親の大声に目を開けると、なにやら見慣れない天井が目に入る。
当たり前だ。オレはここに引っ越してきたばかりなのだから。

「ふあ……ぁ。」

大きなあくびを一つ。そしてオレはそそくさと準備を始める。
だが、時計を見ると、針はあってはならない場所にその身を置いていた。

「うげ……！マジかよ、遅刻だっ！！」

転校初日から遅刻。そして遅刻した者への冷たい空気と視線の中、
淡々と自己紹介。
……それはきっと最悪の日となるだろう。

だが、自分は学校への道をまったくもって知らないのだ。
あと数分でタイムオーバーだというのに、これではどうしようもない。

「だからこそ冷静になれ！クールになれ！」

オレは半ば半狂乱で叫びながらＰＣの電源を入れる。
学校の位置を知らないのはマズイ。ネットの地図で陵桜学園の場所を追った。

……陵桜学園。オレが今日から登校することになる高等学校の名前である。
この辺りでは成績が高めの高校であり、オレが転入に成功したのも奇跡だった。

特に変なウワサの流れている学校でもなく、
人生に少しのスリルを与えてくれる気配もない。

そして今は秋。オレは高校生でなおかつ最上級生。
こんなタイミングで転校してきた生徒を相手にするヒマなどあるはずもない。

つまりはオレは卒業までの数ヶ月、青春の「せ」の字もない生活を強いられるわけだ。

5分ほどした後、位置を把握したオレは家を飛び出た。

……転校初日の登校中というなかなかドラマチックなシチュエーションなわけだ。
なんかパンくわえた女の子とぶつかってその後、その子と同じクラスで

なんて事を期待したわけだけど……。これが現実、と言ったところか。
ぶつかるどころか人と出会いもせず、なんだか少しさみしい気持ちになった。

「おう、火野か～。おはようさん。今回もよろしくな。」

この先生の名前は黒井先生。（下の名前はまだ聞いてない。）
まるでオレを昔から知っているかのように話して来る不思議な先生だ。
そして時々よくわからないことを口にする。

「あの、今回もって……？」

「お、永森も。ええ加減飽きたんちゃうんか？」

右を見ると、そこにはオレと同じ日に
同じクラスに転校するという、永森さんが立っていた。

「なんの話ですか？」

永森さんもオレと同じ反応をする。

「……まぁええわ。とりあえず教室入ったら自己紹介や。
もっとも、する必要性あんまないやろうけどな。」

自己紹介の必要性がない？この先生は何を言っているのだろう。
オレたちの緊張を解いてくれようとしているのだろうか。

しかも、同じ日に転校してきた永森さんとも友達になれそうだし。
……あれ、これってかなり幸先よくない？

「おーい、少年、どこまでいくんやー？いい加減教室くらい覚えや。」

オレが脳内で青春スクールライフグラフィティを描いていると、
気付いた時には、オレは教室を越してもっと奥に突き進んでいた。

「まぁあれや、今は生徒全員、桜藤祭の準備でピリピリしとる。」

桜藤祭…？この時期だし、運動会は違うとすれば、
この学校での学園祭や文化祭みたいなものかな？

「今回もバリバリ働くんやで！期待しとるからな！！
できれば前みたいにダイエットにも付き合ってや～。」

「は、はぁ。まぁ程々にがんばりますよ。」

ダイエット？と言われても、男の目線からだからだろうか。
別に先生はダイエットするほど太ってないように思う。
というか、学園祭に関係ないし。

「あとお前、演劇のシロウ役よくやってるけどやな、
そんなことにならんように柊を見守っておくんやで？」

もう先生が何を言いたいのか全く分からなくなってきた。
そういうキャラなんだろうか？壮絶な電波をビンビン感じる。

「さ、教室入って早いとこ自己紹介しとき。」

先生の言動をどうにか解明しようと頭をフル回転させる。
柊ってだれだろう？シロウ役って何？

逆に混乱してくるので、やめることにした。

近く、どこまでも遠いモノ［2］

「え～、火野サトシと言います。趣味は……」

オレが自己紹介してる間にも教室内はざわめいている。
人が挨拶してるときくらい静かにならないものなのか。

それはいいとして、

「知ってるよ～、サトシ君。」
「こんなに長々と話して疲れないのかねぇ。」
「そういえば、今回は自己紹介が長いですね。」

などと聞こえてくることが、オレの心をかなり揺さぶった。

個人情報でも漏れているんだろうか？
オレの情報など見て喜ぶ人がいるとも思えないけれど。

やや急ぎ足で、平凡な自己紹介を終わらせた。

その後の休み時間…。

「お～い、サトシくん、こっちこっち～。」

小さな体に不釣合いな長髪の子がオレを呼ぶ。
よくわからないけどとりあえずホイホイついていくことにする。

「よし、５人全員集まったわね。」

ツインテールの女の子が意味深な事を言う。
「5人全員」？もしかして先生が言ってたとおりに
桜藤祭が近いからみんなピリピリしてるのだろうか。

そこから推理できる先ほどの言葉の意味は……？
時間がなく、猫の手でも借りたい状況。
そこに一人の転校生がやってくるという情報が。

組むよねぇ、班。組んじゃうよねえ、班。

つまり！転校生がくるという情報を得た時から、
オレの桜藤祭準備の班と役割が決められていたということ！！

そうだ、それなら今までのみんなの発言にも合点がいく。
オレはこれから演劇をやることになり、
「シロウ」だっけ？の役を演じることになるのだろう。

そしてオレの個人情報なぞ漏れてはおらず、
最初からクラス全員にオレの名前が発表されていた、ということだ。
……なんだか大切なことを色々忘れている気がするが、この際捨て置いておく。

「やはりおかしいですよね…。」
「うん、そうね。」
「本人に直接聞いてみたほうがいいんじゃないかな？」
「それが無難かもね～。」

オレは、なんだか自分が空気か背景にされてる気がしたので、

とりあえず話の内容を聞いてみる。

「あのさ、何の話をしてるの？」

「サトシ君、あんたも気づかない？」

ツインテールの女の子が少し真剣な顔をしてこちらを見てくる。
あれ？この人別のクラスの人だったよな？
……なんでクラスが違うのにオレの名前知ってるんだろう？

「まず、なんでループ中の記憶が残っているのか、かな？」

「そうね。それと今まで覚えてなかった記憶も甦った感覚がある。」

青い長髪の女の子はまたもや意味深な事を言う。
ループ？よく意味がわからない。

もしかして、もう演劇の練習が始まっちゃってるのか？
……でもオレはセリフなんぞ何にも教わってないわけだが。

「そして、なぜ、永森さんがまた3年のクラスにいるのか、ですね。」

学級委員長の高良さんが眼鏡を中指で
クイッとあげながら、目を光らせて悩みこむ。

永森……永森やまとさん？あの一緒に転校してきた子だよな？

「永森さんがここにきたら、何かいけないの？」

オレは、隣の優しそうなリボンの女の子に聞いてみた。

「サトシ君、やまとさんは2年生なんだよ？」

……はい？

「……またまたご冗談を。もしやまとさんが2年生だったとして、戸籍とかどうすんのさ？年齢偽装はそう簡単じゃ……。え、まさか飛び級？」

オレが一人であたふたしている中、皆はキョトンと静まっていた。

あれ、まさかオレ、地雷踏んだかな？

「なに言ってるの？こうさんがそう言ってたってサトシ君が教えてくれたんだよ？」

「あんた……。さっきから様子が変ね。何か隠してんじゃない？」

「え、いやそんなこといわれましても。」

な、なんだなんだ？

様子がおかしいのは明らかにあなた達ですよ！？

「――サトシさん。まさか、あなたは――。」

高良さんが絶望的な顔をする。

なんだこれ！？こんなの地雷どころかクレイモアだろ！！

……あぁ、たった30秒でいい。時間よ、戻ってくれ……。

近く、どこまでも遠いモノ［3］

「皆さん。今、分かったことがあります。
多分……いえ、確実と言っていいでしょう。サトシさんは……。」

皆がより一層静まり、高良さんに耳を傾ける。
そして、高良さんの口が静かに開かれる……。

「ループ中の記憶が全て消えています。」

「「え……。」」

またみんなが、キョトンと表情を消す。

「う、うそだよね！？サトシ君！私のこと覚えてる？
えーとあと、それから、それからそれから……！！」

青髪の子が混乱した眼差しでオレの肩を揺さぶる。
意味もわからず成されるがままになっているオレの胸倉を
青髪の子を押しのけた、ツインテールの女の子が掴んだ。

「時間を！時間を元に戻したことも覚えてない！？」

はい来た。いつか来ると思ったよこの状況だと。つまりアレだろ？
オレは時をかける勇者でなんかこうそれっぽい力で世界を救って
記憶を失ったまま過去に飛んだとかいう設定だろ？

……悪いウワサは聞かなかったのに、この学校の生徒はこんなもの
なのか。

これじゃあタチの悪いいじめだ。転校生洗礼の風習でもあるのだろうか。

「な、なななな、そ、そんなに一気に言われてもよくわかんないよ。
みんなの名前まだ知らないし、そこのツインテの子なんか
どうやってオレの名を知ったかさへ…。」

みんながオレの肩をガクンガクン揺らしながら叫ぶように言う。
新学園生活1日目にしてクラスの注目めっちゃ集めそれに加えて、
女の子達と激しくボディタッチ&スキンシップですよ。嬉しいね。

……揺れて吐きそうだから正直離してほしいけど。

「ムダですよ、皆さん。とりあえず永森さんに聞いてみましょう。」

「う、うん。」

みんなはオレから手を離すと、全員で永森さんの方へ歩いていく。
オレはとりあえず後ろについていく。ケンカになったら抑えるためだ。

オレが予想するに、この女子4人組みはこのクラスを仕切る不良だ。
こうして意味のわからない設定をこじつけたりして遊んでいるのだろう。

いや、それはオレが男だったからなのか?

ならば女相手にはどうだろう。
遊びで済むならいいけれど、どうも彼女達を見ているとそうは思え

ない。

というか、彼女達を止めようとしないクラスの雰囲気も異常だ。
永森さんがなにもされないといいけど…。

「永森さん、これがどういうことか説明していただけますか？」

高良さんが永森さんに何かを問いている。
説明して欲しいのはこっちのほうだよまったく。

「……何？もしかして学園祭の手伝いのお願い？
別に暇だから私は付き合うけど？」

「時間のループの話です。……あなたは、宇宙人の方の永森さんですか？」

宇宙人……。は、だめだこりゃ。完全にイカれてやがる。
周りの反応も薄いし、この学校には変人しかいないのか。

「……そういう話、私は苦手だけれど。こうとかに話してあげたら……喜ぶと思う。」

永森さんの言葉を聞くや否や、
みゆきさんは残念そうな顔でこちらを向く。

「だめです。この人も普通の永森さんです。」

「むぅ……。他の人もサトシ君たちの事を覚えてるし……。
これだとサトシ君の記憶だけなくなってる事になるね。」

また４人が勝手に話し始める。いや、勝手に話してくれるに越したことはない。
彼女たちの話に付き合う意味はないし、そんなヒマもない。
なんだかんだで、オレも受験生。大学受験で忙しいのだ。
この不良女達に目を付けられたら、面倒なことになる。
なるんだけど……。

「あのさ、オレ、記憶喪失で病院にいった覚えなんてないんだけど？
そろそろオレにも事情を説明してくれないかな？」

「そうしましょうか。このまま慌てていても仕方が無いですし。」

刺激が欲しいと常日頃から思っていたせいか、
オレは無意識に話に頭を突っ込んでいた。

そして、みんなはオレに事情を説明し始めた……。

近く、どこまでも遠いモノ［4］

「信じられるかっての！！」

意味の分からない電波話を聞かされたオレは
どこぞのエロ仙人のような口調で突っ込んでしまった。

彼女らの話の重要部分だけを纏めると、こうだ。

・オレたちは今日を含めこれからの数日間を何度も過ごして来た。
つまりはオレ達はみんなタイムリーパーと言うわけだ。

・タイムリープは何回も繰り返され、その間に非現実的な出来事が沢山あった。

・その原因はこの学校の文化祭、桜藤祭の始まりを告げる花火である。
この花火が偶然、宇宙より飛来した飛行艇に命中し大爆発。多数の命が奪われた。
それを申し訳なく思った操作者の宇宙人が時空を歪めたのだ。

・その宇宙人は永森やまとさんの身体を借り、オレ達を誘導することで、
過去の世界にて花火の打ち上げを中止させることに成功。

――こうして時空は元に戻り、この学校の生徒の命も守られた。

めでたしめでたし。

「で、なんのアニメの話ですか？」

「そりゃあアニメとかゲームでありがちな話でしょうさ！だけどさ、本当なんだよ？これが事実なんだよ！？」

「そうよ！なんだってあんただけ記憶がないわけ！？」

オレがツッコミを入れると同時に、ガチレスの嵐が襲い掛かる。さすがに付き合い切れない。そろそろ面倒になってきた。

「いや、そう攻められても。突っ込みをW突っ込みで返すとか卑怯だよ。

……というか転校初日で知り合いどころかもうここまでの関係にぶっ飛んだかぁ。

まぁこういうのもいいのかもしれないね。これからよろしくな？」

「「そうじゃなくてぇっ！！」」

とりあえず話を終らせるつもりだったが無理だった。

「待ってください、皆さん。多分これは、宇宙人の方の永森さんのなんらかのミスではないでしょうか？」

「そうだよね……。でもサトシ君だけ、ピンポイントで

ミスするなんてちょっと気の毒だね……。」

だめだ、また話の主導権が持っていかれた。
ピンポイントって。その言い方の方がオレにはお気の毒だよ。

「なんにせよ、この現象は宇宙人の永森さんにしか理由はわからないようです。」

「しかも、その宇宙人さんはここにはもういないってわけね。」

「あ～、はいはい。まぁ、まずはその話を信じるとしても、だ。
ミスなんならいずれお前らも全員忘れるんじゃねぇの？
それか、オレから順番だとかなんだとかでさ。」

いつの間にか、オレの口調も砕けてきている。
なんだかこいつらに優しく接するのも馬鹿らしくなってきた。

「案外いいセン打ってくるわね…。あんた本当に忘れてるの？」

「忘れてるの？って聞かれてもだな……。オレはタイムループだとかいう
意味のわからん事件に巻き込まれた事はこの生涯、一度たりともないッ！！
というか、面白そうだから巻き込まれたいくらいだッッ！！」

「面白そうどころかメッチャ本気でループ止めたんだけどね…。」

「止めんなよッ！！そこ止めんなよオレッ！！」

「アンタが止めだしたんじゃない！！」

「うわ～、なんだよそれ……。バカだなぁ。
マジもう一回ループしろよ…。楽しそうだし……。」

「たった今ループ中なんだけどね……。」

さも当たり前のように電波な話をする彼女達にまともな話は通用しない。
オレは適当にノリにあわせることにした。

それにしても、不良にしてはいまだに金品もなにも要求されない。
どういうことだろう。実は悪意などなかったということだろうか。

じゃあ、皆で口裏あわせてオレを非日常ごっこで迎えようってヤツか？
これはこれは、良き御持て成しをありがとう。余計なお世話だコノヤロウ。

「あ、あの…、サトシさんってこういうキャラでしたっけ？」

「ちょっと面白くなってるね♪」

「逆に手間がかかるだけよ…。」

「お姉ちゃんは手間がかかる子が好きなんだよね。」

「ツンデレですね。分かります。」

「うるさい、こなたぁ！つかさぁ！！」

……だけどなんか、こういう会話の中心にいるってだけで
ちょっと嬉しかったりするオレはどうなんだろう。……男のサガだ
ろうか？

でも、これからこの不器用な子達と交友関係を結べるのなら、
転校デビューとしては一応、いい流れである。……いい流れなはず
である。

キーン……コーン……

「あっ、予鈴だ！じゃあ私、教室に戻るねっ！」

「はいよ～。」

学校に来て初の最初の休み時間は、一瞬だけ夢見ていた
「女子からの質問攻め」というものではなく、
さらに攻撃的な「詰問攻め」という超電波なモノに終った。

近く、どこまでも遠いモノ［5］

世界史の授業……。聞いてると物語のようではあるのだが、
一般的な小説などの「続きが気になる」感がまったくないので、
ただ、眠気が緩やかに襲い掛かるだけである。

眠気が頂点にまで達すると……、
その授業はただの呪文の詠唱にしか聞こえなくなる。

呪文を聞いているといつしか、その呪文の標的がオレで、
今オレは呪われようとしているかような錯覚を覚える。

だが、それはそうだろう……。眠気の中でも気づいていた。
その呪文は途中からオレの名前を含み始め、
目の前の黒い影はどんどん迫ってきて……。

「火野!!さっさと起きんかいッ!!」

ゴスッ!というういい音と共にオレは頭に激痛を覚える。
影の招待は黒い影だけに、黒井先生の影であった。

やってしまった、最初に思ったのはそれだった。

それはあたりまえだ。転校してきて初めての授業で居眠り。
普通の人間の神経じゃあこなせる業ではない。もちろん悪い意味で。

みんなからの冷たい目線がオレを突き刺している気がして、
そんなことはないのだろうけど、緊張していたオレは軽く恐怖を感じた。

「ああ……。オレ、これから先どうなるんだろう……。」

「なっ、え～と、火野？別にそんな落ち込む事やないで？
お前の居眠りなんかいつもの事やし、ええ加減慣れたな～ていうか
……。」

先生がオレのフォローに入る。この先生は実はいい先生なのかも知
れないな。
もちろん、「いつものこと」とか「慣れた」とか、
未だにそんなバレバレな嘘設定を言っていることを外せばだが。

「あ～、先生、ムダですよ。今のサトシくんは。」

「は？何を言うとるんや泉。いつものごとく寝ぼけとるんか？」

「いや今回は珍しく寝てませんって！！」

「珍しく……なぁ。」

先ほどの４人組みの一人である身長に不釣合いな長髪の女の子、
泉こなたさんは必死に寝ていない事実を伝えようとするも、
途中で自爆していることに気づき、手をあたふたさせる。

「あ、いぇ、いつも寝ないように心がけてますって！！
それはいいとして！今のサトシくんはですね？記憶喪失なんですよ。
」

「やっぱ寝ぼけてるやないか。こいつは別に記憶喪失で病院になん

か――。」

「そうじゃなくてですね！あぁ、とりあえずこっちに来てください！！」

こなたさんと黒井先生がオレを指差したり見たりしながらなにやら話し始める。
そういえば、ちょうどこんな風に悪口を言われるとき指をさされながら言われると、ちょっといやだよね。

「なんやてぇ！？ループ中の記憶が消えてるぅッ！？」

「「な、なんだってーーー！！！」」

クラスの人たちが立ち上がる。永森さんや寝ている人は不動だが。

「わー！わー！！クラス中が混乱しないように小声で言ったのに意味無くなるでしょ！！」

クラス全員が驚くという事は、やはり全員での演技であるということが確定される。
だが、その演技もなかなか上手なもので、
こちらから見ても本当に驚いているようにしか見えない。

本当に驚いているようにしか……。

本当に驚いている……？

……異常なのは……オレ、なのか？

「こんな授業中止や、中止！どうせこんな内容、何回も繰り返してるしえええやろ！！」

「そうですよ先生～。こんな授業、私でも１００点とれますよ～。」

「……いつも寝とるか、オンゲーのＰＴ編成考えとるお前がか？」

「うぐっ……。」

なんだなんだ。突然話が変な方向に進み始めた。
オレはこれでも受験生なんだ。授業を中止だなんて結構困るぞ。

「まって下さいよ、先生。それじゃあオレが困りますよ。
このクラスでなにを考えてるのかは知らないし聞きませんけどせめて授業だけは普通に行ってくれないと進路が……。」

「寝とったヤツがよう言えたな、火野。」

「それはまぁ、その。ね？」

さすがに先生のツッコミは正論過ぎて、
結局オレはすぐに退いてしまった。

「で、本当に記憶ないんか、こいつは。」

先生が深刻な顔をしてオレの目を見る。何らかの返事が欲しいのだろうか？
そうしていると、みゆきさんがやってきて、先生となにやら話しこみ始めた。

「……そう、か。じゃあコイツは今までの事全部忘れとるんやな？」

「……はい。そしていずれ私達も忘れる事になるかと。」

「なんや切ないな～。今まで一緒におったヤツが自分らのこと忘れとると思うと。」

先生がみゆきさんと話している間に、ふと、目線に気づく。

クラスのみんなが、オレを見ているのだ。
「忘れてしまったのか？」「オレの事も覚えてないのか？」と、哀しい目で。

……オレにとっては意味不明な、不気味ですごくいやな目線だった。

近く、どこまでも遠いモノ［6］

「……意味わかんねぇよ。」

「ん、どうした、火野。」

そろそろ限界だった。何しろ、転校してきて最初の日。
なんだかんだで、家でドキドキして待ち望んでいたこの日が、
意味の分からない話で台無しになって、最終的にはオレは異常者扱い…。

そして……。

「「オレは異常者じゃない！！」」

悲しさや怒りだけが心を満たして、その心は、爆発してしまった。

「意味わかんねぇよ！オレは今まで普通に生きてきたし、記憶なんて飛んだ覚えもない！」

「ひ、火野？ま、まぁまずは落ち着こうや、な？」

黒井先生も少しひるんでいる。胸に少し罪悪感が生まれるのを感じた。
本当はこうやって強く叫ぶつもりはなかった。でも、叫んでしまった。

――こうなったからには、止まらない。

「時間がループ？なんだよそれ？クラス揃って電波かよ！！」

叫びながら、オレは多分、泣いていた。

新しい学校で、新しい友達。どんなに変わり映えのない日常でもいい。

新しい生活を期待していたオレにとって、こんなにもイヤな事はなかった。

正直、今すぐにでも転校してやりたいとさえ思った。

「人数攻めのつもりか！？どう考えても普通なオレを異常者扱いしやがって！

まあ異常なのかもしれないなぁ、キミら異常者からすれば正常者はさぁ！！」

「……。」

クラスメイトは黙り込み、申し訳なさそうな顔をする。

悪いことをした、と思ってくれていたのはそれで理解した。

したのだが、オレは止まることができなくて。

「オレはオレだ！お前らが言う火野サトシがなんだろうと、

オレはそんな事は知らねぇ！それで異常者扱いされる筋合いもねぇ！！」

初日から陰湿な事しやがって……。畜生……。っくしょう……。」

すこし勢いが薄れてきたオレに、高良さんが近づく。

そしてオレの目の前でみゆきさんは深々と頭を下げた。

「……すみません。とても無礼な事をしました、お詫びします。
私たちで勝手に進めていい話ではありませんでした。」

会釈程度の頭の下げ方ではなく、
それこそ頭が地面に付くんじゃないかと言うほどの礼を
こんな女の子にさせてしまったことに少し罪悪感が沸く。

これは普通なことなのだ。
相手に不快な思いをさせたのなら謝るのが道理。

相手に対して怒るということは謝罪を求めるということなのに、
オレの心は矛盾していて、頭を上げさせようと思っていた。

「……ですが、信じて欲しい。
とても信じれるようなことではないでしょうが……。」

みゆきさんは頭を下に向けたまま言葉を続ける。
これ以上、こんな場面は見ていられない。

「もう……。いいよ……。」

オレは教室の扉を開け、外に走り出した。
止められる者は誰もいなかった。先生でさえ、暗い顔をするだけ。
なんで、こんな事になったんだろう。

走りながら、オレは別のもっと幸せな初日の世界を想像していた。
普通で平凡でありきたりな自己紹介を終わらせたら、

さっきのあの４人組みが普通に友達になろうとしてオレを呼ぶんだ。
そして、先生が言っていたように、演劇をやることになって……。

何、妄想してるんだろ、オレ。バカだなぁ。

そして、いつの間にか自分の足が学校の昇降口にあることに気づく。
多分、このまま帰ると早退って事になるだろうな。
となると大学の受験で不利に……。……なんだか、どうでもいいや。

オレが学校から去ろうとした瞬間、オレを追う足音が聞こえた。
あんな状況で追いかけて来るヤツもいるもんなのか。

……黒井先生か？いや、こなたさん？
先生が生徒を止めるのは当たり前だから、可能性が高いのは前者だ。

みゆきさんはなんだかんだで冷静に対処していたから、
多分追いかけて来ることもないだろう。
帰らせたほうが得策だとか思っているだろうし。

結局、オレは立ち止まった『そいつ』の方に顔を向けた。

近く、どこまでも遠いモノ［7］

「オイ、火野！待てって！！」

……全く予想していなかったヤツが現れた。誰だっけ、コイツ。

「ハァ、ハァ。全く。俺のこの黄金の左腕がなかったら追いつけてなかったぜ。」

「腕使ってねえし。……つーか、誰だっけ。」

「うおおぉぉおおおい！！忘れんなよッッ！！
いくら目立たないからって忘れんなよッ！！
……って。そうだったな。今のお前はまだ俺の事は知らないのか。」

その男子はニコっと笑って（営業スマイルってヤツか？いい笑顔過ぎる。）
自分の顔を親指で指し、威勢良く口を開く。

「俺は白石　みのる。同じクラスだぜ。
オマエの事情はよく分かった。困ったらオレに相談してくれ。」

白石……、みのるねぇ。オレにとって微妙な立ち位置なだけに、
忘れたりしてしまいそうだからよく覚えておこう。
まぁ、この明日から学校に行くかどうかも分からないけど。

「それと、当たり前だが、自己紹介の為だけに追いかけて来たわけじゃない。」

「なんだ?連れ戻そうってか?」

「いいや。今のオマエの状況じゃあ、誰だって戻りはしないだろ。俺がオマエの状況でも嫌だわ。……でも、もうひとつ分かるんだよ。」

「何が?」

「今のオマエ、このまま不登校でもしそうな雰囲気なんだよな。」

本心をズバリ当てられたオレは、少し驚く。
だがその後、すぐに不愉快さが心を埋めた。

「だったら何だよ。つーか、何で分かるんだよ、そんな事。」

「長い付き合いだぜ?前のサトシ君とは、だけどな。」

「……前の、オレ。」

白石のその目はウソを語っているようには見えなかった。
だがそれでも、「前の」という言い回しに少し苛立ちを覚える。

「火野、本当はオマエ、分かってるんだろ?何かが変だって。俺達が遊びやイジメで言ってるわけじゃないって。」

……正直言うと、その通りである。
少しずつオレの中でみんなの話が本当なんじゃないかと思い始めている。
さっきからとっさに出てくる自分の言葉を思い返しても、それがわかる。

みんなの、オレが何も覚えていないという事を知ったときの、あの悲しそうな顔。
アレはどう見ても本物だった。一人の親友の為に悲しむ表情。

……でも。

「でも、でも信じろって言うのかよ!?……宇宙人を!時間の巻き戻しを!!
……どう考えたってムリだよ!何もない、証拠もない!なのに――。」

「まぁ、落ち着け。さっき言っただろ?困ったら俺に相談してくれ、ってさ。
信じられないかもしれないけど、とりあえずちょっと俺の話聞いとけ。」

オレは黙って耳を傾ける。

「前のオマエ、俺の背景扱いにしててな。俺の事をそんなに知らなかったんだ。
その分俺だけオマエの事を良く知ってるとなると、ストーカーみたいな話だけどさ。」

その話だけ聞くと、オレはなかなか最低なヤツだな。
「オレにとって微妙な立ち位置」と白石を評価したオレが言えた事ではないが。

「それでもタイムループを止める力になってやりたくて、
オマエが迷い込んできたときに１００万ティーク渡したりとか、色

々したんだぜ？」

「ティークってなんだ？」

「ゲーム内マネー。ざっと一万円分だ。」

ゲーム、という言葉で彼女達の話を思い出す。
時間のループが行われ、何度も同じ時間を繰り返す中、
オレ達はさまざまな非現実に直面したという。

その中のひとつに、オレ達がゲームの世界に吸い込まれるという話があった。

こなたさんがプレイしているオンラインゲームにオレたちの身体が吸い込まれ、
ゲームキャラとなったオレ達が、ゲーム内の事件や異変を解決したというのだ。

オレはその話を思い返しながら会話を続ける。

「あぁ、オレがゲームの世界に行ったとかいう話だっけ？
アレが一番信じられないんだよ。タイムループは…、まぁ時空がなんやらでアリとしよう。
ゲームはプログラムだぜ？二次元だぜ？ドットでもハックするつもりかよ。」

「……最近は脳波でモノを操る技術があるらしいな。それでアバターを動かせば
あたかも自分がキャラであるかのように錯覚するんじゃないか？」

……知っている。他にも、最近では眼鏡型のディスプレイなど、まるでＰＣの中に入ったような体験ができるというガジェットがあることを。

「それをオレたちが気づかない間に装着させられて、そのままゲームを起動させられたっていうのか？……馬鹿げてる。」

「そうとは言ってない。ただ、一応科学的には証明できるってこったよ。
だからこそ、電波だ電波だと思い込んで欲しくはないぜ。」

「時間のループは電波だけどな。で、その金を返せと？」

「時空がなんやらでアリじゃなかったのかよ。
それと、時間が戻ってるから１００万ティークは無くなってないさ。もともと、戻ってくる事が分かってなかったら１００万は出しづらいっつーの。」

「……ってことはオレに１００万ティーク渡したときは、ループを止める期待はあまりしてなかったってことか？」

「大当たりだけど、そこはスルーしてくれ。」

「大当たりかよ……。」

白石、みのる。今のオレには頼れる生徒はコイツだけになりそうだ。
ラジオ番組の司会なんかに向いている傾向がある口調で、ある程度の話術があるところから、少し信用できないカンジもあるが……。

普通ありえない電波話を分かりやすくまとめてくれる。
そういう面では、かなり必要となってくる存在かも知れない。
なにより、オレを異常者という目で見ず、あくまで今のオレを尊重してくれる。

「まぁ、火野。これがオレのメアドだ。……ついでにこれ、オレのHPな。
『らっきー☆ちゃんねる』って言うラジオ番組の司会やってんだ。
他のヤツには内緒だぞ?学校にばれたら面倒だしな。まあいずれバレそうだけど。」

……マジで司会やってたのか。やけに声優染みた喋り方だと思った。

「まぁ、了解。何かあったら連絡する。」

「別に、たわいのないただの雑談でもいいぜ?
仕事が入ってなけりゃあな。……だってさぁ?」

白石は少し恥ずかしそうに笑い、後ろ頭を掻きながら言った。

「オレと、オマエは、たった今から親友だぜ?」

白石はオレの頭を人差し指でトン、と突く。

「いつでも連絡してくれよな。」

……ははは。思わず噴出しそうになった。
よくもまぁ、あんな恥ずかしいことをいけしゃあしゃあと言うじゃないか。

でもまぁ、オレがそれを断る意味なんかないな。

――母さん。都会に来て入学した学校は、電波なヤツらだらけの場所でしたが…、
それでも、そんな学校で、オレは初日から友達が、いや、

親友ができました。

近く、どこまでも遠いモノ［8］

家に着くと、母が寝ている事を確認。

学校から早退した事がバレたらなあんのこたぁない。
ぽっくりコロされるだろう。母さん特製くじらビンタで。
くじらビンタってのは、くじらが衝突してくる程の迫力からそう名づけた。オレが。

そぉ〜っと、オレは家のカギをあけ、自分の部屋に歩く。

「サトシ！！」

「！！」

なんと！いきなりバレてしまった。頭の中でＥｎｃｏｕｎｔｏｒが流れている。
危険フェイズだ。とにかくダンボールに隠れてやりすごｓ――

「大丈夫なの！？サトシ！学校で倒れたって本当！？」

「え、……え？」

ＴＵＲＲＲＲＲＲＲ…。

「あ、サトシ、携帯なってるわよ。」

「う、うん。」

見た事もない電話番号。白石の物とは違う、まったく別の番号だった。
イタズラ電話……にしてはワン切りするわけでもない。
架空請求なら、その相手に暴言をいいまくったりとか、
趣味の悪いストレス解消も図れるが……。

ピッ

「オレだ。合言葉を言え。」

「も、もしもし、……火野か？変な冗談はやめい。」

どこかで聞いた事のあるような声。
たしかなんかの呪文を詠唱していた人のような……。

「え～と……。どちらさんですか？」

「ななこや、黒井ななこ！あれ、ウチホンマに番号間違えた！？」

突然、「ななこや」とかいわれても。
でも名前に少し聞き覚えがあったのであえてカマをかけてみる。

「もしかして前のオレの彼女とか？」

「ああ、もう！担任の先生や！自己紹介したやろ！！」

先の発言で相手はオレが火野サトシであることに気づいたのか、
一度ため息をつくと少し大きめな声で名を名乗った。

「あ、黒井先生ですか？普通に担任ですって言ってくれればいいのに。」

「せや。とりあえず、火野の親御さんにはブッ倒れて早退した事にしたで。」

「え、あ、ありがとうございます。……じゃなくて！！
なんでオレの電話番号知ってるんですか！！」

そうだ。オレは先生と番号など交換してないし、
まず先生とは会話さえまともにかわしていない。なのに……何故だろう？

「メルアドも知っとるで？……前の、って言えばええんかな。
前の火野がな、ウチらの為に連絡先、交換してくれたんや。」

なんとまぁ。これでみんながタイムリープしていることが証明されてしまった。
……いや、なんらかの方法でオレの連絡先を調べた可能性だってある。

別に信じたくないわけじゃないが、
突然、そんな非現実を押し付けられても納得はいかないのだ。

それにしても、『前の』ねぇ。白石もそう呼んでいたし、まあいいとしよう。
なんだか自分が『火野サトシの姿をした偽者』みたいな扱いを受けているようでいい気はしないが。

「ウチと柊姉と高良でミスコン出場する事になってな？
その時に手伝ってもらうことになってな。」

「前のオレに、ですか？」

「そうや。……あの時はなんやかんやでオモロかったんやけどなぁ。
」

やはり、ウソをついているようには思えない。
オレが、記憶喪失になっている？時間は巻き戻っている？

……考えれば考えるほど、やはり先には何も見えない。見えるわけもない。
深くため息をついたあと、電話に応対する。

「誰が優勝したんです？」

「だれって……ミスコンか？」

「それ以外ないでしょうよ。」

「全員や。」

「は？」

「ウチが優勝する事もあったし、高良も、柊も優勝したわ。
ループ中に何度もミスコンはあったしな。」

なんとも無茶苦茶な話である。
そして先生はなぜか少しうれしそうに話を続ける。

「しかもやで？なぜか火野が多くサポートしたヤツに限って優勝すんねや。
ダイエットも成功するしな。一石二鳥や！あはは。」

……そりゃまた、なんて虫のいい話だこと。

『火野サトシさんのサポートで、ミスコン優勝しました！
もうこの人がいない生活は考えられません！』（教職員：女）

ってか？

「はぁ……。まさしく運命はオレに委ねられてたんですね。」

「もし、今度ミスコンが開催されるようやったら、
今回はウチを支援してや！ウチのメルアドもあとでメールで送っとくな！」

「分かりました。」

「それと……。」

少し間を空けると、先生の声が急に暗くなる。
いや、これが自然なはずだ。今さっきあんなことがあったばかりなのだから。

「……スマン。いや、ゴメン。ごめんなさい。」

「……今日のことですか？」

生徒であるオレが黒井先生にごめんなさい、と言わせたことにオレは少し、なんとも言い難い背徳感を感じた。

「せや。火野の事情も知らずに、テキトーな事言って大騒ぎして。……火野は火野や。前の火野は関係ないわな。火野は、異常者やないで。」

その言葉を聞いて少しばかり、オレは安心感を覚える。ただのその場しのぎの言葉かも知れないのに、不思議にも心は安らいだ。

「……ありがとうございます。」

「……でも。」

「はい？」

「……でも……な？少しは……思い出して……欲しいわ……。」

声がかすれてよく聞こえない。泣いている？……先生が？オレのために？それとも『前の』オレのために？

「ウチらの……楽しかった日々が……火野の中では、……無い事になっとるなんて……。ウチは……そんなんイヤやわ……。」

「先生……。」

「しかも、いつかウチらの記憶も消えて……。

もうループなんてしない……。いやや……。いやや、そんなん……。
こんなんなるんやったら、あの事件なんて解決しなければ……っ。」

記憶が、消える。それでこんなにも人を泣かせるだなんて。
なぁ。前のオレ。お前は一体、みんなに何を残したんだ？
そして、オレに何をして欲しいんだ？答えてくれ。

火野　サトシ。オレは一体……。

「先生。思い出せなくて……ゴメン。」

「……ええんや。火野が悪いんちゃう。ウチこそゴメンな。いきなり泣き出したりして。
いやー、職員室で電話せんで正解やったわ。職員室やったら今頃注目の嵐やで。」

「そうですね。今日のオレみたくなっちゃいますよ。」

「じゃあウチも倒れて早退って事になるんやな。」

「まったくもってのオレじゃないですか！」

「「ハハハハハハ」」

ふわりと、体が軽くなる。何かが消えた感覚。
そのとてつもなく重い何かは音もなくオレから消え去り、
オレはどこか清々しい気持ちになった。

明日学校に行くの、怖くないかもしれない……。

「じゃあ、まっとるで。火野。学校、いつでも来ぃや。」

「もちろん、行きますよ。行かないと先生も寂しいでしょうしね。」

「な、何を言うとるんや火野っ、別にそんなこたないで！」

「そうですか、分かりました。じゃあ行きません。」

「そうじゃなくてぇっ！ああ、いつの間にそんな性格になったんやオマエは！！」

「『この』火野サトシは生まれた時からこんなヤツですよ。」

「面倒なヤツやなぁ。」

「よく言われます。」

「まぁ、それはそれでオモロいわ。まっとるで。火野。」

プツッ、と、電話が切れる。時刻は、１：００分。

なるほど、先生は昼休みだから電話したのか。

そして、自分の電話の「切る」ボタンを押す。すると…。

近く、どこまでも遠いモノ［9］

「うおぅっ！メール着信数１５件！？今の電話の間にかよ！？」

とりあえず送信者名と題名を見てみる。

件数	送信者	題名
０１.	「黒井　ななこ」	『メールアドレス』
０２.	「白石　みのる」	『オマエと友達の……。』
０３.	「高良　みゆき」	『お詫びと連絡』
０４.	「柊　かがみ」	『ゴメンね』
０５.	「永森　やまと」	『いいご身分ね』
０６.	「小早川　ゆたか」	『みんなから聞きました』
０７.	「岩崎　みなみ」	『無題』
０８.	「田村　ひより」	『記憶喪失っスか！！』
０９.	「泉　こなた」	『Ｌ５のＫ１』
１０.	「八坂　こう」	『やまとも』
１１.	「パトリシア」	『大丈夫ですか』
１２.	「日下部　みさお」	『忘れちまうのか』
１３.	「峰岸　あやの」	『あやのです』
１４.	「柊　つかさ」	『ごんメンささい』
１５.	「アニメ店長」	『新商品追加だ！！』

見ただけでお詫びのメールを送ってきてるのがわかる人がいれば、
題名では何が言いたいのか分からない人、
まず、文字を打つのに慌てすぎな人（約一名）、
そして確実にいまのオレには関係のないメールマガジンも届いていた。

とりあえず、まずは情報や手がかりのありそうな白石からのメールを見る。

――――――――――――――――――――――――――――――――

名前「白石　みのる」―　題名『オマエと友達の…。』

――――――――――――――――――――――――――――――――

よぅ、火野。１時間ぶりだな。とりあえず、学校でオマエの友達の写真を激写してきたぞ。無断だけどな。
顔と名前を覚えるために、見ておくといいよ。

Ｄｅａｒ　ｓｏｕｌ　ｂｒｏｔｈｅｒ'ｓ　みのるより。

――――――――――――――――――――――――――――――――

ディア　ソウルブラザーズってなんなんだ……。まぁ気にしないことにしよう。

ともかく、色々な友達の写真が送られてきた。……９割以上が女子だった。
少なくとも、メールの差出人の、白石以外の１４人の写真と名前があった。
（アニメ店長のもあった。『兄沢　命斗』というらしい。）

オレは白石になんて返信しようか悩んで、とりあえず
「ありがとう」とだけ書いて送った。

そしてオレは他の人たちからのメールを確認する。

白石が送ってくれた、『前の』オレの友達の顔写真のおかげで、
メールを送ってきた人の顔が把握できるのはなかなかよい。
顔もなにも分からない人から心配のメールが来てもビビるだけだしなぁ。

……それにしても、学校関係のメール送って来たの、女子だけじゃないか。
いやはや、オレはこんなにモテモテ（？）だったのか！
うぉぅ、2年生や1年生にまで手をだしているではないか。侮れないな、オレ。

……いつの間にか、自分の中であの電波話はあったことになっている事に気づく。
「前のオレ」とかいう言葉を連呼している所、母さんに見られたらどうなる事か。

「サトシ！！」

「！！」

なんと！またもやバレてしまった。頭の中でＥｎｃｏｕｎｔｏｒが流れている。
危険フェイズだ。とにかくドラム缶に隠れてやりすごｓ――

「ほら、昼飯よ。学校で食べてないんでしょ。」

そういえばオレはまだ昼飯を食べてなかった事に気づく。

「昼飯て…。おにぎりひとつじゃないか。」

「昼飯代渡したでしょ。」

「買ってないよ。」

「じゃあそのお金を渡しなさい。おかずと引き換えよ。」

オレがもらった昼飯代をどうにか小遣いにしようとしていた事が母にはお見通しだったようで、オレのサイフは乏しい状態に戻った。

昼飯を食べながらメールを見ていて、殆どの人が「お詫びと心配」のメールだったが、何通か気になる内容のものがあった。

例えば、オレと一緒に転向してきて、前のオレ達を救ってくれた人の『器』（だったっけ？）らしい永森さんからのメールだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

名前「永森　やまと」―　題名『いいご身分ね』

――――――――――――――――――――――――――――――――

なんの理由があったか知らないど、こう達、心配してる。

いいご身分ね。いきなり怒鳴ったと思いきや、さっさと帰るなんて。

……でも、何らかの事情があるようね。
みんなの発言もなんだかおかしかったし。

まぁいいわ。

どうせ同じ日に転校し合った同士だし、困ったことがあったら力になる。
それと、私も納得のいかない点がいくつもあるし。

あなたにも力になって欲しい。……よろしくお願いね。

――――――――――――――――――――――――――――――

このメールの文章を見る限り、彼女が『前の世界』を覚えていない、オレとなんら変わりのない立場にいることがわかる。

同じ立場の人となら行動しやすいだろう。オレの頭の中の協力者リストに
「白石　みのる」に続いて「永森　やまと」が追加される。

パトリシアさんや、ゆたかさん、みなみさんに、ひよりさん。
そしてこうさんとあやのさんも、「力になるよ」とメールをしてくれたのだが、
顔も写真でしか見た事が無く、立場的にもまだ親しみにくい気がするので、
頭の中の協力者リストには、惜しくも追加されなかった。

特筆するとすれば、こなたさんのメールはユニークなもので、

―――――――

みんなは、何度も桜藤祭を経験してきたのだ。
もう時間のループなどないこの世界ではもっと特別なことをやりたいのだろう。

なんだかオレだけ仲間はずれにされているようで悲しくなった。

近く、どこまでも遠いモノ［10］

今のオレが、時間のループを今回で終らせるとでも思っているのだろうか……？
前のオレでなく、今のオレ。手がかりもなければ何も知らないオレに期待して？

……考えれば考える程、意味が分からなくなる。こういうときは、深呼吸をして…。

「サトシ！！」

「！！」

なんと！目撃されてしまった！別に見られてはいけない光景ではなかったが、
それでも頭の中ではＥｎｃｏｕｎｔｏｒが流れている。
危険フェイズだ。とにかくスモークグレネードを投げてやりすごｓ――

「食器を早くかたづけに来なさい！！」

「母さん。入るときはノックしてよ。年頃の男なんだからさぁ。気まずいもの見てたらどうすんのさ？」

「全てを受け入れる。」

「意味わかんないよ。まぁ、さっさと片付けますよ。」

そうしながらも、最後に気になったメール。それは、みさおさんからのモノだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

名前「日下部　みさお」――題名『忘れちまうのか』

――――――――――――――――――――――――――――――――

よぅ。元気か？……まぁ元気に決まってるよな。ゴメン、こういうの書くの
慣れてないからさ、始め方どうすればいいかとかわかんねぇんだ。
話は聞いた。記憶、消えちまったんだってな。それと、お前の推理によると、私達も一人づつループ中の記憶が無くなっていくみたいだな。
他のみんなも、その推理が正しいって方向に進んでるよ。

『今まで』も、色々楽しい思い出、あったんだけどな。
忘れちまうのか……。忘れたくねぇなぁ。絶対に。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そうだ。オレは記憶を取り戻すような方向に進んでいたが、そうじゃなかった。
『みんなの記憶が消えていく』かもしれない事を、すっかり忘れていた。

忘れたくない。みんながそう思っていただろう。楽しかった頃を。
かけがえのない日々を。
忘れろ、と言われて進んで忘れるヤツがどこにいる。……忘れたく

ない…、か。

前のオレも、そう思っていたんだろうな。忘れるとわかったら、急に胸が苦しくなって、
切なくて、哀しくて。そうなることは、今のオレでもわかる。

――なんだか、前のオレに対して、罪悪感を感じた――。

……。

……。

「……ん。ここは……どこだ？」

限りなく続く真っ白な世界。白以外に何もない。ただ、透き通った世界にオレはいた。
そこに、一人の人影が見える。

「……オマエは！？」

その姿は紛れも無く、オレ、だった。

「もしかして……『前の』、オレ？」

「返せよ……。」

「は？」

『前の』オレはオレの肩をつかみ、ものすごい形相でオレを怒鳴りつける。

鬼のような形相で。それでいて、子供のような純真さと、悲しみを持った表情だった。

「返せよ！『俺』を返せ！！こなたさんや、みんなと遊んだ日々を！その記憶を！」

「や…やめろ…。」

そのつかむ握力はさらに強くなって、いつしか激痛を覚える。

「『俺』はオマエのものじゃない！！俺のものだったんだ！なのに、いきなりオマエのものになって！！返せ！返せッ！！返せよぉ！！

嬉しくて、楽しくて、怖くて緊張して恥ずかしくてそれでも笑って！そんなかけがえのない俺の思い出たちを返せよぉおおおッッ！！」

「……やめろ。……やめてくれ。やめろやめろやめろやめろやめろ」

「「やめろぉーーーーーッッ！！」」

「サトシ！！」

「！！」

なんと！なぜか母さんが目の前にいる！頭の中でＥｎｃｏｕｎｔｏｒが流れている。
危険フェイズだ。とにかく麻酔銃で眠らせてやりすごｓ――

「いきなり大声ださないの！近所に迷惑よ！！」

……夢、か。なんというか、怖い夢だった。死ぬ夢とか、そんなんじゃなく、
『オレ』という存在全てが拒絶する怖さだ。

気が付くと、時間は７：３０。まだみんなにメールの返信をしていない。
みんなのメルアドを登録して、返信を行った。

ほとんどの人には『ありがとう』と。
こなたさんにはあえて『ウッディ！』の一言だけ、と
そしてメールの内容が

「越前、オマエは湘北の柱になれ！」

と、テニスマンガのセリフと思ったらチーム名がバスケマンガのチームで
しかも何故そんな文章を送ってくるんだ？とつい混乱してしまうような内容
（あせって変な文章を貼り付けたんだと思う。）だったつかささんには

「バスケが…したいです…。」

とギャグで返して、オレの元気さをアピールした。

とにかく、晩飯を食べて明日の準備をしたら寝よう。

色々と体力が必要となりそうな感じだ。記憶的な面で。

さっきの悪夢を見ない事を願い、オレは明日の準備をすませ、目を閉じた。

……。

……。

あ～あ、見ちまうんだなあ。夢。

「また『オマエ』か……。」

二度も辿り着いた、白い世界。
夢だとわかっている。わかっているが、前のオレの事が気になった。

オレの夢なのだから、『前の』オレといっても、
オレの中で勝手に想定された性格、特徴なのだけれど。
それでも、話そうと思った。話さないといけないと思った。

「……でてこいよ。オレに言いたい事があるんだろ?もう一人のオレ。」

「……。」

なぜか、そのオレは現れることもなく、口を閉ざしていた。
だけど、なぜか感じるその存在感。

『其れ』は、オレの目の前によってくる。姿は、見えない。
……そして気がついた。オレは今、この『其れ』に押し倒されてい

るではないか。

抵抗も何もできない。夢だとわかっている。それでも、恐怖はオレから離れない。

ガッシリとオレをつかんだ『其れ』は、やがて声をあげる。

「ククク……。美味しそうだ。その心、程よい純粋さ。まるで子供のようだ……。」

「……だれだっ！だれだよ、オマエ！『オレ』じゃないな！？」

「私が欲しいのは……。そう。魂。欲するものは、お前の心。」

「なにを……言ってるんだ……。」

すると、その『其れ』は、いくつもの『其れら』に分かれていく。

増殖したのだ。

意味がわからなかった。オレではなく、いくつも存在する、『其れ』。

「やめたほうがいいんじゃないかな。」

「フフフ……いいんだよ。面白そうだもん。」

面白そう……？オレを苦しめて、楽しんでいるのか？

……まさか、オレはこの夢の中で……。

……死……。

「マインドクラッシュ！！」

「う、うわあああぁぁぁあああああっっ！！」

ゴスッ！！

オレが押し倒されている状態から飛び起きたとき、姿が見えなかった『其れ』に
オレは思いっきり頭をぶつけた。頭に激痛が襲う。

「あ、おはようございます、サトシさん。」

……目を開けると、そこは白い世界ではなく――――、
オレの部屋だった。しかも、そこには見たことのある人たちが集まっている。

「おぅぉぉおおおお…。これは効いたよ、サトシ君。」

オレの足の上で頭を押さえて悶絶しているのは、こなたさんだった。
そしてオレをおはようの挨拶で迎えてくれたのは、ゆたかさん。

「お～、マジで寝てるヤツに囁いたら効果あるもんなのな。すげぇ～な～。」

「ちょっと可愛そうな気もするけれど…。」

「この時間に起きないヤツが悪いのよ。いいお目覚めになったんじゃない？」

「そりゃあ朝から頭ゴッチンコなら私でもさわやかなお目覚めっスよ！」

目のぼやけが直ってくる。
だけど、さっきの白い世界以上に、この光景の方が夢としか思えなかった。
……そりゃあそうだろう。転校二日目の朝っぱらから……。

「お邪魔しています。サトシ先輩。」

「ふぅん、怒りっぽいイメージあったけど、なかなか可愛い顔してるのね。」

「あれれ～？サトシ先輩に萌えちゃったのかな？やまと～ぅ？」

「ちがっ……そういう意味じゃなくて！！」

自分の部屋に女子がいると思うか？……しかも、大人数。
メールをくれた女子、ほとんど全員がオレの部屋に集結していた。
こなたさん、かがみさん、つかささん、みゆきさん……みんな。

「やまとサン、Ｎｉｃｅツンデレデスヨ！！」

「あんた達！！」

「よし、わかった。何もわかってないが、わかった。とりあえず状況を説明してくれ。」

「わかってないんじゃない。」

「まぁどっちでもいい。……とにかく、この状況はなんだぁあああ！！」

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［2］

みゆきさんの説明によると、昨日の事を不安がり、オレが学校にこないのではと思い、
オレの家に来たところ、みんなも全く同じ考えでオレの家の玄関に走ってきたらしい。

その説明を聞いてこなたさんが低い声で言う。

「シンクロニティ……。」

「なんのマンガですか。」

「そういえばみゆきさんは蟷螂拳とかできるよね。」

「知りません。」

で、みんなが集まって１０分しても起きないので、こなたさんがオレのベットに登ってオレの耳元で色々と囁いたらしい。

「……おかげでとぉってもい～い夢、見させてもらったよ。……こなたさん。」

「え、笑顔が笑ってないよサトシ君。…まぁ一言だけ言わせて。」

「……何？」

「サトシ君…。爆☆殺！！」

「まさか夢で聞こえた『マインドクラッシュ！！』って……。」

「お～♪出た？出た！？夢に出た！？」

素直に喜んでいるこなたさんの顔を見て、オレは心からため息をする。

少しだけ、ホッとしたような気もするけど。

「いくつもの『存在達』ってのはみんなの事だったのか……。」

「どしたの？そんなに夢が怖かった？」

「いや、別に。死ぬなこれとは思ったけどさ。
なんというか『オレ』とか『其れ』とかやけにうるさい夢だったよ。」

「なっさけねぇ～な～。」

「しょうがないだろ。みさおさんだって、
ああいう状況になったら戦慄を感じるって。」

「あ、名前もう覚えてくれたのか？ありがとな～。」

ん？……なんだか覚えた、というか普通に条件反射で名前が出た気がする。
この人の名前は……日下部　みさお　さんだったっけ？

なんだか、昨日と違う。頭が冴えているカンジで、みんなの名前がパッパと浮かんでくる。……もう少し頑張れば思い出せそうな気もするが。

「ねぇねぇ。私の名前は覚えてる？」

「あやのさんですよね。そして右にいるのが、かがみさん。それと……。」

驚いた事に、オレは思い出してもなく、直感で出た名前を言うだけで、
全員の名前を答える事が出来た。昨日名前をみたからではなさそうだ。

「お、これは幸先いいんじゃない！？名前だけじゃなくて、何があったか
思い出してみてよ！インパクトのあったことだけでもいいからさ！」

「ん～……。いきなり言われてもな。」

「なんか思いださねぇか？」

みさおさんの顔が近づく。……不思議と、その接近した顔には覚えがあった。
デジャヴだろうか。その光景から、なにがあったかを思い出す。

……たしか、あれは……。

「……わッ！？」

ボンッ。と音を立てていたんじゃないかと今でも思う。

漫画的な表現だとオレの頭の上に蒸気が出てるんだろう。
思い出してはいけない記憶を思い出してしまった気がする。

「どうした？サトシ？」

「い、いや、何でもない！何でもないっっ！！」

「大丈夫？顔、赤いわよ？」

「そ、そんなことないっ！絶対ないっ！！」

絶対あるなぁ、と、オレは自分で言いながら思っていた。
みさおさんの顔を見て思い出したこと。それは……、演劇が終わった後の事だった。

演劇が終わって……。木の幹で昼寝していたオレをみさおさんが起こして……。
それから……それから…。

またもや顔が赤くなる。今にも爆発してしまいそうな程に。
そう。オレは……いや、できては無かった気がするけど。
みさおさんにオレは。……告白なんてしちゃったような記憶。

「わぁ…。首筋まで赤くなってるよ。」

こなたさんの顔が近づく。その顔にまた覚えがあって…。
思い出すと、また、顔が赤くなる。告白だけじゃない……！！
キス？接吻！？口付け！マウストゥーマウスじゃねえかコンチクシ

ヨウ！！
しかもここにいるみんなの殆どに……！何やってんだよ前のオレ！！
「大丈夫なの？いきなり赤くなって。」
かがみさんの顔が見える。
「う、うわっ！いや、大丈夫、大丈夫だからぁッ！！」
「どうみても大丈夫じゃないよ。熱があるならいってよ。」
つかささんの顔が見えて……。
「ふおっ！いやッ！別に異常ないですッ！さぁ早く学校に行こうか！！」
「……まぁ、大丈夫ッスよ。行けるって言うなら行けるッス。こんな状態、私からしては珍しくないッスから。」
ひよりさんの顔が……。
「うぉう！！う、うん！そうですとも！！さぁＬｅｔ＇ｓ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｓｃｈｏｏｌ！！」
「ｔｈｅはいらないですよ。」
みなみさんの顔が見えてしまう前にオレは急速に洗面台へと走った。

その後、登校中にたくさんの女子に囲まれるオレを
睨み付けてくる男子の目線が痛かったが、

それ以上に、その女子のほとんどに
目を合わせられない状態だったのが辛かった…。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［3］

「え〜、せやから、宗教上の問題によって魔女狩りを
魔女神判と変更する必要があったんやな。ここテストでるで〜。」

世界史の授業。珍しく居眠りをしていないオレは、
真面目にノートにメモを取って……いるのではなく。

「あぁぁあぁぁあぁぁあぁぁ。なんだよ……。『前の』オレよ……。
お前ってヤツはこんなにもすけこましだったのかオイ……。」

オレは告白シーンを頭の中で何度もリピートし、顔を真っ赤に染めていた。
いつの間にかノートにはビッシリと文字が書かれている。

「みゆきさん　かがみさん　ゆたかさん　みなみさん　ひよりさん
こなたさん　パトリシアさん　みさおさん　つかささん　……。」

そう。オレのノートにはいつの間にか告白されたり、
そしてした人たちの名前がビッシリと並んでいた。

そしてその文字はどんどん読み上げられていく。
……読み上げられていく？

「みゆきさん　かがみさん　ゆたかさん　みなみさん　ひよりさん
こなたさん　パトリシアさん　みさおさん　つかささん　みゆきさん
ゆたかさん　こなたさん　パトリシアさん　みさおさん　つかささん

みなみさん　ひよりさん　こなたさん　かがみさん　ゆたかさん……。」

「うわっ！？先生、いつの間に！！」

「友達の名前覚えよったんかぁ～。えらいこっちゃな～。」

「きょ、恐縮です……。」

「でっ♪もっ♪ねっ♪」

う〝っ！殺意が……。

ゴスッ！！

「ふぐり！！」

オレの頭に拳骨が打ち落とされ、痛感がほどばしる。

「授業中にやることやないわな～。」

「ご、ごめんなさい……。」

そうして、授業は淡々と終わっていった。

「で！！」

「うわ、いきなり何だよこなたさん。」

授業後、魂の抜けた虚ろな目でボーッっとしていた
オレにいきなりこなたさんが詰め寄る。

「演劇の役割を決めたいのだが。」

「…あぁ。アレね。了解。」

「でも、もう決まってるけどね。」

「は?」

「シロウ役。キミの演技は毎回スバラシイから、今回はキミの為に席を
あけておいたんだよ。かがみと初共演だよ♪がんばりたまへ~。」

シロウ役…。先生が言っていた通りだ。かがみさんと初共演…。
てことは、いままではかがみさんがこの役をやっていたのだろうか。

「シロウ役か。いつもはかがみさんと共演してなかったみたいだけど、
かがみさんはシロウ役だったの?」

「あ、そうか。『今の』サトシ君は何も知らないんだっけ。
かがみは他の女の子のキャラ役でね。いつもはかがみが足をねんざしちゃって、
これから君がやる男の子のキャラ役だった人にその女の子のキャラの役をしてもらって、

それでキミが男の子の役をすることになったの。」

「ふ～ん。その男の子のキャラってのがシロウってわけね。」

「そゆこと！で、その女の子のキャラの役はやっぱりかがみがいいから。
よ～くかがみの事を見守っておく事！わかった？」

「りょ～かい。善処しますよ。」

演劇……。それを思い出すとなんだかやはり恥ずかしいものしか浮かばない。
やっぱり少しだけ顔があからむ。演劇の後……。わかっていることは、あの時だけ。

「それと……。」

「ん？」

「いや、なんでもないよっ。あえて言わないでおくね～。」

「ええ？……まぁ、いいけど。」

そして積み重なる退屈な授業を受け流し（ちゃダメだろ！？）
昼休みが始まった…。

「へイ！サトシくんっ！！では早速屋上にいこうじゃないかあぁぁぁあああッッ！！」

「うお！？なぜそんなにハイテンションなんだこなたさん！」

「昼ですよ！学校で手に入る唯一のフリーダムですよ！」

いや、一応規則は守らないといけないから、リバティになると思うんだが……。

そんな突っ込みを心の中でしていると、それに気づいたのかこなたさんは

オレの服を掴んで強引に引っ張り、オレを引きずり始めた。

「いいからくるんＤＡ☆！！演劇についてとかチアについてとか話さないとね！」

オレはこなたさんにずるずると引きずられていく。

仕方ないね。オレ、体重軽いし……じゃねーよ！！

なんでこんな小さい子がオレみたいな一般男子を

軽々しく引きずっていけるんだよ！オレが軽いからとかいうレベルじゃない！！

「いや、こなたさん、え、あれ？力強くね！？」

「お～、来た来た。遅いぞ、こなた、サトシ君。」

かがみさんとみんながそこで昼飯を食べていた。

……あれ？昼休み始まってからすぐにこなたさんに引きずられて行ったよな。

なぜオレよりもみんなのほうが早いんだ？

「チンタラ歩いてるからよ。みんなはやる気十分なんだから、これくらい当然よ！」

なんだか普通に読心されてるが、気にしない。

気にしてはいけないと神が言っている気がする。

「で、演劇の役目は決まってるそうだね。オレはケンシロウ役だったっけ？」

「シロウよ！なんで一気にグロテスクな方向に変わるかな！！」

「そうなのか…。北斗百裂拳くらいならできるのに。

意外と毎日練習してたんだぜ、オレ。」

「あんなメチャ早い手の動き、ムリに決まってるでしょ。やってみなさいよ。」

キタ！オレの十八番である百裂拳をリクエストするとは、

この女、その命も持ってあと数秒だな。

オレは全身の筋肉を拳に伝えるように緩やかに動き、

右から見れば百獣の王、左から見れば烈火の朱雀、

何一つ無駄のない美しい構えを取る。

そしてオレの渾身の拳が音速を越えて放たれる――！！

「ほぉ　あぁ　たぁ　たぁ　たぁ　たぁ　…。」

「遅ッ！！もう連打とも呼べないわよそれ！」

「違う……。これは遅いんじゃない。早すぎて遅く見えるだけ――」

「懐かしいネタはもういいから。とにかく座ってよサトシ君。」

こなたさんが珍しく仕切ってる。えらくやる気満々だなぁ。

さて……、オレも座って昼飯の弁当箱を開けて、と……。

『ハズレ』

ハズレ……？

弁当箱のなかには「ハズレ」と書かれた紙が一枚入っているだけだった。

「ちょっとまってくれよかぁさぁあぁぁあん……。」

「ぶはっ！ハズレって！サトシ君のお母さんも面白いもんだねぇ！
ってか吹いたミルクティー返せ！」

こなたさんが豪快に吹いた。
オレの母親のこういうところがいけないのだ。
おちゃめとかじゃすまないぞこれは……。

「仕方ねぇなぁ。ホラ、ミートボールやるから、元気だせよ。」

オレはみさおさんからミートボールをもらう。
オレは「ありがとう」といってほお張った。
みんなはそれを赤い顔をしながらしかめっ面で見つめていた。

「みさちゃんが……大好物のミートボールを！？」

「な、どうしたのあやのさん！」

「私でさえ、数回しかもらった事がないのに！」

みんなの注目の意味が分かった。
……ようは珍しい現象だったのだろう。

「別に。腹減ってるっていってるからあげただけ。
コイツが弁当もってきてたらあげやしね～よ。」

「みさおさん……そういわれるとちょっとショックなんだけど。」

「な、別にショック受ける事じゃないだろ!?結果的にあげたんだしさ!」

みんなの注目はなぜかおさまらない。ため息ついたりとか考え込んだりとか。
ミートボール一個がそんなにスゴイことだったのだろうか？

「まぁ、仕方ないわね。私のも少し分けたげるから、食べていいよ。」

「お、サンキュ。やまとさん。」

そしてみんなは少しづつオレにおかずやおにぎりを分けてくれて、一人分の弁当くらいにまで集まった。
だが……、いまだに何人かのしかめっ面はなおらなかった。

「さて、演劇のはなしだけど…。」

「オレはシロウ役だったっけ?台本とか、ある?」

「あるけど、読み終えるのにかなり時間がかかりそうよ?」

その台本はとてもブ厚く、その紙一枚一枚も字で真っ黒になっていた。
読み終えるまでに軽く一ヶ月は掛かりそうである。

「はは……。これは読み応えありそうだね。」

「それと……、『前の』サトシ君が悩む事になったシーンがあるのだけれど。」

あやのさんがページを開く。「シーン５８」と書かれていた。

「ここ、よく見て。」

「あ、うん。」

「え～っと、『ナレーター：「遠い、遠い夢を見た。」』」

「その一行前！」

「『セイバー役、シロウ役が近づきあい、キスをする。』」

……。

「マジか。」

「マジです。」

「大マジか。」

「えらくマジです。」

「あやのさん……キスって、なんだか知ってる？」

「そりゃあもう、とても……。」

「なんでとても知ってるんだよ。」

「あら、そこつっこんできます？」

オレとあやのさんが茶番を繰り広げている中、
こなたさんが手を上げながら言う。

「あ～、大丈夫、大丈夫。セイバー役私だから。」

そっか。こなたさんがセイバーか。なら大丈夫…。

「じゃないよねぇえええええ！！全然だいじょばないよねぇえぇえ！！
どっから大丈夫って言葉が出てくるのかなぁ！？キミはァア！」

「大丈夫だから大丈夫なんだよ。キスしてもおかしくない関係になればいいんだし。」

「あ、そっか。つまりオレがキミを攻略すればいいんだな。」

「むお。こりゃまた面白い。いつもなら私が『キミを攻略する』って言って
サトシ君が『え～！？』ってなるのに。攻守逆転かね！」

そうそう、前のオレがどうであろうとオレはいつだってガンガン…。
……っておい！？…否定しないのか！？冗談で言ったのに！

「いや～いつも私がキミを攻略してたのになぁ。失敗多かったけど。

」

「攻略て……。ゲームじゃないんだぞ。オレも冗談だったのに。」

話がこんがらがってきた。とりあえず、原点をツッコもう。

「なんで演劇なのにマジでキスしちゃうんだよ！まずそこを訂正しようよ！

大人の事情により飛ばしちゃえばいいじゃナイ！！」

「ダメ。」

「なにゆえ！」

「これがないと盛り上がりにかけるの。

迫力もないし、なんといってもラストフィナーレなんだもの。」

「ラストフィナーレだからなんなんだよ！！」

ポン、とこなたさんがオレの肩を叩く。

そしていやらしい笑みを浮かべ、オレにささやく。

「とにかく、攻略開始は明日からね！楽しみに待ってるよ！！」

「しないよそんなの！！はぁ、なんか、もう疲れたよ…。」

キーンコーンカーンコーン（↑相変わらず捻りのない学校のチャイム

「あ、昼休み終わりだね。じゃ先に戻ってるね。」

こなたさんはそそくさと戻っていった。そしてオレも教室に戻ろうとする。すると…。

「「「キスしないの？」」」

後ろの皆さんの声がオレの中で悲しくエコーした…。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［6］

「……ふぅ。思わず走ってきちゃったよ。」

屋上から颯爽と出て、その途中の非常階段。私はそこにいた。
私以外に誰もいない、私が悩む姿を誰にも見られない。私だけの、
非常階段。

「なんで……、なんだろうな。」

いつものように「攻略開始」といっただけなのに。まあ、される側
だったけど。
でも今までみたいに演劇が終わったらすぐに時間が巻き戻るだけな
のに。
なぜか、火照る顔。いつものギャルゲのように、ただ、繰り返すだ
けなのに。

なにか……、忘れている気がした。きっと一番忘れたくないものだ
った。
けれど、頭から出てこない。……サトシくんもこんな気分なんだろ
うか。

演劇が終わって……、すぐに時間が巻き戻った?
いや、むしろその後に大事な事が……。

思い出せない。私は頭をかきむしる。
それでも、そんな姿は誰にも見られない。心配されない。

誰もいない、誰も見ない。私だけの非常階段。

でも、なにか寂しい感覚を感じていた……。

「はぁ～あ。こなたさんとキスシーンねぇ……。」

なんらかの抵抗をしておけばよかった。台本を作ったあやのさんにムリを承知で

「あやのさん台本かえて！」だとでも言えただろうに。

ラストフィナーレがなんだ！さすがにそれでそこまでやるのは文化祭らしくないぞ。

あやのさんがその台本でなんでも思い通りにできるっていうなら、まずはそのふざけた台本をブチ殺す！！

……なんて、結局オレには無理なんだろうけどなあ。

「お～い！」

「あ、みさおさん？」

みさおさんがオレの前にやってくる。走ってきたようだが、急用だろうか？

「どうしたの？そんなに急いで。」

「はぁ、はぁ……。ふぅ。……あのさ。」

そのみさおさんの顔はとても真剣だった。

思わずオレも真剣な顔をする。キリッと。

「とっても重要なことなんだ。」

「う、うん。」

重要なこと……。普段、みさおさんがこんな真剣な顔をするキャラじゃなく、
天然なカンジの人だった事もあり、その言葉にオレは耳を傾けた。

「……何だっけ？」

「……はい？」

「すっげぇ重要なことなんだ！でも思い出せねぇ！
なんか思い出さないか！サトシ！」

「そんな聞いてもない事思い出せだなんて！
そんな重要な事なら忘れないでよ！！」

ちょっとしたツッコミのつもりだった。
……なのにみさおさんは急に顔を暗くして俯く。

「……ごめん。」

「え？」

まさかそんな本気で謝られるとは思わなかった。
なんかこう、「あ～、まあどうでもいいじゃん？」みたいな流れになると思ってし。
みさおさんの性格からして。

「……なんか、思い出さないといけない事があった気がしてさ。
確信は無いけど、少しだけ思い出した気がしたんだ。」

なんのことだろう……？その『重要な事』ってのが
演劇やチアの事じゃないのなら、ひょっとして、前のオレの事だろうか？

深刻そうな顔を見ていると、そうとしか思えない。そうだとすれば、
もしかしたらオレだけでなく彼女達もほんの少し記憶が消えているのかもしれない。

自分だけ、というのがどうもオレの中では引っかかっていたからだ。
そしてその自分でさえ『前の』記憶がわずかにある。

相変わらず実感はない。それはそうだ。『記憶がなくなった後』人間は、
『なくなる前』の人間とは全く違う人物と言っても、過言ではないのだから。

とにかく、このままの状態だと何も進まないので、

情報を手に入れるのも含めて、みさおさんに問う。

「思い出したって……何を？」

「いや。オマエが思い出してくれないと、ダメなんだ。
自分だけ思い出してても意味がなくてさ。ゴメン。わかりづれぇな。
」

どうしてか、申し訳なさそうに後ろ頭をかく
みさおさんの姿がとても哀しく見えた。

「……いや、オレだって思い出したことは少しある。
力になれるかもしれないから、言ってくれよ。」

「『力になる』っていう時点で、多分思い出してないんだろうなぁ。
まぁいいや。」

すぅ、と息を吸うと、改まった態度でみさおさんはこちらを見た。
まっすぐ、オレの目を見据えている。

その視線に、少し胸が高鳴るの感覚を覚えた。

「……一回しかいわねぇから、良く聞いとけよ。」

一回しか言わない。その言葉を聞いたオレは、
聞き逃さまいと、耳を立てる。

そして何秒もの時が流れる…。

「……あ～。うん。」

「!!?　もしかして、もう言った!?」

「いや～。なんというかだな。あ～、まあどうでもいいじゃん?」

……なったよ。なんかこう、

「あ～、まあどうでもいいじゃん?」みたいな流れに。一字一句違いも無く。

「どうしたんだよ!気になるじゃんか!」

「う、うるせぇな!やっぱ忘れたんだよ!」

「忘れたって……どんだけ～。」

「やめろ!柊妹による哀れみの目を忠実に再現した目でこっちをみるなッ!」

ベチッ、とオレの頭に張り手を決めて、ベーッと舌を出しながらみさおさんは教室に向かって走り去っていった。

……オレも教室に戻るとしよう。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［8］

数多の生徒たちを苦しめる食後の授業だが、意外と眠くなりはせず、昼食の栄養のおかげで逆に目が冴えていた。

無事に眠らずに授業をやり過ごす事ができたのだが、
それでもノートはほとんど取れていない。

ただ、それが食後の授業であるというだけで、
『少しでもノートを取った』という行為をとても素晴らしいものに感じさせ、
オレがなかなかレベルの高い高校に属している事を忘れてしまいそうになる。

いつもノートなど取らずにテスト前に猛勉強でやり過ごしてきたのだ。
ノート提出など言い渡されようものなら大慌てだ。

なんだかんだで放課後。放課後まで学校にいたのは一応これが初めてだ。
白石は「用事がある」と言って大急ぎで帰っていったのだが、
この学校での頼れる情報源はアイツしかいない。

白石からのメールを期待し、ケータイをせわしく開け閉めしながらオレが昇降口にたどり着いたとき……。

ＷＡＷＡＷＡ忘れ物～♪

「お、来た！白石からメールだ。」

アイツから手に入る情報はいつも有力なものが多く、
オレがどう人に接していけばいいかわかりやすく書いてある。

だが、今回の内容は情報ではなかった。

「『至急、体育館に来る事。』……。用事があったんじゃなかったのか？アイツ。」

オレに体育館に行く必要性など全く無い。
行ったからといって何かがある確証も無い。

それでも親友の情報なので、何か意味があるとまずは信じる事にする。
というかあちらにも意味のないウソや冗談をぶちまけるメリットなんてない。

……迷ったら、まずは行動だ。
オレはそそくさと体育館へ向かう事にした。

「お～い、火野！こっちだこっち～！！」

白石の声が聞こえる。他にも色々人がいるようだが、なんだろう？

「やぁ、火野君。」

「あれ、こなたさん？あ、みんなもどうして？」

そこにはなぜかみんながいた。何かの話し合いだろうか。

「当たりよ。さっき屋上で話してたチアの件について会議してるの。
アイドルの小神あきらさんがチアの前の空き時間に
特別出演してくれる事になってるから、それについて、ね。」

チョイチョイ、とかがみさんが後ろを指差す。
そこにはオレはアイドルにそこまで興味はないので、あまり見たことは無いけど
名前は知っているアイドル、小神あきらさんが白石と共に立っていた。

「大体、内容は決まったから。アンタは殆んど関係ないけど、一応挨拶しといたら？
あきらさんもこの辺では有名だし、折角だからサインでも貰っとけばいいじゃない。」

まぁ、あきらさんのサインなら自慢になりそうだしな。
とりあえず、あきらさんがオレに気づいたようなので、そちらに向かう。

「こんにちわ～☆あきら、この学校で持ち歌を披露する事になったんだけどぉ、なんだか緊張しちゃってぇ～。」

ワオ。なんというアイドル口調。なんてったってアイドルってか。
人差し指を顔に当てつつ喋るところとか磨きがかかってるな。

「ケッ。仕事中でもねぇのに普通の喋り方ができねぇのかよ。」

白石による一言。うわぁ。おもックソ吐き捨てたよこの人。

「んだと白石、テメー最近調子乗っちゃってんじゃねーのk」

「るっせー！なぁにが「三十路岬」じゃ！
そんなしッッッぶい演歌なんか、チアの前で歌うような曲じゃねぇんだよ！！」

「んだとコラおま……って、あ♪紹介遅れてすみませ～ん☆
世界のスーパーアイドル！小神あきらで～す！あ、このＣＤどうぞ♪」

めちゃキレてたあきらさんがいきなりグッドスマイルで
こちらを向いたかと思うと、ＣＤを渡して丁寧（なのか？）に挨拶をしてくれる。

「あ、「三十路岬」ね。これはどうも。オレは火野サトシです。
……で、オレは何でここに呼ばれたんだ？白石。」

「チアの前の特別出演枠についてなんだが……。」

白石が説明を始める。こういうところからしてやっぱりコイツはラジオ番組の司会なんかに向いていると思う。

「まずオマエ、喧嘩強いか？」

喧嘩……？なにか暴力沙汰でも起こすつもりだろうか？

「あ、いや喧嘩じゃなくてもいい。とにかく人を制する力を持ってるかって事。」

「喧嘩は勢いでどうとでもなりそうけど、力はあんまりないぞ？
ってか喧嘩は大キライだ。人を傷つけるのは決していい事じゃないし。」

「そうか。まぁそれならムリかもしれないが、一応聞いておいて欲しい。
実はコイツの事務所から、コイツ起用するなら警護つけろって言われてな。」

「コイツじゃねーだろあきらさまだろ！」

「るっせーよ説明中だよ！まずなんでテメーなんかに警護が必要なんだよ！
狙うヤツなんていやしねーよ！！事務所もどうかしてんじゃねーのかぁ！？
まだそこのチアメンバー、女子高生のみなさまの方が警護が必要だぜ！」

「テメーさっきから調子乗り過ぎじゃねーのかコr……。」

二人は初対面じゃないのだろうか？そして何故、仲が悪いんだろうか。
普通ならそういう疑問を抱くが、オレはそうでもなかった。

ネットにＵＰされていたラジオ番組、『らっきー☆ちゃんねる』のレギュラー二人組だと知っていたからだ。

そしてそのラジオ番組では、ある事件をきっかけに、
白石とあきらさんが仲が悪くなっていたのだ。

「ハイハイハイハイ。とりあえず続きを。」

このままケンカさせておくのもなんなので、とりあえず仲裁した。

すると白石は意外とすんなりケンカをやめ、説明を続けた。

「だから警護、つまりボディーガードが必要なんだな。意味ほとんど同じだけど。
ま、何人必要だとかは指定されてないから一人だけしか呼ぶつもりはないがな。」

「ふぅん。で、それをオレにやれと？」

「そういうこと。一応チアとの合同企画だからな。
みんなの練習見たり、色々手伝ったりできるだろうから、やっとけ。」

「なんでオレが手伝いを……？」

手伝いをしてくれと頼まれたら、まぁ力になるつもりだが、
白石の言い方だと「手伝いをしたほうがいい」と取らせる言い方だ。

オレに何か手伝うメリットでもあるというのか？
そう悩んでる内に、白石がオレにボソッと言った。

「基本、オマエはみんなと何らかの共同作業を行って
記憶をフラッシュバックしたり手がかりが掴めたりしてたんだ。
できるだけオマエがみんなと接する時間を増やしたほうがいいと思ってな。」

「どうせ手ごろなボディーガードが見つからなかったからオレにしたんだろ。」

「……！！　い、いや、んなこたぁねぇさ！！」

笑顔引きつりすぎ。バレバレ。

「……まぁいいか。オマエが言ってること、あながち、
というか殆んど間違ってないしな。手伝うよ。」

オレが承諾すると、すかさず小さなアイドルが話に入る。
はやく話を決めてしまいたいのだろう。

「え～☆　いいんですか～？」

でたよ、アイドル口調。さっきの白石とのケンカが本音だろうに。
でもまぁ、仕事に口出しなど素人がするものではない。
アイドルは可愛くなければいけないのだ。それをジャマするのはＮＧってもんだ。

「うん。でもオレ一人じゃ心細くないかな？」

話している途中、白石が不機嫌そうな顔で俯きながら
壁にすがっているのが見えたので、白石に目線を泳がせた。

（チッ……。あきらも火野も人によって口調を完全に変えやがって。
火野のヤツ、俺に話すときと女子に話すときじゃ大違いじゃねぇか。）

白石の呟きが聞こえる。それを聞いた俺は白石の足をツンツン、と蹴って
こちらを向かせる。白石が耳を傾けたところで、オレは白石に囁く。

（白石……。逆に考えてみろ。オレに「……うん。そうだね。」とか、
そこのあきらさんに「白石くぅん☆」とか言われて、オマエ嬉しいか？）

白石はその情景を浮かべているのか、いったん上を向くと、
「うっ……。」っと声をあげ、顔を真っ青にしてオレに視線を戻す。

（……それはご免こうむる。）

（だろうが？）

すると、あきらさんが「無視してんじゃねーよ」と
表情で語っていたのでオレは焦ってあきらさんに視線を戻す。

「一人は心細いけど、そこはアシスタント君が何とかしてくれるので～☆」

「なんで俺なんだよ！！俺は普通に陵桜祭を楽しむんだよ！！」

「知らねーよ！私だってあの時オマエが暴走しなけりゃ
ここで仕事することもなかったんだよ！あ～！私の休日ＧＡＡＡＡ！！」

「そりゃオマエが折角俺が取ってきた水捨てるからだろうが！
休日なんて、時間ループしてんだからいくらでもあるだろ！！」

「それだったら陵桜祭も何回も行われてんじゃねーか！
なんで今回に限ってゴットゥーザ様が仕事仕組んだ事になってんだよ！！」

……まったく、この二人は仲がいいのか悪いのかわからない。

だが、さっきから話を聞いてると、このループする時間の中で二人が陵桜祭で仕事をするのは始めてなようだ。

「……二人とも散々だね。ゴットゥーザ様って誰？って聞いても教えてくれないんだろうけど。」

するとあきらさんが恐る恐る口を開く。

「……まぁ、絶対支配者っていうか…。」

「うん。ありがとう。その世の終焉を見たような表情とその姿勢で十分その人の怖さが伝わった気がするよ。なんというか、いろいろとゴメン。」

「いいですよ……。私もあの人が見てないなら仕事口調やめられますしね。」

あきらさんはあたりを見回しつつ口調を元に戻した。

口調を素にするだけでひどい目にあうのだろうか……。考えるだけでコワイ。

だがアイドル口調をやめたあきらさんに、全く違和感は感じなかった。

「ん。そのほうがオレも話しやすいよ。そっちの方が違和感ないしね。」

するとあきらさんは顔をしかめる。ヤバ！地雷踏んだ！？

そういや、アイドルにアイドル口調じゃないほうがいいって言うってことは、
オマエにアイドルとか向いてねーって言うみたいなものじゃないか！！

「それはどういう意味で…？」

「あ、いや！別にアイドルとしてダメだとかそういうわけじゃなくて！
なんというかそっちのほうが自然な感じで可愛いから～……。」

クスッ、と、あきらさんが小さく笑う。

「似てる。」

「え？」

「サトシさん……でしたっけ。いや、はは。大原に似ててつい…。」

「……大原？」

「……友達です。本当は大原とあと二人と私で陵桜祭を回る約束をしてたんスけど。」

友達、か。

少し、オレの心にその言葉が響く。

どちらかというと、とても虚しく。

この学校にきて、まだオレはなにもない状況。
ただこのみんなの名前をなぜか知っているだけで、
実際、この子達の事は何も知らない。あっちが知ってるだけだ。

その「あっち」も少しづつオレの記憶を失っていく。
友達がいない状況に戻るという事。
そして、「あっち」がまた友達になってくれる保証もない。

始めからに戻るだけだとしても、
この子達とうまくやっていたのは『前の』オレ。

オレがこれから友達ができるかなんてわからない。

どこか、悲しかった。

どこか、苦しかった。

「どうかしました？」

「あ……いや。何でもないよ。
それにしても芸能界ってのはキビしいものなんだね。」

「こ～んなヤツが司会できるぐらいですから、こいつと比べるなら

たぶん、サトシさんなら一瞬でスターなんじゃないっすか～？」

あきらさんは白石の肩をポンポンと叩き、
こちらを向かせると白石を挑発し、少しおどけてみせる。

「んだとこのガキゃっ！！俺がこの役もらうまでどんだけ苦労したと思ってんだ！
毎晩毎晩、ＣｏＣｏ壱でメンチカツ焼いたり、叙々苑で何枚の肉を焼いたと！！」

「数えてんのかよ。」

「１３枚。オレは和食なんでな。」

「何だコイツ……。」

二人のやりとりを聞き、オレは少し笑った。
彼らを見ていてわかった事が一つある。

この人たち……。仲、良すぎ。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［10］

「とにかく、火野！お前にはコイツのボディーガードを頼む。」

「厄介になりそうか？」

「いや、ステージに登ってきたりとかするヤツを止めるだけでいい。殴ってでも近づこうとするんであれば、やりかえして放り出してくれ。」

「まぁ、ケンカは負けた事あまりないし、少しは力になれると思うよ。」

オレのセリフに驚いたのか、白石は「うぉわッ！」な顔をする。今にも「ごゆっくりぃ！！」と走って逃げていきそうだ。

「こんな……、ヘタレの塊にしか見えないようなヤツが？」

「余計なお世話だ。」

「まぁ……、いいか。一応頼りにはなるってこった。」

「信用してないな。」

「あたぼうよ。」

「まあ勝ったこともないしね。」

「しばくぞオマエ。」

喧嘩とは無縁の人生だったので仕方がない。
なにも思い出す必要のない、色のない人生を送っていたオレにとってそれをしたことがあるのかさえ思い出すことはできないのだ。

「じゃあ、俺からの用事はこれで終わりだ。」

「なんだ。オレの記憶に関しての手がかりはないのか。」

オレが落胆した声で言うと、白石はニヤリとすると、
白石は集まって会議をしているみんなを指差して言った。

「あるだろ。ここに何個も。」

「……みんながどうかしたのか？」

オレは不敵にニヤリとした白石の表情に
一抹の不安を抱き、少しオドオドと聞いた。

「お前……。オレの話、聞いてたのか？」

白石は呆れた表情でこっちを見る。

「最初に言っただろ。このみんなと触れ合う事でオマエが記憶のフラッシュバックを見る事が多かったって。」

「……なんだ。その話か。それはわかってるよ。
で、だったらさっきの不敵な笑みはなんだったんだよ。」

「顔に出てた？」

「それはもう。」

タハーッ、と白石は笑いながら後頭部に手を当てる。
そしてまたニヤリとしながらオレの耳元に口を近づけ、囁く。

「立てちまえってんだよ。」

「立てるって……何を？」

「フラグだよ。フ・ラ・グ。」

「はぁ！？」

いきなり、こなたさんレベルの専門用語を言い放つ白石。
どこでそんな言葉覚えたんだコノヤロウ。

「いっとくが、俺はギャルゲとかはやってないぞ？」

「じゃあなんでそんな言葉を知ってるんだよ。」

「泉がいつも言いまわしてる。」

……つまりは感染したってことですか。あの子も人を染めるのはうまいもんだな。
白石が昨日言ってた……。ゲーム内マネーのティーク、だっけ？
一万円分も持ってたってことは、やっぱそれも感染と影響なんだろうな。

「せっかくのチャンスなんだ。一緒に帰るかなんかすればいいじゃ

ねぇか。
意外とホイホイついてくるぜ？そういうの。」

「だからそのいやらしい表情と手つきをやめろ。
しかも一緒に帰るったって、誰とだよ。」

「あ～、もう、いい加減脊髄反射的な返答はやめないか、この鈍感ヘタレ。」

「どっ……。」

「選ぶんだよ。お前がな。泉曰く、選択肢？分岐点？…どうでもいいか。
つまり！オマエはこの花園から一厘の花をおもちかえりできるってこった。」

「なんじゃそら。じゃあお前はどうするんだよ。
……あ、そうだ。あきらさんと帰らなきゃいけないんだっけ。」

というかなんでこう、コイツの言葉の言い回しはいちいちいやらしいというか、
一昔前の胡散臭いそっち系のビデオに出てきそうな単語ばかり使うんだ。

「知らねーよ。オレはせっかくだからこのみゆき様を選ぶぜ！
この安定したバスト！そして締まったウェスト！そして大きすぎないヒップ！
何よりあの破壊力抜群の萌え要素！泉が褒めるのもわかるってもんだぜ！！」

「え？ツンデレ好きなオマエなら絶対かがみさん選ぶと思ってたのに。」

的確にツッコミを入れたオレに白石は両手を上げて驚く。
こいつ、時々オーバーリアクションだな。面白いけど。

「ぬわぁんで知ってるんだ！？」

「『らっきー☆ちゃんねる』だっけ？ネットで掲載されてたから聴いたよ。
知り合いについてトークしてるときに、ツンデレについて熱弁してたじゃないか。」

「聴いてたのかよ…。聴いてくれてるのはありがたいけどこういうときに使われるとちょっとな……。」

「ついでに曲も聴いてやったさ。」

「もういい。俺が悪かった。やめてくれ。
いいからお前は会議にでも参加してろって。」

白石が照れ隠しにオレを強引に会議側に押したので、
オレはこれ以上いじめるのはやめてみんなのところへ行った。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［11］

会議の内容はそれほど難しいものではなかった。
内容はというと、

まず、チアを踊るメンバーは完全決定だそうだ。敬称略で

こなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやの、
ゆたか、みなみ、ひより、パティ、こう、やまと。

そしてチアの前にあきらさんが「三十路岬」を歌うんだとか。
司会として白石が入るようで、なかなかスムーズに進みそうではある。

そしてオレはあきらさんのボディーガード。
つまりあきらさんが歌い終わったらオレは自由時間なわけだ。

まぁ、桜藤祭のオープニングだから生徒全員強制で見ないといけないわけだけど。
というか自由でもモチロン見るけど。みんなの発表だし。

さて、会議は終わり、みんな帰る準備をし始めたわけだ。
オレは誰と帰るかを決めることになるのだが――。

「……。」

そこで一人取り残されたあきらさんを送ることにした。

「いや、ホント最初から最後まですみませんね、世話していただいて。」

「気にしてないよ。しかも、ウチの文化祭を盛り上げてくれる人なんだから、
……っていうか、普通だったらオレが敬語を使うべきなんだと思うけど。」

「別にいいっすよ。私もそんな敬われるほど有名じゃないですし、楽屋じゃまったく頭が上がらないから慣れてしまったというか……。」

……こんな小さな子が大変な道を通ってるんだな。
小さな体に大きな決意、と言ったところだろうか。オレは素直に感心する。

そして、白石だ。この子は楽屋での態度が身に染みちゃってるんだろうけど、
アイツと話してる時だけ、素直だった。

アシスタント、ね。なかなかやるじゃん。アイツ。
オレの中で白石の評価が上がった気がした。

「あ、きらっちじゃ～ん！お～い！！」

「お、音無～！？なんでこんな所をウロチョロしてんのさ～！」

どうやら、あきらさんの友達みたいだ。
さて、オレの仕事は終わりですな。送る必要もなさそうだ。
ここは友達と帰りたいだろうから、空気を読んで一人で帰還するとしよう…。

「きらっち、いつのまに男作ったんだよ～！
なに？年上？高校生？やるじゃ～ん！」

「え、いやオレはちがっ！」

「違うよバカ。男なんか作ったら事務所の人に怒られるっつの！」

……そっか。アイドルだからそう簡単に
好きな人と付き合う事も出来ないのか。

「あきらさん。」

「ん？」

「がんばれよ！応援してるから。」

オレはあきらさんに親指を立てた拳をつきだし、
自分なりの笑顔で、できるだけ元気に言う。

「は？」

意味がよくわかっていない様子のあきらさんと
お友達を残して、オレは家へと歩き始めた。

「……ねぇあきら。どういう意味だったのアレ？」

「まぁ、ファンが一人増えた～…って事じゃない？」

やっぱり意味は伝わってなさそうだった。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［12］

「……ふぅ。」

体育館から出て、一緒に帰ろうという誘いを断り、いつもの私の非常階段。私はそこにいた。
私以外に誰もいない、私が悩む姿を誰にも見られない。私だけの、非常階段。

「やっぱり、何か変。…なんなんだろう。」

今日、屋上で弁当をみんなで食べたときもそうだ。
みさきちがサトシ君にミートボールをあげたとき、感じた『何か』。
羨ましかった？それともただの嫉妬？
何より、なぜそんな感情を抱く必要がある？

なにか……忘れている気がした。きっと一番忘れたくないものだった。
けれど、頭から出てこない。それがとても、悔しかった。

みんなも私と同じ感情を抱いていたのだろうか。
サトシ君がミートボールを食べるとき、みんなもサトシ君をガン見していた。

あやのさんだけは、みさきちがミートボールをあげるのは珍しいって理由だったけど……。みんなは違った。なんというか、態度と姿勢でわかった。

これは、何の感情？
攻略する側、もしくはされる側である私が抱くべき感情なのだろうか？

私は……、彼の事が？

私は頭をかきむしる。
それでも、そんな姿は誰にも見られない。心配されない。

誰もいない、誰も見ない。私だけの非常階段。

……それでも、寂しい感覚だけが私にとりついた。

浅はかな記憶、知らない自分の恋愛事情［13］

「ただいま～。」

二日目の学校が終わり、オレは家に帰ってきた。
転校二日目から色々な仕事を任される時点で、
やはりオレが初めてこの陵桜学園に転校してきたのだとは思えない。

まず、転校したばかりのヤツと接する態度じゃない。
早くからたくさんの友達ができたと錯覚しそうになるが、
それは『前の』オレが作った友達でしかない。

……前の自分の友達。結局は、そうなのだ。
あの子達にとってのオレはただ、親友である
『前の』オレと同じ姿をしているだけの、全くの別物。

いいのだろうか。

それで、自分の友達で、いいのだろうか。

……いいわけがない。

自分の友達は自分自身が作らなければならないのだから。
オレは結果的に他人のモノを奪い取っただけ。

……なぁ、『前の』火野サトシ。
またいつか、もう一度オレの前に現れてくれないか？

そうしたら、納得がいくまで話し合おう。
よければ、この体もお前にやる。もともとはお前のだったんだ。
それで、オレが死ぬことになっても、お前が残るなら…。

「サトシ！！」

「！！」

なんと！一人で喋っている所を目撃されてしまった！頭の中でＥｎｃｏｕｎｔｏｒが流れている。
危険フェイズだ。とにかくスタンナイフでやりすごｓ――

「帰ってきたら手洗い、うがいよ！！いきなり部屋にいかないの！」

おっと、秋から冬という風邪を引きやすい季節の変わり目で
予防措置をとらないとは。オレとしたことが落ちぶれたもんだぜ。

とりあえずオレは手を洗い、うがいをする。
そして、もう一度オレは部屋に戻る。

ＷＡＷＡＷＡ忘れ物～♪

この着信音は、白石からのメールか。
チャッと携帯を開き、オレはメールを確認する。

名前「白石　みのる」―　題名『Ｒｅ：』

なんか、ものすごい確立は低いが、ものすごい事に
気づいてしまったかもしれない。本当に低い確率だ。

確立的に『ありえない』と表されてしまう程に
少ない確立だが、これがもし当たっていれば大騒ぎだ。

オマエが警戒心を持つといけないから教えられないが、
一つだけ教えとく。『最後はまだ来ない。』覚えとけ。

Ｄｅａｒ　ｓｏｕｌ　ｂｒｏｔｈｅｒ'ｓ

みのるより。

……いきなりものすごく重い内容のメールが届いたわけだが。
『これが最後ではない。』これを白石はオレに伝えたかったようだ。

けど、意味は全くわからない。
ただ分かるとすれば、白石が何かを掴んだという事。

そうすると、今日の白石の行動から考えると……。
……やめとこう。これじゃあ白石がオレに黙っておいた意味がない。

よくみると、白石のメールの文末に、追記が書かれてあった。

少ない確立だが、これがもし当たっていれば大騒ぎだ。
オマエが警戒心を持つといけないから教えられないが、
一つだけ教えとく。『最後はまだ来ない。』覚えとけ。

Ｄｅａｒ　ｓｏｕｌ　ｂｒｏｔｈｅｒ'ｓ
みのるより。

Ｐ．Ｓ．
泉がオマエを攻略するだとか言ってたんだって？
面白いからネタバレはしないけど、明日面白い事が起こるぜ。

全く持って意味が分からない。
ループ中にパターンとして起きる出来事なのだろうか。
だがハズレだ。今回はオレが攻略することになっている。
……といっても、する気はさらさらないので放置するが。

それにしても、さっきから教えない教えないと言い続けているが、
最初から教える気がないのならメールを送るなと言っておきたい。
頭の中でグチを叩きながら、携帯から目をはなす。
そしてオレは流れるようにパソコンの電源をつけようとした。
ウ～ル～～ト～ラ～マ～～ン♪

すると、ちょうどメールが来た。この着信音はやまとさんだ。

――

名前「永森　やまと」― 題名『Ｒｅ：』

――

今日はこうと、その友達のひよりって子と
パティって子とクラスメートのこなたさんと一緒に帰ったわ。
こうとひよりとパティは、平然としてたんだけど、
こなたさんだけはあたふたしていた。

「なんで二年生なのに三年生として転校してきてるのか。」
って前にみゆきさんが言ったセリフを何度も口にしながらね。

……私も知りたいわ。なんで私が3年？納得いかないのよ。
周りはそれが当たり前だといわんばかりの口調だったけど。

けど、他のみんなは
「確かにおかしいけどいつも通りじゃないですか」
とか言ってたわ。私の転校がいつも通り……ってことは、
私たちの知らない『ループ中』の世界での話ね。

「この世界ではそれがあっちゃおかしいんだよ！
これがイレギュラーのない、最後の世界なんだから！」
ってこなたさん、言ってた。結構深刻な顔をしてね。

私は詳しい話を聞いてないけれど、あなたは聞いたらしいし、
できれば教えて欲しいわ。お互い損はないでしょうしね。

――

そうか。これが最後のループ、最後の世界だと知らない人もいるんだ。
昨日彼女達から聞いた話を思い出す。

オレ達が『前の』世界の事件の原因である花火の射出を止めた後、
こなたさん、かがみさん、つかささん、みゆきさん、
そしてオレ以外の人の動きが止まったらしい。

動ける5人で、宇宙人が入り込んだやまとさんと出会って、
そして、イレギュラーのないまま過去に飛んだ。それが現在だと聞いた。

つまりあの4人組みと、4人組に昨日か今日、事情を説明された人以外は
ここがループなど存在しない、正常の世界だという事を知らないのだ。

頭の中でもう一度状況を整理する。

・これが最後の世界。ループ中での記憶はオレだけがない。
それ以外の人は大体覚えているようだ。

・みんなと考えた結果、「時間が経つたびにループ中の記憶が失われる」
と推測された。一番最初に記憶が消えたのがオレだということらしい。

・やまとさんはループ中は意識を乗っ取られていたので、ループ中の記憶がない。
ループ中と同じく二年生のはずが三年生として転校してくる。

こうして整理した内容に、『最後はまだ来ない。』を照らし合わせる。
……オレの記憶の中に『最後』なんて言葉は一つしか浮かんでこない。

『これが最後のループ。』

だが、意味が分からない。ループをさせた張本人である宇宙人がもういないというのに、矛盾点がありすぎじゃないか。

だが強引に、白石が言うとおり
確立的に『ありえない』と表されてしまうほど低確率なものをつなげてしまうとしたら、それは…。

「ループはまだ、続くって言うのか……!?」

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［1］

……。

……。

ふぅ……。また、ここか……。

またも辿り着いた、このどこまでも白い世界。

……夢だとわかっている。いや、これはもう夢ではないのかも知れない。

ここはもう一人の自分がいるところ。前の自我が住む世界。

何もない、ただただ空白が続くこの白い世界。

まるで、何もかも全てを失った風景。

「……ちょうどいい。オレもお前に会いたかったんだ。」

周りに視線をやりながら、今、自分の周りのどこかに自分がいる事を確信しきったオレは話しを続ける。

「お前は、恨んでるんだろ?……言ってくれて構わない。憎んでいるんだ。お前は、記憶に勝手に上書きされた『オレ（記憶）』を。」

スゥ……っと、黒い影が見える。

それは紛れもなくオレの、火野　サトシの姿だ。

「……よぅ、久しぶりだな。……まぁ一日しか経ってないけど。」

「……。」

軽く挨拶をしてやる。けれど、返事は返ってこなかった。
それでもオレは続ける。次に話せるのがいつになるか、わからないから。

「とりあえず、オレの気持ちを言っておく。オレはお前に体を返してやりたい。」

人の夢は前触れなく散る。目覚ましの音一つで儚く覚めてしまうものだ。
だからこそ、何度も伝えたかったことや聞きたかったことを聞けなかったのだ。

ならばどうするか？まわりくどくせず、さっさと用件を伝えるのみ。
体を返すというのは、段階的にまだ早すぎたかも知れない。
だが、ここで返せずに永遠にオレのものになれば、オレは一生後悔するだろう。

オレは早口になり過ぎないように注意し、それでいて早めに用件を口にした。

「『記憶（お前）』が消えてしまった後、そこから新しく記憶が生まれた。
そうしてできる、新たな記憶。それがオレ、というのには間違いないな？」

我ながら電波染みた会話だ。

だがしかし、こんな馬鹿げたセリフも、一字一句間違わないように話す。

「記憶ってのは、一つの命みたいなモンだからな。オレだって火野サトシだ。
……けど、サトシはもともとお前のものだった。そうだろ？」

「……ふぅ。」

ため息をつかれた。正直、意外な反応。
サトシを返してもらえる。嬉しくはないのだろうか。

「俺が……、俺が気付きはじめてるんだよ？なら、キミもそうなんじゃないかな？」

「……？」

意味が分からない。だが、重要な感じが露骨なまでにプンプンだ。
オレは聞き漏らさないように話に集中する。

「体を返すとか返さないとか、その前にキミ、何も分かってないじゃんか。」

「……どういうことだよ。」

「だってさ。」

オレがオレの肩を持ち、つぶやくように言う。

「本当は……。……人……俺……て……。」

「な、なんだ！？聞こえない！もっと大きな声で言ってくれ！」

コイツの言葉が何より重要な手がかりなのだ。
聞き漏らしては絶対にならない。

「じゃあもう一度言ってあげる。」

「ああ。頼む。」

「「マインドクラッシュ！！」」

「！！」

なんと！誰かがオレの部屋にいるではないか！
危険フェイズ――――。って、

マインドクラッシュ？あれ？今の声ってまさか……。

そう。一瞬脳裏によぎったのは、昨日の記憶。
みんながオレの家に押しかけて……。

「まさか今日もって言うんじゃないだろうな……。」

「そんなことより、今、この状況を喜ぶべきじゃないかな?」

こなたさんの声が聞こえる。やっぱいやがったぜ。
喜ぶべき状況?どういうことだ?

何か、重い。何か乗ってる?
とにかく、オレは目をこすって状況を確認する。

「先輩!!何とか気づいてないうちに脱出するつもりだったのに!
いきなり大声出して起こさないで下さいよ!!」

「この声は……。」

目をこすった後、オレは起きようとして、手を下につく。
すると、目の前にいる誰かと目が合った。

「あ……。」

「あ、お、おはよう、先輩。」

皆さんにも想像して頂きたい。朝目が覚めて、目をこすり起き上がる。
ここでは目をこする癖があるかは置いておくとしよう。
その『起き上がる動作』ができない。そして目の前には顔、体。

「ええと、どういう状況なのかな?これは。」

「え、あの、じ、事故よ、そう。事故。」

どういう事故が起きれば寝ているオレにかぶさるように乗る状況になるんだろう。
なんかオレが押し倒されているみたいだ。顔近いし。

「まぁ、その、やまとさん。とりあえず起きたいからどいてもらえないかな？
朝っぱらから刺激が強すぎるよ。オレだって興奮せざるを得なくなるからさ。」

「あ、うん。わかった…。」

我ながら冷静を装えただろうか。わかってのとおりオレは冷静ではなく、
冷静どころか頭の中がパニック　フィーバー　フォーエヴァーなわけだが。

耳まで真っ赤になったやまとさんは、オレの上から離れ、
ベッドから降りて顔をうつむけながらちょこんと正座で座った。

「で……なんだ。……その。」

オレの前に並ぶ１２人の女の子全員にオレはお約束どおり言った。

「……なんで……いるの？」

「攻略開始。昨日キチンと言っておいたと思うんだけどね。」

攻略開始……？ああ、昨日のか。

確かに女の子に起こしてもらって、朝っぱらからその顔が見れるというなら、

好感度はリミッターを破壊してどこまでも伸びるだろう。

「でも……。攻略するのは俺がこなたさんを、だったよね？それなのになんで……。」

ちらっ、と、やまとさんを見つめる。

やまとさんは依然として顔をうつむけたままだった。

「いやはや、失敗だったね。まさか今日も皆さんおそろいとは。」

こなたさんが周りを見ながら苦笑してみせる。

他のみんなは、こなたさんと目が合うたびに顔をうつむける。

「「「わ、私は……。」」」

全員が一度に口を開き、そして全員が先を譲る。

そのようなどぎまぎした空間で冷静なのは、３人くらいのものだった。

「私は関係ないですからね？やまとに連れてこられただけだし。」

こうさんが口を開く。すると、やまとさんも口を開いた。

「わ、私はただ……、そう、そうよ。記憶を一緒に取り戻すって決めたじゃない。
あなたの家を見る事で、何か変わるかな～、なんて思っただけよ。」

「あ、やまとさんはなんかツンデレっぽくなってるけど、
ただいきなりキミが起きたから焦ってるだけだよ。」

酷い。せっかくそういうルートもありかなあ、なんて思ってたのに。
というかオレが攻略する側だったはずなのになぜそちらの方が攻めにくるかな？

「ちょっとジャンケンで盛り上がっててね。
負けたからああいう状況になってたの。勘違いしないように！」

「意外と期待したのに、見事にフラグを両断してくれてありがとう、こなたさん。
で、なんでこなたさんがやまとさんに『さん』付けなの？」

「キミだって似たようなもんでしょ～。」

確かに。まぁ、オレの場合デフォルトでほぼ全員に『さん』付けなんだが。

「あの……。私ってそんなに老けてみえる？」

いや全くそんなことはないのだが。
否定の言葉を口にだそうとする前に、こなたさんが言った。

「いや～。前から『さん』付けだったしね？

苗字じゃなくて名前で呼んだのはこれが始めてだけど。」

それを言うと、こなたさんはムスッとした顔をする。

「とにかく、攻略は失敗。……全く、なんだろね、このハーレムフラグ。
劇にも結構影響するんだし、ちょっとぐらい空気を読んでくれてもいいのにねぇ。」

「いやいや……、なんでいつのまにかオレがされる側になってるのさ。」

「だって、サトシくん絶対面倒臭がって私を攻略しないじゃない。」

「そそそんなことないですよこなたささん。」

「テンプレ通りの動揺をありがとう。わかりやすすぎだよサトシ君。」

そういえば、なぜ今日も全員が家に来たのだろう？
かがみさんも、つかささんも、みゆきさんも、みさおさんも…。
パティさんや、ひよりさんも、ここに来る理由など、ないだろう。

「「「あの……。」」」

こなたさんの言葉に答えるように、ほぼ全員が同時に口をあける。
１０近くの集団の何人かがしゃべっても、
何人がそして誰が喋ったかなど、把握することは難しいだろう。

「「「あ、どうぞ。」」」

だから、また同時に先を譲る。絶対そうなると思った。
なんだこの空間は…。空気が重い。耐えられない。

「ちょっとオレ、準備してくるから待っててくれよ！」

そういってオレは部屋から抜け出し、準備にとりかかった。

……サトシ君は部屋から抜け出した。
きっと、この重い空気に耐えられなかったのだろう。
……はぁ。攻略開始！なんて宣言したものの、
いきなりこれじゃあ、攻略しようがないね。
「で、どうしてみんないるのかな？
劇の内容をシロウが総受けな内容にでもしたいの？」
みんなは首を振りつつも、何も言えないままでいた。
……みんな、私と同じなのだろうか？

劇。

これが私達の最後の記憶。
劇をやってから、その後がどうしても思い出せない。
でもその後に、すごく大切な何かがあったはず…。
それが、思い出せない。
みんなも一緒なのだろうか？
みんなも……劇の後……。

劇の後……。

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［4］

「劇の後だよッ！アレのせいだちくしょう！！」

オレは部屋から抜け出し、洗面所に来ていた。

オレの仮定があっていれば、一度は結ばれた中。
あの子達は前のオレをあきらめきれず集まっているのかもしれない。

そしてあの調子だと、多分それぞれがそれぞれの劇の後の事情を知らない。
そりゃそうだ。時間がループするのは劇が終わって少ししてから。
結ばれたあとに過ごした時間など、ほんのわずかな時間だっただろう。

なんという怖い状況だ。
つまり『前の火野サトシ』は、あの仲良しグループの殆どと劇の後に結ばれた。
そして彼女たちはオレに『前の火野サトシ』を見て、アプローチをしているのか？

「……いや、オレはそんなことをさせる気はさらさらないんだ！！
そんなの、『前の』オレが勝手にやったことだろう！？オレは関係ないぞ！」

自分に言い聞かせるように叫び続ける。
母さんが心配そうな声で話してくるが、のんきにお話できる状況じゃあない。

「……じゃあ、オレの部屋では今頃？」

修羅場ってヤツか？

……『前の』オレのバカぁあぁあああぁあああッッ！！

キーンコーンカーンコーン……。

始業のチャイムが鳴り響く。

登校時間は生き地獄そのものだったといえる。
ギスギスした雰囲気だったか、さほどひどくはなかったかさえわからない状況。
女同士の作り出すその空気に男であるオレが放り込まれているのだ。

しかも、周りからの視線もかなり気になった。
つまり、オレは超絶ブロークンハート状態だったって事だ。

とにかく、オレは授業の準備をし、ノートを開く。
……そういえば、みんなは劇の練習はできているのだろうか？
オレは色々とありすぎて、まだ原稿さえ読んでいない。

……そういえば、本当に色々あったなぁ。
こんな体験、普通に生きていてだれが体験できるものだろうか。
この学校に転校してきて、全てが変わった。例えば、初日。

「いきなり自分が記憶喪失者として扱われた。だが、実際そうなようだ。

時間のループだとか、宇宙人がなんだとか、今はよくわからないが……。」

自分の回想が綺麗な声で読み上げられていく。
…読み上げられていく?あれ、この流れって…。

「サッ♪トッ♪シッ♪」

う〝っ!殺意が……。

ゴスッ!!

「ふぐり!!」

オレの頭に拳骨が打ち落とされ、痛感がほどばしる。

「日記を書くなんて授業内容にした覚えはないんやな、これが~。」

「ご、ごめんなさい……。」

前に見たような流れで、授業は終わっていった…。

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［5］

「サトシ……先輩。」

昼休み。一年中満開のこの桜の木の下で佇んでいるところ、聞き覚えのある声が聞こえた…。みなみさんだ。

「どうしたの？みなみさん。」

記憶は、何度でもよみがえる…。
この桜の木の下で、劇の後、オレは彼女と唇を……。

……交わしたか、交わしていなかったかもわからない、微妙なタイミングでその世界の時間は途切れた。わからないのだ。
それが、切なかった。

しかも、それがこのみなみさんとだけではない、その事実がたまらなく嫌だった。
前の火野サトシは、年下の子にも、そして一人だけでなく何人もに手を出した。
もし、今の火野サトシだったら……。どうしていただろうか？

……決まってる。オレなら、キッパリ一人に決める。そのハズだ。
それが、みんなを傷つけない最高の方法であり、間違いのない選択肢だから。

……なら、この子達からだれか一人を選ばなければいけなくなったら、
オレは、誰を選ぶ？……誰を、選べる？

……やめよう。この子達は前のオレを好きでいるだけであって、今オレがそんなことを考える意味はない。しかも、選ぶだなんて、人を物のように考えるのはよくないことだ。

「サトシ先輩……？」

「おっと、ごめんみなみさん。考え事をしてたよ。」

「その考え事って……、劇の後の事、ですか？」

図星だ。

それはそうだろう。彼女達はこの事で修羅場を繰り広げているのだから。

『前の』オレよ……。お前は、なんでこんな事をしたんだ？そして……、なんでお前はここまでみんなに好かれているんだ？

「……うん。そうだよ。」

「ですよね……。……おかしいですよ。……今までの記憶はあるのに、……劇の後の記憶だけないなんて。」

「だよね。今までの記憶がサッパリ消えていて、なんで劇の後の記憶だけあるん……？」

あれ……？今、みなみさんはなんて言った？

今までの記憶はあるのに、劇の後の記憶だけない？それって、逆じゃないか？

いや、逆だったとしてもそれはオレの記憶を把握していることになる。

ということは、オレの話ではないと言うことか。
てっきりオレの記憶の話かと勘違いしてしまった。

「……逆です。……私達に無い記憶は、劇の後の記憶だけですよ。」

そして、みなみさんに指摘される。……一体、どういうことだ？
私達、といったという事は、さきほどオレの部屋に来ていたみんなのことだろう。

つまり……、みんなは今までの記憶があり、劇の後の記憶がなく、オレは今までの記憶がなく、劇の後の記憶がある……。そういうことか？

「そ……そうだね。」

一応、オレはうなずいておく。

「……先輩は劇の時、……すごく頑張ってましたよね。
……とっても迫力があって、吸い込まれるようでした。だから……私は。」

「……。」

覚えて…いない。

「先輩？……ごめんなさい。今の先輩には関係のない話でした……。」

「……うん。ごめん。……覚えてないんだ。劇の後の事以外……。」

「……！！劇の後、ですか……！？」

みなみさんは目を丸めて驚いていた。
それはそうだろう。先ほどの話を聞くに、みんなは劇の後の記憶が無い。
そのみんなにとって、劇の後の記憶はとても知りたいものであるのだから。

そして、オレにとって一番思い出して欲しくない記憶なのだが…。

「……よければ、教えてくれませんか？
私たちにとって、一番思い出したい記憶なんです。」

みんながオレに協力してくれている中で、
オレだけがわがままでみんなに何も教えないなんて、やってはいけない事だ。

「実は……、劇の後……。」

オレは、劇の後に起きたことを話した。
……でも、それをみなみさん以外のみんなにもした、という事は話さなかった。

話せなかった。

それは結局、オレの弱さ。

「そう……ですか…。やっぱり、間違いじゃあ、なかったんですね…。」

「…？間違いって？」

「先輩。」

みなみさんは真剣な表情になる。
その表情に、オレも少し黙る。

「先輩、私は……。」

「いつだって変わらない。私は今でも、先輩の事が、……好きです。」

……ッ……。

心が痛むのが、わかった。

……痛んだ心は何のため？
この子のため？自分のため？

これはきっと、この子のためだ。

「……ゴメン。」

「…。」

即答、だった。

あまりの即答に、みなみさんも言葉を出せないでいた。

別に、いやだとかそういうわけじゃあない。

みなみさんは綺麗で、しっかりしてて、それでもちょっとツメが甘いところがあって……。

正直、平均以上。いやそれよりもっと上。兎にも角にも、オレには過ぎた人だ。

けれど、今彼女は誰に告白した？

――『いつだって変わらない。』

でもオレは『前の』オレから『変わっている。』――

……つまり、みなみさんが好きなのは他人で、

その気持ちは『この』火野サトシに向くことはないということではないか。

仮に違ったとしても、オレは断っている。

他人が築いてきた友人関係に、オレが割り込み奪うのは罪悪感があったから。

「しっかりするんだ、みなみさん。」

オレはみなみさんの目を見て言った。

「前のオレはここにはいない。いまここに立っているのは、君が好きなサトシじゃない。どうか目を覚ましてくれ。……キミは今、オレの中に他人を見いだしているだけなんだ。」

みなみさんを諭すように言うと、みなみさんは先程まで沈めていた顔を笑顔に変えた。

「……なんだ。そういうことですか。よかった。……嫌われているのかと。」

独り言のようにみなみさんは呟いた。意外に単純だなぁ。可愛いけど。

そんなことを考えていると、みなみさんの手がオレに触れる。

「……サトシ先輩。」

みなみさんは両肩を持ったオレの手を握ると逆にオレを諭すように話しかける。まるで、何もわからない赤子に、優しく教えを説く母のように。

「私も、私の思いも、ずっと変わっていないように、……先輩も何も変わってはいないんですよ?」

「……どういうことだい?わけがわからないよみなみさん。」

みなみさんはくるり、と体を翻すと、オレと反対方向にあるきだす。

「……その『わけ』が解ったら、
もう一度ここで……思いを伝えます。」

みなみさんは去り際に、そんなことを言った。

「待って！どういうことだよ、みなみさ…」

キーンコーンカーンコーン……。

オレが後を追おうとした瞬間、
何の捻りもないいつものチャイムが校内に鳴り響いた。

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［6］

授業中、オレは集中できないでいた。
というか、もう集中出来ないのが当たり前になってきている。

オレはみなみさんの言ったことを考え直し、今まで手に入れた手がかりと照らし合わせる。
……全く答えは出て来ない。

かれこれノートを3ページも使って考察をしているが、
1＋1＝3であることを証明しろとでも言われたように、なかなか答えが出て来ないのだ。

……いつもならここで、ななこ先生がこの考察を読み上げたあと、リズミカルにオレの脳天を引っ叩いていただろう。

だが、今回のオレは一味違う。

それは、いつものように授業以外の事をしていることを
ななこ先生にバレたりしないよう、
厳重な注意と頻繁な前方確認で先生の動きを見通しているから……。

自慢げに悩内で作戦を説明していたオレは目を疑った。
……先生が、消えた!?

馬鹿な。そんなはずはない。オレの前方確認は完璧だったはずだ。
ならどこに見失った!?後ろ?いや、まさか……。

「なぁにを忙しげに書いとるんかなサトシ～?」

したからニュッと生えてきた手がオレのノートを奪う。
しまった……！！下段攻撃は予想外だった！

「こんな難しげな考察かけるんやったら、
ジョン・Ｆ・ケネディの暗殺者でも当ててみぃ！」

ゴスッ！

「い、痛いです先生。別にいいじゃないですか。
時間がループしてたってことはこの授業今までに何度もしたんでしょ？
だったら誰だって１００点取れる……。」

「誰の為にやっとると思っとるんや！
そのループ中の記憶をなくしとる奴がここにおるやないか！……それと。」

先生はオンラインゲームのＰＴ編成をノートに書き込んでいる泉さんを指差す。
泉さんはそれに気づくと素早く落書きノートを授業用ノートと入れ替える。

あれでバレてないとでも思っているのだろうか…。

「ループ中から換算しても一度もまともに授業を受けてないヤツもおるし。」

「た、大変ですね先生……。」

オレはさりげなくノートを奪い返そうとするが、
先生はノートを持った手を上に上げ、チッチッとオレに指を振り、
ノートに目を通す。

「う〜ん、お前のノートを見るに、すこしづつ真意に近づいてるようやないか。
まあ真意知らんけど。攻略本見取るようでおもろいわ。
ん〜、で……『変わっていない』のが…、ん？岩崎？岩崎……。」

先生はオレのノートを興味津々に読む。

そして、「まぁ頑張れや！」と言って、ノートでオレの頭を一発しばいたあと、
ノートを机の上にポンポン、と置いた。

休み時間。オレは迷うことなくみなみさんの教室に向かった。
理由はもちろん、あの言葉の意味を聞くためだ。

だが、みなみさんの姿は見当たらない。休み時間が始まって間もないというのに。
トイレかどこかだろうか？みなみさんには悪いけど居場所を聞き出そう。

「アナタはシなない…。ワタシがマモるもの。」

「ぱ、パティちゃん！」

「いいッスねー二人とも！映えるッス！」

みなみさんがいないからか、パトリシアさんがみなみさんの役をしていた。
まったくひよりさんも暇だなぁ。

……というかゆたかちゃん、いまパトリシアさんのことをパティちゃんって呼んだ？……ああ、あだ名にするとそうなるのか。

「あれ、サトシ先輩～。」

ゆたかさんがとてとて、と小走りで走って来る。　あ、こけた。
颯爽と出てきたパティさんがゆたかさんを抱え上げ、こちらにあるいてくる。
パティさんに抱きかかえられたゆたかさんはそのままオレに話しかける。

「どうしました？サトシ先輩。」

みなみさんといつも仲良しなゆたかさんならみなみさんの行き場所を知ってるかも知れない。

「ゆたかさん。みなみさん、今どこにいるかな？」

「みなみ……さん？」

ん？反応が微妙だ。名前を間違えたかな？

「岩崎さんだよ。ゆたかさんと仲がいい。」

ゆたかさんはパティさんと目を合わせる。

パティさんは顔を横に振った。
ひよりさんも同じだった。

「えーと、サトシ先輩？」

「え、なんだい？ゆたかさん。」

「みなみさんって、誰？」

「は？」

オレは耳を疑った。

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［7］

「みなみさんッ！みなみさんッッ！！」

オレは校内中を駆け回る。
おかしい、おかしいおかしいありえない。

オレの記憶がないように、みんなの記憶もいずれ失われる。
その推測どおりに行くとそうだろうさ。

でもよく考えろ！？オレは思い出した！！
演劇の後の記憶を！それだけだけど、その推測を破る力はある！！

しかもだ！その推測でもそうじゃなくても、
ループ中以外の記憶が消されるのはおかしいだろう！？

「みなみさん！岩崎みなみさん！！」

さすがに廊下にいる生徒も目を丸くしてオレを見ている。
……知ったことか。どうせ狂った世界だ。どうとでもなれよ……！！

オレが最優先すべきは、みなみさんを探すことだ。
……いやな予感がする。なんだか、とてもいやな予感が。

「ねぇ、ひよりちゃん！みなみって誰なの！？」

オレの後ろを走るゆたかちゃんが、
同じく一緒に走っているひよりちゃんに問いかける。

「わからないッス！……でも、あんなに必死に探してるんだから先輩にとって大事な人なんじゃないッスか？記憶に封じ込まれてた恋人とか！」

「Ｏｈ！ロマンティックですネ！いささかファンタジーな香りがしますヨ！
失われタ記憶……。朧げに見える恋人の幻想……！ふぁんたすちーっく！！」

パティさんが走りながら両手を握って大げさに感動を表す。
あぁ、あながち間違ってないんだよなぁ……！！そこまで大げさじゃないけどさぁ！

だめだ。こんなことをしててもラチがあかない。
オレの第六感が告げている。『岩崎みなみは絶対に見つからない。』

……協力者だ。白石、やまとさん！！
ループにあまり関連せずにループ中の記憶を持ち続けている白石、そしてループの中ではイレギュラーだったやまとさんは力になるはずだ。

やまとさんか、白石さんに……！！

ＴＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲ．．．

電話を掛けようと携帯を開いた瞬間、
ナイスタイミングで白石から電話が来た。

「もしもし、火野、俺だ。何か変わったことはないか？」

「あるよあるよ、大アリだ！！」

オレは走りながら荒々しく答える。

「そうか……。……誰が消えた。」

「なっ……。」

オレは走っていた足を止め、立ち止まる。

と、その瞬間、黒くて長い髪の毛が目の前に……。

「うわたたた！！いきなり止まらないで下さい先輩ぃぃ！！」

くそ、どこぞのラブコメだったら主人公大喜びの体制だ。

ひよりさんとオレはゆたかさんとパティさんを巻き込むようにぶつかり、

くんずほぐれつというか、みんなの見てはいけない布がチラチラと見えている。

目線と集中力をそっちに持っていきそうになるが、冷静になる。

こういう時くらい静まれオレの大三欲！！

「なんでわかるんだ！？白石！！」

「チッ、やっぱりそうか……。で、だれが。」

「みなみさんだ！岩崎みなみさん！！」

よかった……。なぜ誰かが消えたことがわかったのか理由はわからないが、

やはり白石は覚えていてくれて……

「そうか、その『岩崎』ってヤツが、消えたんだな。」

「えっ……？」

「そいつの性別は女か？まあ『みなみ』ってんだから女だろうな。大穴を除いて。
『みなみ』さんが何年生なのかを教えてくれ。それと、消える前に言っていた言葉。」

何言ってんだ、こいつ……。

『岩崎ってヤツが』？『みなみ』ってんだから？
いやいやいやいや、ちょっとまてよ。それじゃあ……。

「白石、まさか……お前も、忘れちまったのか？」

「違うな。いや、……実際はそうなのか。」

ハッキリしない物言いだ。どういうことなんだ。

「この世界には、『岩崎みなみ』という人間は、存在しない。」

「……は？」

……何言ってんの？コイツ。
いたよ。いたよ、ついさっきまで目の前に。
意味がわからない。からかってるのか？
いやそんなはずはない。そんなはずはないのに。……ないのに。
「ふざけんなっ！んなことありえるわけねえだろ！！」
許せ白石。いきなりこんな状況になったら混乱くらいする……。
お前を怒鳴るのは見当違いなのは分かっている。
でも、不安で、心配で、意味わからなくて、そして怖くて。
「落ち着け。ちょっと言い方が極端すぎた。
厳密には『存在しないことになっている。』だ。」
「ますますありえん！わけがわからん！」
携帯電話の向こう側から、小さく舌打ちが聞こえた。
そして白石も、オレと同じく爆発する。
「あああああ、頭のネジがゆるいなお前は！
ありえんとかそんな常識的にものを考えてる場合か！！
時間がループとかそういう話を信じたヤツがなにをいまさらこのくらいで混乱してんだ！」
このくらい……？
ふざけるな、消えたんだぞ？

オレのことを、好きといってくれた、みなみさんが……！！

――――『いつだって変わらない。』

でもオレは『前の』オレから『変わっている。』

――――

「……ッ。」

「どうした、火野。」

「いや……。」

そうだ。彼女が好きだと言った人間は、オレではない。

オレの姿をした、オレに限りなく近い誰かだ。

どれだけ似ていようと、違うのだ。

１と０は交わらない。

それはどこまでも近い、１しか差のない数字たち。

それでも決して交わらない。

近く、どこまでも遠いモノ。

それが人なのだ。

「悪い。混乱してた。」

消えたみなみさんのことを思うなら。
消えたオレに火野サトシを返してやりたいと思うなら。
なおのこと、何かを知っていそうな白石に耳を傾けるべきじゃないか。

「……続き、話しても大丈夫か？」

突然様子の変わったオレを心配する白石。
そうだ。こいつが言葉に悪気をこめる必要なんてない。

なのにオレはただ、やり場のないこの怒りとも悲しみとも言えぬ感情の矛先を向けたくて、こいつを傷つけようとした。

……やはりオレは、みなみさんに告白される資格なんてない男だ。

「ああ。頼む。」

「……少しわかり辛いかも知れないが、雰囲気だけでも読み取って欲しい。
まず、俺は生まれてこのかた、『岩崎みなみ』という人間に出会ったことがない。」

「そんな……！！」

「いいからまず黙って聞け！」

白石に静止される。だめだ。まだオレは感情を押さえきれていない。ここで怒っても仕方がないんだ。冷静になれ、オレ。

「そちらから見ればただ俺たちがみなみさんとやらを忘れたようにしか見えないはずだ。
……俺の推測では、俺たちの記憶、思い出が根っから改鋳されんだと思う。」

「記憶の……、改鋳？」

「そして岩崎さんは、物理的、もしくは超常現象的に抹消された。」

……うまく頭が回らない。だめだ、だめだ。理解しなければ。
少しづつだ、少しづつ頭を冷やしていけ……。

「つまり、何者かに他殺されたか、または魔法的なにかで存在ごと消されたか、だ。」

ああ、だめだ。

「なんだよそれ!!みなみさんが殺されたっていうのか!?
くそっくそォッ!誰だその犯人は!知ってるんだろ白石!!
オレがそいつを殺しにいくッッ!教えろ、今すぐ教えろォ!!」

「……いい加減にしないか?」

「なんだよ白石!もったいぶってないで早く!……もしかして犯人はお前――」

白石が少し、だがオレに聞こえるようにため息をする。
そして少し間があき……。

「いい加減にしろっつってんだろこの鈍感能無し天然ヘタレ!!」

「どっ……。」

「いいかクソジャップよく聞けや!こちとら記憶がどうとかなって、怖いし混乱してんだよ!!
オマエ自分が記憶失ったときはギャーギャーいってたくせに、俺らがそうなったらそれか、あぁ!?
オマエだって慣れっこだろ、自分の記憶が正しいと思ってたのにいきなり記憶喪失扱いされるの!!
今の俺がそうなんだよ!岩崎みなみになんて会ったことないの!!
でもそれが異常らしいの!!

わかったらさっさと冷静になれこのヘタレ！！」

「ご、ごめんなさい……。」

……ついに怒られてしまった。

「で、でも一つだけいいですか？」

「……んだよ。」

「ジャップはお前もだろ。」

「……スマン、そうだった。」

「……いたた、先輩、一体どうしたんですか。あ、電話中ですか。」

ゆたかさんが汚れたスカートをはたきながらこちらを見る。

……しまった。彼女達をケガさせたかもしれないというのに無視してしまっていた。

「みんな！ケガはない？」

「大丈夫ッスよ！そんなことより、電話続けてもらって結構ッスよ。」

「いとしのスウィートハニーを探すのをジャマはできないネ！」

少しばかり誤解が生じているようだが、いちいちそれを解消するヒマもない。

混乱を生まずに済むのなら、今はそういうことにしておこう。

「ああ、ごめんね。……もしもし、白石。まだ繋がってるか？」

「おう、そっちの状況は把握したぜ。何人かでみなみさんを探してるんだな。
それなら、それは無駄だ。直接的に探してもみつからない。」

「というか白石、なんでこのタイミングで誰かが消えるってわかったんだ？
しかも、なんかさっきから全てを知っているような口調で……。」

そうだ。そういえば昨日のメールの時からそうだった。
『最後はまだ来ない。』とか、なんとか。

「白石、もしかして。その『本当に低い確率』とかいうお前の仮定がピッタリ当たってたのか？」

昨日、白石から送られてきたメールには、
『ものすごい確立は低いが、ものすごい事に気づいてしまったかもしれない。』
などと書かれていた。

ものすごい、と二回も言うのだから
それはそれはもう、ものすごいのだろう。

「いや……、まだそれはわからない。誰かが消えることは確定事項だったが、
タイミング、そしてそのトリガーがなんだったのか、わからずじまいだ。

そろそろ消える頃かな程度に考えて電話したから、正直焦ってる。」

「消えることはわかっていたのか？」

「ああ。どういう消え方になるかまではわからなかったがな。
俺は物理的に消されるか、突如失踪するとは思っていたんだが……。
記憶ごと消されるとはなぁ。そんな気もしてたけど、まさかだったよ。」

……一体どこまで感づいてるんだコイツは。

正直、そこまでわかっているならお茶を濁さずにさっさとその仮定の内容を教えて欲しいものだ。

だが、昨日のメールにも『オマエが警戒心を持つといけないから教えられない』
などと書かれてあったことから、その考えはまだオレが知るべきではないことがわかる。

そんなオレが今できることは、指示を仰ぐことくらいのものだ。
オレの安直な行動で計算にノイズを走らせたくはない。

「白石、オレはこれからどうすればいい？」

「おいオマエ、今『安直な行動で計算にノイズを走らせたくはない』みたいなこと考えて俺に指示を求めたろ。」

「一字一句間違いなく大当たりでございます？！
つーかなんでわかるんだよお前！！」

「オマエの脊髄反射的反応は大体意図が読めるんだよ。
警戒心持たせたくないって言っただろ。安直に行動すればいいんだよ。
ホラ、演劇について何も考えなくていいのかー？シロウ君。」

どうも、オレはまだこいつにはかないそうにない。

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［9］

授業は黙々と、そして淡々と進められていく。
まるで、最初から何もなかったかのように。

時間のループや周囲の異変、記憶の喪失や矛盾。
これらは実はオレが退屈な授業に飽き飽きして、
居眠りした際に見た夢だったのではないか、とさえ思わせる。

誰も知らない。誰もわからない。
彼らにとっては、別に何も起こってなどいない。

このまま時間は過ぎ去っていき、いつもの日常が続いていく。
彼らはそう思い込んでいるのだ。

みなみさんの失踪に対して、これほどの平常な反応に
オレの心に怒りが浮かばないハズもなかった。

御門違い。彼らは記憶ごと消されている。完全に御門違いなのだ。
だがしかし人というものはそう簡単に割り切れるものではなく、
結局、オレの心にはいきどころのないモヤモヤとした感情が残るだけだった。

白石の最後はまだ来ない発言は、みなみさんの失踪によって確実なものとなった。
……当選してしまったのだ。確率的にありえないなんとやらに。

そして、低い確率で起きる『何か』を白石は知っていた。

オレは少しでも手がかりを掴むためにノートにまとめる。
そこで何より重要なことは周りの確認だ。

いつもならこのタイミングで黒井先生がオレのノートを奪い、
見事なまでのナックルアローを決めてくるところだ。

……もう殴られて溜まるものか。
オレはノートに集中しつつも周りの気配をうかがう。

先生はオレとは反対方向の窓際にいる。
……完璧だ。バレる要因がない。

オレはここぞとばかりにシャープペンシルをノートに滑らせた。

「なぁ～に書いとるんかな？」

「え。」

……先生の声が遠い。そのことから、先生が最後列あたりから
言葉を発していることがわかる。

あの距離からだと……。先生はいつの間に千里眼を手に入れたのだ

ろうか。
窓際から聞こえる先生の声に恐怖を覚えざるを得なかった。

「い、いえこれは……。」

オレは声のするほうへ体を向けながら、頭の中でこの場に適した言い訳を思考する。
といっても思考する時間などほとんどなく、その場しのぎの言葉を紡ぐだけである。

「これは実はオレが常々疑問に思っている世界史に関することでして、
歴史の究極であるアダムとイヴの話は世界史にカデコライズされるものなのか
それともこれは虚構であると割り切り、歴史には含まないべきであるのか……。」

「なーぁ、やまとっ♪」

「いえ大和時代は日本史の話ですし、最近では古墳時代と表すことが多く……。」

ん、やまと?……そういえば最後列あたりの窓際といえば、永森やまとさんの席だった。
そちら側をみると、やまとさんが先生から尋問を受けている最中だった。

「え、いえあの、これは……。」

「転校生やからて容赦はせんで?転校してきてからの数日間を何度

も過ごしてきたんや。
もう初々しい転校生なんかやなく、れっきとした生徒やからなー。」

「あ、はい……。」

つまり先生が叱ろうと思っていたのはオレではなくやまとさんだったのか。
オレは軽くため息をつき、もう一度ノートにシャープペンシルを――。

「おーい、火野ー。バレとるからなー。」

「なぜだ!?やはりあなたは千里眼の持ち主かっ!!」

「何やそれ。勝手にウチの耳やら目やらに能力つけんなや。
あのタイミングでいきなりわけのわからんことを言い出す時点で、バレバレやて。」

正論である。つまりはオレが自爆したということか。

……それにしても、やまとさんが落書きとは珍しい。だが、やはりこのお年頃である。
女子なら一度は書いたであろうポエムとやらを書いているのだろうか。

先生がノートを取ろうとするのに対してさほど抵抗する意思を見せないところから、
恥ずかしい文章を連ねているわけではなさそうに見えるが。

「岩崎……みなみ?なんや、知り合いかいな?」

「――――!?」

思わずオレは立ち上がった。その反応を見てやまとさんは目を丸めている。
そしてなにかに気付いたのか、驚愕した表情でこちらを見る。

そしてオレたちは同時に口を開いた。

「「あの人を……、覚えている!?」」

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［10］

これは一体どういうことだ。
もしかして、こうしている間にみなみさんの存在は元に戻って、みんなにもみなみさんの記憶が……。

オレは辺りを見渡す。

こなたさんは見事に爆睡している。こちらに気付くはずもない。
無防備に晒されたノートにはオンラインゲームの戦略などが書かれてあった。

そして、つかささんもウトウトしていて、こちらの騒ぎに気付いていない。
みゆきさんは寝ているわけではないのだろうが、うつむいていて表情が見えない。
……もしかして、なんだかんだで睡魔に襲われていたりして。

とにかく、みんなの表情から何かを読み取るのは不可能だった。

冷静になれ。先生がやまとさんに「知り合いか？」と尋ねるあたり、まるでみなみさんを知らないようにも思える。

それか、先生自体が最初からみなみさんと面識がないか。
だが、みんなの話を聞いても、やはりこのループ中にも一度は顔をあわせている。

ならば、みなみさんのことを知ってはいるけど、
やまとさんとみなみさんに面識があるとは知らず、

「知り合いか？」と尋ねた……、というのはどうだろう。

……それは無理があるな。希望的観測すぎる。

やまとさんがオレと同じ発言をしたということは、
つまりやまとさんもオレと同じ立ち位置にいたということか。

そしてオレと同じく、自分以外の人間が彼女のことを覚えていたことに驚愕……。
つまりはみなみさんの存在はまだ消えたままである、というのが現実的かもしれない。

白石を見る。……なにやらニヤニヤしてこちらを見ている。
これもお前の推測通りなのか？白石。

考えるのは後だ。まずはいきなりオレが立ち上がったことでクラスのみんながどよめいているのをなんとかしなければ。

……よし。

「……先生。」

「なんや火野、いきなり。どうかしたか？」

「男には自分の世界があることをご存知ですか。」

「わけがわからん。」

「例えるなら……そう、空を駆ける一筋の流れ星……。」

「流れ星がそれぞれ自分の世界をもっとるんか？」

「意味などどうでもいい。言葉の響きが重要なんですよ、先生。」

「つまりなんや？なにがいいたいんや？」

「やまとさんがおなかが痛いそうなので保健室へ連れて行ってあげてもいいですか。」

「いや流れ星は？自分の世界は！？さっきのくだり全く関係ないやん！！」

「つまり　―サトシの世界（ザ・ワールド）―　によって時の流れを止め、流れ星のようなスピードでやまとさんを保健室へ連れて行く必要があるのです。」

「おーい、保健委員。永森と、この頭が重症な男を保健室へ連れていきー。」

「だめです先生……！この仕事はオレにしかできない！！下手をすると、命にかかわる重大な事故に……！」

「永森の腹痛でなんで人が死ぬんや！」

「バタフライ効果という言葉を知っているか。」

「ああもうわけがわからん。もうええわ、勝手に行け。」

交　渉　成　立　。

やはりこういうときは意味不明なことを言って混乱させるに限る。
どうせ、みなみさんの記憶が云々言ったどころで、変な空気になるだけだろう。

オレは永森さんと、なぜか後ろからついてくる白石とともに教室を後にした。

甦る記憶、知り行く誰かの恋愛事情［11］

授業中に廊下に出る。

……通常では、トイレにいくか保健室に行く時くらいにしか縁がない行為だ。

普通なら先生も、あんな意味不明の言葉を並べるオレでも引き止めたであろう。

だが、幾度も時間を繰り返し、同じ授業を受けている彼等にとってその授業中に廊下にという出る行為はさほど重大ではないようだ。

記憶がないオレにとっては、とても重大なことなのだが。

それはさておき、オレはやまとさんと白石の方へ目線を戻す。

「で、どういうことなんだ？白石。」

「んだよ、サトシ。いきなり俺に振るか？」

まるで予想外といわんばかりに白石は素っ頓狂な声を上げる。

ついさっきまで、なにか全てを悟ったかのような笑みを浮かべていたというのに

今更何事もなかったかのようにそんな表情したって、何か感づいてることはバレバレだ。

「何か知ってんだろ。それか何かに気付いたか。」

「バカいえ。俺だってそこまで頭が柔らかい方じゃない。

あの数瞬でこの意味不明な事態を理解できるわけないだろ。」

「えっ？」

……まるで予想外といわんばかりに素っ頓狂な声を上げてしまった。
じゃあなんだ、あの『予想通り』みたいな笑みはなんだったんだ。

「……じゃあ、さっきの笑みはなんだったんだ？」

「ん、もしかして顔に出てたか？……いや、余りにも予想通り過ぎてな。」

やっぱり予想通りなのかよ！あれか？
予想は当たってたけど理解できてはないとでも言いたいのか？
面倒な言い回しをしおって！

「その予想通りってなんだよ、もしかしてオレとやまとさんだけ記憶が残ってることに、なにかそれらしい理由や根拠があるっていうのか？」

「なんとなく、だよ。特に根拠はない。」

「なんだそりゃ。」

呆れ返った顔をしているオレの肩をやまとさんの肌白な手が触れる。
そしてそのまま、やまとさんは白石とオレを見る。

「私と火野先輩には、共通点がある。」

やまとさんは落ち着いた口調で話しはじめた。
彼女も白石も、こういう場面での順応力に長けているようだ。

オレなんかよりよっぽど優れている。

「二人は同じ日に同じクラスに、特に永森なんかほぼ無理矢理このクラスに転校してきた。
この時点で、俺達の知らないところで何か起きていそうに思えるよな。不自然だ。」

「それだけじゃないわ。そうね、例えば……。
私と先輩だけが、あなたたちの言うところの『前の』記憶を失っていることとかね。
あぁ、話を聞く限り私が『前の』記憶がないのは宇宙人に憑依されてたからだっけ？」

「そして、オレとやまとさんだけはみなみさんの記憶が失われなかった。
……確かに一連の事件で翻弄されてるのは毎回オレとやまとさんなんだよね。」

ただ、このオレたちの推理とも呼べない予想が間違っていることはわかっている。
みなみさんが消えたからだ。オレとやまとさんが異変の中心なら、最初に消えるのはオレかやまとさんになるはずだ。みなみさんは無関係である。

「……例えばだが、実は消えたのがお前たち二人だった、という説はどうだろう。」

白石の言葉にオレとやまとさんは思わず振り返る。
何を言っているんだこいつは。オレたちはここにいるじゃないか。
意味がわからず棒立ちしていると、やまとさんが感嘆の声を漏らし

た。

「あぁ、あぁ。そういう考え方もあるのね。
つまりあなたが言いたいのは、消えたのはみなみ先輩ではなく、
『みなみ先輩が存在した世界での私達』ということかしら。」

「そこの鈍感ヘタレとは違って、察しがいいようで助かる。」

「どっ……。」

だから鈍感ヘタレとはなんだ鈍感ヘタレとは。
確かに俺は自分で彼らのことをオレなんかよりよっぽど優れていると評価したが、
それでも人にその事実を言われても動じないかと言うと、断じてそうではない。

「オレをどう呼ぶのも勝手だけどさ、つまりはどういうこと？
オレたちの世界からみなみさんが消えたんじゃなくて、
最初からみなみさんが存在しなかった世界にオレ達が飛んできたってことか？」

「そんな感じだ。……といっても推測の域をでていないがな。
だがこの説の方が、お前ら以外の人間全員から岩波についての記憶だけが
丸々奪い取られてしまっただなんて、スケールでかすぎな話よりは
信憑性があるだろう？」

「そうだね、それに、みなみさんの今までの行動から考えても
みなみさんが異変の中心であるとは考えずらいかな……。
桜藤祭の準備とか、当日も含めて特別目立った動きはなかったはず

だよ。」

シン……。

オレの言葉に、なぜか3人の空間に沈黙が訪れる。

「え、なになに?オレなんか変なこと言った!?」

「ちょっとまて、火野。そのみなみさんの目立ってない動きとはなんだ?」

……どういうことだ?今は誰が異変の中心かという話の流れだと思っていたんだが。

目立ってない動きに対して白石が反応する理由がよくわからなかった。

「なにって……。普通に、みんなで桜藤祭の準備したりとか、他にもほら……。」

「……ゲームの世界に入ってその世界の異変を解決したり、とかか?」

「そのときも、みなみさんは特に目立ってはいなかったよ。最終的にはオレの攻撃で敵を一掃した……し……。」

……何かおかしい。

その世界で目立った動きをしたのがオレだから?

いや、そんなことではない。
何か大切なことが判明したような……。

「おい、鈍感ヘタレ。」

「む、なんだよ白石。いい加減その呼び方やめないか。」

「オマエが気づけるもんにも気づいてねえから言ってんだよ。
泉達がオマエに話した前のループについての話を覚えてるか？」

「お、覚えてるよ。今までの出来事を簡略的に教えてくれた。」

「でもオレが１００万ティーク渡したことは覚えてなかったよな。」

「そりゃそうだろ。」

当たり前だ。彼女達はいわゆる、あらすじを教えてくれただけであり、
その異変中に何が起きたかを詳しく説明してくれたわけではない……。

わけではないから……。

わけではないのに……？

「じゃあなぜ、オマエは桜藤祭準備や当日の岩崎みなみの動きや、

ゲームの世界の中での出来事を覚えているんだ。」

「あ……。」

やっと合点が行く。
実はやまとさんもよくわかってなかったらしく、小さく息を漏らした。

オレは目を閉じる。
真っ暗なはずの世界に、黄緑色の光が輝いていた。
これは間違いない。

みなみさんだ。

「オレ……。記憶が、戻ってる……。」

終る世界、霞みゆく心［1］

「あの……。聞いてるッスか？先輩。」

「ん……。ああ、ごめん。もう一度言ってもらえるかな。」

オレはあの後、チャイムが鳴ったと同時にみなみさんのクラスに来ていた。
今日2度目の、一年生の教室である。

……記憶が戻った、というのは間違ってはいないが、
戻ってきたそれは至極限定的なものであった。

みなみさんが消えた。
メールの受信履歴をみても、学級名簿を見ても、
その名前は二度と見ることはできなかった。

そして、皮肉にもオレの脳は『みなみさんに関しての記憶』のみを取り戻していたのだ。

といっても、自分が行った覚えのない行動の記憶が戻ってきた所でそれを自分自身の経験として受け入れるのは難しかった。

そしてなにより、今の自分と記憶上の自分に性格や口調の違いがあったため、
オレがいつかみた夢の中での出来事、程度にしか感じられずにいた。

「サトシ……。ヒトりで考え込むのイクナイ。」

「さっきから先輩、ずっと難しい表情をしていますよ。
私たちはいつでも協力しますから、そんなに背負い込まないで下さい。」

みなみさんと一緒にいることが多かったゆたかさん達に関しての記憶も、
みなみさんと一緒にいた時の彼女達限定ではあるが、蘇っている。

なので、確実に信用できる3人としてオレの中の協力者リストに、彼女達が追加されることとなったのだ。

「いや、ごめんごめん心配かけて。
そういうつもりじゃなかったんだ。」

ひよりさん、パティさん、ゆたかさん。
前のオレと恋愛関係にあった後輩達である。

後輩といえば、やまとさんとその友達のこうさんがいるのだが、彼女達とはそういう関係ではなかったので省くことにする。

オレは無理矢理笑顔を作り、場を和らげようとした。
そんなオレをみて、ゆたかさん達は何やら小声で相談し始める。
そして何かを決めたのか、みんなはこちらを向き口を開いた。

「先輩、考えても始まらないッスよ！」

ひよりさんが明るく言葉を放ったと同時に、
パティさんが一冊の本のようなものを突き出す。

「コレをミるがいいネ！！」

そういうと、パティさんは神々しいポーズを取りながら表紙の文字を指差した。
そこには『陵桜学園桜藤祭　同人誌即売会』と書いてあった。

意味がわからず目を丸くしているオレを見て、
ゆたかさんが微笑んだ後、静かに説明を始めてくれる。

「パティさんとひよりさんが、
桜藤祭で同人誌即売会を催すそうなんです。」

「こーちゃん先輩も一緒ッスよ！といっても、
サトシ先輩も覚えてるとは思います……が……。」

ひよりさんがオレの表情を見て言葉を止める。
それもそのはずだ。オレはそのイベントのことを知らないし、
こうさんのことも、やまとさんの友人であるということしか知らないのだ。

何度か家には来てくれているものの、まだ会話したことはあまりない。
それはそうだ。時間のループにこうさんはあまり関係していなかったのだから。

「オボえてないみたいですネ。」

「その様子だと、この行事とみなみさんに
接点はあまりなかったようッスね。」

みなみさんに関する記憶しか戻っていないことは既に説明済みであ

る。
「岩崎みなみ」という人が確かに存在したということは、
みなみさんに関わる全ての記憶を話すと、すんなり信じてくれた。
……さすがに、恋愛関係については話していないが。
「ごめん、あと、そのこうさんのことの記憶も戻ってないんだ。」
「マジっすか!?どこまで接点なかったんスかお二人は!」
「Ｏｈ・・・　ショッキングな話ですネ。
こんなコトをコウが知ったら……。」
「泣くッスね。」
「泣きマスね。」
「だからゴメンって。」
こうなる前にやまとさんにこうさんのことを詳しく聞いておけばよかった。
……だが、突然の非現実の連続に、それどころではなかったというのも事実。
オレはネガティブな思考を振り払い、後悔するのをやめた。今一度みんなに耳を向ける。

それを見て、ひよりさんが一つ咳ばらいをして前にでる。

「話を本題に戻すッス。」

そういうとひよりさんは、先程の本をパティさんから受け取り、
それを開いて内容を見せてくれた。

それは学校内行事の企画書だった。
行事の内容は表紙通り、同人誌即売会であった。

「先輩。私たちが思うに、先輩は今までのループで起きた出来事を
今一度いろいろと体験する必要があると思うッス。」

「だからワタシたちのイベントの準備を手伝うがいいネ！」

……何だか利用されている気もしなくもないが、
ひよりさんたちの意見は全面的に正しい。
今、オレがやることは、考え込むことじゃなく行動することだ。

白石も「安直に行動すればいいんだよ。」と言っていたんだ。
少々勝手ではあるが、オレはオレが思うように動くことにする。

きっと白石とやまとさんなら、オレの体験したことを的確に話せば
限りなく真実に近い仮説を提唱してくれるはずだ。
なら、今は動こう。一つでも多くの手がかりを探すんだ。

今のオレの目標は一つじゃない。
記憶を取り戻すことだけじゃない。

みなみさんを、助けないと。

「……了解。それじゃあ、話の流れからするとゆたかさんのクラスの出し物の準備も手伝った方がいいよな。」

ゆたかさんが頷く。

……ループ中にオレはゆたかさんのクラスの出し物の準備を手伝っている。

それはみなみさんも関連する出来事なので、その光景は脳裏に焼きついているのだ。

皆から聞いたループ中の出来事の話の中に、

「ゲームの世界に取り込まれる」というものがあった。

それは、紛れもなく真実だったのだ。

記憶によると、その時空での『前の』オレは、ゆたかさんのクラスの出し物である「メイド&ネット喫茶」の準備を手伝うこととなり、こなたさん達四人組と、みなみさんとゆたかさんで共にＰＣの調整を行っていた。

一段落ついたところで、こなたさんがそのＰＣを使ってオンラインゲーム、「ラッキースターユニバース」を起動したのだ。

その際、何らかの理由でオレ達はそのゲームの中に吸い込まれてしまった。

そしてそのゲーム内で起こっている諸問題を解決。

その後、元の世界に戻り、無事に桜藤祭を迎える。

……といっても、当時は時間のループの異変を解決できていなかったため、
結局のところ強制的に時間は巻き戻されることとなるのだが。

「いい加減に学習しろって思うかもしれないけど……。
今回もＰＣの調子が悪いんです。直し方も教わってないし、お願いします！」

ゆたかさんは行儀よくペコリと頭を下げる。
その姿が、純粋な子供のように可愛らしく見えたため、思わず微笑んでしまう。

「モチロンだよ。これからよろしくね。ひよりさんも、パティさんも。」

……時間のループの理由は、最初に聞いたとおり花火による宇宙船の撃墜であり、
ゲームの異変は時空の歪みの副産物でしかなく、無視しても問題ないかも知れない。

それでも、みなみさんと関連している以上、手伝って益はあれども損はない。
みなみさんを助けるためには、それについて調査する必要もあるハズなんだ。

キーン……コーン……カーン……コーン……。

しばらくすると、校内に何の捻りもない予鈴の音が響き渡った。
オレはみんなに手を振って、駆け足で自分の教室に戻った。

終る世界、霞みゆく心［2］

オレ以外にとってさほど重要ではない授業は何事もなく終わりを告げる。

昼休みが始まると同時に、オレは昨日と同じくハイテンションなこなたさんに引きずられて体育館へとむかった。

本当だったらみなみさんのクラスに行きたいところだが、オレにとってこの劇は最重要と言ってもいいだろう。

……この劇に関しては関係者がズバ抜けて多い。

そして何より、オレが唯一自力で取り戻した、みんなとの恋愛関係に関しての記憶。
その記憶上での出来事は、この劇の後に起こることなんだ。

前のオレは彼女達全員と恋愛関係にあった。
詳しく言うと、こなたさん、つかささん、かがみさん、みゆきさん、みさおさん。
あやのさんに関しては、オレの片思いだったのでこれから除く。

劇のメンバーに限らなければ、
みなみさん、ゆたかさん、ひよりさん、パティさんの名が追加される。

……二股どころではない。十股？というヤツか。タチの悪い蜘蛛の

巣のようだ。
こんな事実を皆に話せるハズもなく、オレは胸の奥に閉まっていた。

「で、サトシ君。」

こなたさんの言葉に、オレは呼応するように振り向く。
そして、こなたさんの次の言葉に、オレが重大な見落としをしていたことに気づかされる。

この重要イベントを前にオレは……。

「セリフ、覚えた？」

まず参加条件を満たしていない！！

「え……、あの、えっと……はい。」

「……サトシ君、まさか。」

こなたさんの顔が悲しみに満ちる。そりゃそうだ。
今までは時間が巻き戻ることがわかっていたが今回は違う。

この世界は最後の世界。

白石の言う「最後はまだ来ない。」がループに関することでない限り、
ここがオレたちにとっての真実の時間軸であり、やり直しの聞かないものなのだ。

「あ、い、いや～……。」

なんたる誤算。いや迂闊。……認めよう、オレは完全にセリフの件を忘れていた。
だがしかしここで「忘れてた！」で済まされるのか？
オレの第六感が告げている。「そんなことは絶対にない」と。
大体、互いにとって損だ。下手するとオレは見捨てられ、代わりの人を探されるかも。

「バッチリだよ。」

「……本当に？」

疑いの目をかけられる。だが、不安そうに揺れる瞳にはいつものこなたさんの活力はこもっていなかった。
どこか、あきらめているようにも見える。

……その様子を見て、わかった。
きっと前のオレは同じミスを犯し、練習でブザマを晒したのだ。
高校生活最後の発表に対して、そのような態度で挑まれるのは嬉しくないだろう。

――ならばせめて、オレは失敗を犯さない。

「……フッ、フッフッフ。こなたさん、キミはオレを侮っている。」

「へ？」

「どぉ～っせ前のオレはここで、大失敗を犯したのだろう？
……だが、今のオレはそう甘くはないぞ！」

オレは両手を広げ無駄に神々しく、そして暑苦しく話す。

「劇の脚本の元ネタはゲーム！ならば原作プレイは必須！！
オレはすでにそれを購入済みだッ！……『ハイド・ステイアウェイ』
をな！！」

「『フェイト・ステイナイト』ね。」

「じょ、冗談だよこなたさん。」

危ない。知識０のオレがゲーム名を口に出そうとするんじゃなかった。
全然違う。語感がなんとなく似てるかなー、程度にしか合ってない。

「本当に大丈夫なの？無理しなくていいんだよ。
色々忙しかっただろうし、今の私はきちんと待つから……。」

やめてくれ！ただでさえジト目のこなたさんが更に
全てを諦めたような目線で見つめてくると、千ノナイフガ胸ヲ刺ーース！！

「大丈夫だと言っているんだこなたさん。
後で説明するけど、さっきほんの少しだけ記憶が蘇ったんだ。」

「え、さっき何かあったの？……って後で説明してくれるんだっけ。
」

「うん。……それでさ、練習中の記憶は戻ってないけど、
本番の記憶は結構戻ってるんだ。だから多分いけるよ、オレ。」

嘘であるとは言わないが、本番中の記憶と言えど、
観客として見ているみなみさんの姿しか思い出せない。

正直言ってセリフなど一言も思い出せていないが、
信用してもらわないと何も始まらない。

「……わかった。そこまで言うならキミを信じる。」

こなたさんの目に少し光が宿るのを見て、
オレは安心すると同時に一つのプレッシャーを背負った。

終る世界、霞みゆく心［3］

体育館の倉庫でオレはいそいそと衣装に着替える。
更衣室は女子達が使っているので、
この薄暗い場所で一人寂しく着替えることを余儀なくされたのだ。

オレは着替えながらも台本を眺め、
ケータイで『フェイト＝ステイナイト』についての情報を集めている。

さっきの、オレが原作を買ったというのはもちろん真っ赤な嘘。
それについてはこなたさんも気づいている様子だ。
だからといって、開き直って情報０で演技をするのもいい手ではない。

ギリギリの悪あがきをしつつ、ちょうど下着を脱ぎかけたところで……。

ガラッ

突然、扉が開く。

「おい、サトシいるかぁ？」

「えっ」

そこには見事にオレの素敵なトロピカルフルーツを

目にしたみさおさんが立っていた。

「……。」

「……。」

数秒間の沈黙が流れ……。

いつしかみさおさんの顔がみるみる赤くなり、オレから目を背けた。

「……スミマセンデシタ。」

「うん。気にしてないよ……。」

みさおさんはぎこちない動きでなんとか外に出ると、扉を閉めた。

……しばらくの間、気まずい空気が流れる。

「なぁ、サトシ。」

最初に沈黙を破ったのはみさおさんだった。

結局、大抵の重い空気は彼女が破壊してくれるのだ。

「なに？みさおさん。」

「……ちっこいな。」

「うるさいよ！？ねぇうるさいよキミッッ！？

……うう、もうお嫁にいけない。」

「お前はもらう方だろっ！！」

「実はオレ両刀使いなんだ。」

「バイかよ！でも例えバイであろうとお嫁にはいけないだろ！」

こうして、一通りボケとツッコミの応酬が交わされた後、
みさおさんは前触れもなく急に静かになった。

「……。」

「……みさおさん？」

何事かと思ったが、みさおさんの息を吸う音が聞こえ、
突如消えたわけではないことを知り、安心する。
みなみさんが消えたのも突然だったので、どうも彼女達からは目が離せない。

みさおさんはハッキリとした口調でオレに告げる。

「練習の後、ちょっと話しがある。」

「え、どうしたのみさおさん？」

あまりの強い口調に、オレは思わず聞き返す。
しばらくして、練習の後と言っているのに今聞き返してどうするよと思ったオレは、言葉を変えた。

「あー、そういえばオレも用事があるんだ。演技についてなんだけど……。」

……。

……。

……。

あれ!?また返事がない!
さすがに異変を感じ扉を開く。

だが

もうそこにみさおさんの姿はなかった。

「あ、あぁあぁぁあぁ……!!」

……消えた？今の一瞬で！？

何で……何で！？

何の前触れもなかった。意味がわからない！！

どうすればいい、今すぐ白石に連絡を――？

「おい、おせ～ぞサトシ。」

その声に反応して見上げると、もう劇の準備に入っていたみさおさんがこちらを見ている。

……消えていない。勘違いだったのか！？

「そら、さっさとはじめるぞ。『わたｓ　「よかったあああああああ！！」」

みさおさんはステージに登ることもなく、その場でセリフを読み始める。

だが、感極まっていたオレはそれを遮りみさおさんの体を抱きしめる。

そうだ。消えてはならないのだ。

正直言えば、オレは彼女たちのことをさほど大切に思っていなかった。

それは、やはり記憶を失っているオレにとって、
彼女たちが自分の友達であるという実感が沸いてなかったからだろう。

それでもなお、オレは今みさおさんが無事であったことに、涙している。
前の記憶がどうとか、そういうことはきっと関係ない。

これ以上人が消えるなんて、考えたくもないんだ。

みさおさんは驚き、目を見開いている。
頭の上にクエスチョンマークがいくつも浮かび上がっているように見える。

だがオレは、それに対し恥ずかしく感じることはなかった。
そんなことを感じられるほど余裕がなかったのだ。

みなみさんが消えてしまったことは、自分にとってかなりのダメージだった。

自分でさえ今までそれに気づくことができなかったが、
みさおさんが無事であったというだけで涙が止まらず、
腰が抜けているオレが今でもそれに気づけないわけもない。

「ちょ、な、何やってんだよオマエ！！」

「みさおさん……！いる、いるんだよな!?いる……確かにいる！！」

自分でも驚いていた。自分がこのような大胆な行動に出たことに。
そしてみなみさんが消えたことに対して少しも冷静になれていない自分に。

ループ中の記憶を少しばかり取り戻したオレだが、それでも『今の』オレは転校して来たばかり。
みさおさんと共に過ごした時間なんて、笑ってしまうほど少ない。
数日の間だけだ。

交わした言葉だって、一枚のノートさえ埋められない程度の量。

確かに、オレの脳裏には『前の』みさおさんの姿が焼きついているが、
それでも、まだ他人のようにしか感じられない。

そんな風にしか感じられない相手が消えそうだったというだけで、
なぜかオレはこんなにも焦り、涙で視界をぼやけさせたのだ。

……つまり、人間とはそういうものなのだ。

よほど感覚が鈍ってない限り、少しでも接点のある人間の命が
目の前で失われそうになったとき、人は必ず悲しむ。

きっと、そういうものなんだ。

「……ブラヴォー。」

「え？」

背後から小さな拍手が聞こえ、ひとつの影がオレに近寄る。
その影の主は、今回の劇の台本作成者である、あやのさんであった。

「今のは……アドリブ、というわけではなさそうだけど。最高だったわ。」

「え、あの、あの。」

「どこかのシーンと間違えた？でもあんなシーンはなかったか……。となれば、どこかに今のセリフを付け加えたかったの？」

「いやまぁ。」

「あと実名で呼んじゃうのも直してもらうとして、
でも、その演技力については合格以上。台本を作った私も報われるというものね。」

な、なんだなんだこの流れは。
オレは別にこんなベタな展開を求めてあんなことをしたわけじゃないぞ！

……あ、そうか。みんなはみなみさんが消えたことを知らない、むしろみなみさんのことすら知らないんだから、オレのあの行動の意味や理由がわかるわけがない。

だから、こんなよくわからない誤解を生んでしまったわけか。

……だがこれは利用できる誤解だ。
うまく使えばこの『セリフを覚えてない』というピンチを抜け出せるかも知れないぞ。

「台本を少し改変する必要があるわね。今ので少し目が覚めたわ。やっぱり、原作そのままじゃ演じる側もつまらないものね。」

「フッ……。焼き増しの世界には惹かれないからね。」

「いつまでステイアウェイ引っ張ってんのさ。」

こなたさんからの突っ込みが入る。だがここでひるむわけにはいかない。
こういうのに必要なのは勢いだ。無理やりでも納得してもらおう。

今日さえ凌げれば、明日までに台本を死ぬ気で読んで覚えるというのも可能なんだ。

「あやのさん。今日はオレ、自分の思うがままに演じてみるよ。それで何か感じるものがあれば、遠慮なく言ってくれ。一緒に話し合おう。」

そしてオレはこう付け加える。

「君たちは何度もループしてきた。それなのに、全く同じ内容を演じたって面白くないだろう?」

「……そうね。サトシ君、大切なことに気づかせてくれてありがと

う。

頭を冷やしてみる。今日のシロウのセリフは、あなたに任せるわ。」

あやのさんがオレのやり方に賛成してくれたのと同時に、

オレは振り返りこなたさんに清々しいほどの爽やかなドヤ顔を見せ付けた。

こなたさんは半ば納得していないようだったが、何も言わず黙っていてくれた。

終る世界、霞みゆく心［5］

「……いつまで抱きついてんだこのアホッ！！」

「ひでぶっ！！」

みさおさんに人間の急所である人中を思いっきり殴られる。

バトル物の漫画にありがちな着弾と同時に体を引くテクニックで致命傷を避けるも、
それでもたまらずオレは地面に倒れこんだ。

「い、いでっ！危ないよみさおさん！！もしオレが王道的格闘漫画を
熱狂的に愛するファンじゃなかったら、きっとこのまま意識を持っていかれてたよ！！」

「知ったことか！いきなり抱きついてきて！！
調子に乗っていつまでも……。何考えてんだよお前は！！」

「変化だ、改革だ！新展開だ！！キミたちもそれを望んでいるのではないか！？
いつもいつも同じ内容の劇を永遠とやり続けて、キミたちは満足できるのか！！」

オレはそういうと、こなたさんに目線を向ける。
それを見たこなたさんは、オレの表情を見たあと小さく首を縦に振った。

このコンタクトでわかったことがひとつ。
『こなたさんは彼女たちにこの世界が最後であり真実の世界だと伝えている。』
オレの視線の意味を瞬時に理解してくれたこなたさんの飲み込みの良さに驚きつつも、
同時にオレは冷静に次に発する言葉を考える。
『もしこの世界が最後だとしたらキミたちは本当にそれで後悔しないのか!?』
というつもりでいたわけだが、予想外にもこなたさんがこの事実を彼女たちに
伝えていなかったので、混乱を招かないよう別の言葉にすり替える。
「後悔先に立たず、だぞ?キミたちもこの世界が最後であり真実の世界だと知っているだろう!!
それをなんだ、今までと同じことを繰り返すだけでいいとでも言うのか?否、断じて否ァ!!
オレたちは今から新たな思い出の1ページを描いてもいい筈だ!そうは思わんかねみさおクンッッ!」
「それには同意するけどそのキャラどうにかなんねーのかよ。
それと、そのためにもうチアダンスの計画立ててるから。」
「それはオレが関係しない!……正直に言おう、なんかこれ、オレだけ疎外感がやばい!
みんなもう慣れっこのように演じてるのにオレだけ素人丸出しで泣きたくなっちゃうわ!」

みさおさんは一つため息を漏らすと、こなたさんも驚きのジト目でこちらを見つめる。
ぐ、なぜそんな哀れむような目で見つめるんだみさおさん。
そんな蔑むような目で見つめられると、オレは新たな性癖に目覚めてしまいそうだぞ!?

「つまり、『寂しいから一緒に一からやり直そうよ』って言いたいんだな？」

「左様にございます。」

「その為に私に抱きついたと。」

全然違う。……だが、今はそういうことにしておこう。
みさおさんには後で二人で話すときに真相を伝えればいい。

この嘘は互いに損のない嘘だ。人を陥れるような嘘は最低だが、場を落ち着かせるためのものは、社会に生きていく中で必要不可欠なもの。

新展開のためだけに抱きつくなど、軽い男だと思われそうだがここはこらえることにする。

「後悔はしているが反省はしていない。」

「サトシ君、それ逆。」

またもこなたさんからツッコミが入る。

「ほー、つまり『こんなヤツに抱きついて何やってるんだオレ』と

後悔はしているが
その行動に対しての反省は一切していない、と。そういうことだな。
」

みさおさんが拳の骨を鳴らしながらこちらに近寄ってくる。……目が本気だ。
殺るき満々じゃないか！まさか、ネタセリフを少し間違えただけでこんなことになるなんて……！！

「ま、まってくれみさおさん、誤解だ！誤解なんだ、聞いてくれ！！抱きついたときとても柔らかくてそれと共に良い香りがあれ何言ってんだオレえっとつまりあの……！！」

オレは自分を落ち着かせるために一つ息を吸い、真剣な眼差しでみさおさんを見つめた。
心が落ち着いたと感じたところで、オレはゆっくりと言葉を放つ。

「後悔なんて、あるわけない。」

「結局ネタにもっていくのかよ。」

みさおさんはあきれた様子でオレから目を逸らす。
そして、何事もなかったかのように練習のためにステージへと歩き出した。

「バカやってるヒマあったら、さっさと練習するぞこの変態。」

「へ、変態とはオレのことかみさおさんっ！！」

「あたぼうよ！……人のことをとても柔らかいだの良い香りだの！！抱きついてる間そんなこと思ってたのかよ！そしてよくもそれを平然と！！」

「事実なんだがなぁ。」

「……ッ！バ、バーカバーカ！！お前、練習でミスしたら許さないからな！！」

みさおさんは憎たらしそうに舌を出し、ステージへと走っていった。

終る世界、霞みゆく心［6］

……疲れた。

あの後俺オレは、勢い任せの演劇をした。
あやのさんはオレの動きを注意深く見ながらノートに筆を走らせていた。

そして、ことあるごとに注文を付けられ、逆に辛い練習に感じることもあった。
あやのさんが考えたオリジナルの展開を試しに演じさせられたりもした。

兎にも角にも、この場は乗り切れたようである。

オレはみさおさんに呼ばれていたことを思い出し、先ほどの体育館倉庫に向かう。
ついでに、携帯を開きもう一度メールをチェックする。

やはり、みなみさんに関するメールが削除、または改ざんされている。

……つまり、完全にこの世界との関連を断絶されているのだ。

きっとこの先、みなみさんに関する写真を見ても記録を見ても、そこにみなみさんの姿はないのだろう。

さすがにそんな非現実を信じれるハズもなく、
誘拐されていたり、殺害されているのではと疑ったこともあったが、
冷静に考えれば、周りの反応からしてもそれはないことがわかる。

……気になっているのは、今朝、白石と話した内容。

「世界からみなみさんの存在が消滅した」のではなく、
「みなみさんの存在しない世界にオレが来た」という仮説である。

この仮説も、みなみさんが消えるという事態が起きてすぐではあれど、
あまりに矛盾点がないためあながち間違いでもないのかもしれない。

とすると、ＳＦやファンタジー系の物語に良く現れる「平行世界」、
いわゆるパラレルワールドが実在することを認めなければならなくなる。

だが、パラレルワールドが存在するというのは信じやすい。

タイムリープを経験しており、今も絶賛リープ中のオレたちにとって
未来は運命付けられたものではないということは容易く理解できる。

未来は決められてなどいない。いくつもの可能性は存在する。
そして、その可能性一つにつき、世界はいくらでも存在するのだろう。

となると、前の世界と今の世界では違う可能性で形成されているということになるが……。
その辺の話は専門外なので、後で調べることにする。

「よぉ、サトシ。……待ったか？」

「待つも何も、練習終わって5分もたってないじゃないか。」

「ま、まぁそうだよな。ごめん、こういう時なんて言えばいいかわからなくて……。」

薄暗い体育館倉庫の中で、電気もつけずに座り込むみさおさんの姿がそこにあった。
その表情は、明かりがないせいでよく見えない。

「みさおさん、明かりつけないの？こんな暗くしてちゃ、目を悪くするよ。」

「……いや、いい。そのままにして。」

「え、あ、うん……。」

……静寂が流れる。先ほど、練習前にここで出会った時の雰囲気と同じ。

どうしたものだろう。オレに用事があると言って呼び出したのはみさおさんだが、
流れからするに、オレから話題を作るべきなんだろうか？

「あのさ……。」

そんなことを考えていると、先にみさおさんが話しかけてきた。

「えっと、何かな？みさおさん。」

「……私にもよくわからないんだけど。」

「多分、私お前のことが好きだわ。」

「はい？」

……静寂が、途切れる。

あまりに唐突な告白に、オレは思わず言葉を失う。

だが、すぐに合点がいく。これは唐突なんかじゃない。

彼女がオレに告白した理由を、オレはもう知っているじゃないか。

だから、オレは自分でも驚いてしまうほどその告白に即答した。

「ごめん。」

「……えっ？」

「オレじゃあ、キミの好意に答えられない。」

みさおさんとは先日もこのように二人で話した。

そのみさおさんの顔はとても真剣だった。

『とっても重要なことなんだ。』

『すっげぇ重要なことなんだ！でも思い出せねぇ！』

みさおさんが、そんなことを言いながら一人で悩んでいたのを思い出す。

そして、『思い出さないといけない事があった気がした。』
『それを少しだけ思い出した気がする。』と、オレに打ち明けたんだ。

みさおさん曰く、それは『オレが思い出してくれないとダメ』なことで、
『自分だけ思い出してても意味がない』ものだったらしい。

それに対し、力になれるかもしれないから言ってくれと頼むも、
『力になる』という言葉が出る時点で問題外というような口ぶりを受けた。

その後、思い出したことの内容を教えてくれる寸前に、
「あ～、まあどうでもいいじゃん？」みたいな流れに持って行かれたのだ。

白石に鈍感ヘタレと言われても、文句は言えないな。

つまり、あの時からみさおさんはオレに好意を伝えるつもりでいたんだ。

だが……。

「そ、そっか、そうだよな。あはは。」

みさおさんの表情は見えない。

だがオレはもう電灯をつけようとは思わなかった。

見えなくてもわかる。

泣いているのだ。

それはそうだ。自分が好きになった相手に告白して、こんなにもあっさりと断られれば、涙くらい流れる。

女の子を、泣かせてしまった。

みなみさんの時と同じように、オレは胸に確かな痛みを感じていた。

だが、これはこの子のための痛みだ。

泣かせてしまうことは分かっていた。

それでも、オレは少し厳しくみさおさんにあたるべきだと思ったのだ。

確かに、みさおさんはオレに好意を伝えるつもりでいた。

だが……、違うのだ。伝える相手が違う。

「キミが好きなのはオレじゃないだろう。オレじゃあ答えられないよ。」

「え、何を言って……。」

オレ宛てでない好意を、オレに伝えて、どうするんだ。

「教えてあげようか？劇の後にあった出来事。」

「……！？知ってるのか、サトシ！！」

「ああ。昨日、みさおさんと二人で話す前には思い出していたよ。」

オレの言葉に、みさおさんは目を丸める。

だが、意味を理解したのか、みさおさんは少し言葉を荒げてオレに迫る。

「私と話す前って……！じゃああのとき思い出してたんじゃないか！！」

「いや、キミと過ごした日々は思い出せてなかったよ。劇の後だけだ。

今は……、限定的ではあれど、キミとの毎日も覚えてる。」

「劇の後……。劇の後、なにがあったんだよっ！」

みさおさんは期待とも不安とも言えぬ顔でこちらを見つめる。

そして、オレが言葉を放つ前にみさおさんはか細い声で言う。

「……その時も、断られたのか？私の片思いだったのか？

そうだよな……。私、いいとこないもんな。私なんかじゃ……。」

「劇の後、オレとみさおさんは口づけを交わす。」

「……！？それって……！！」

「うん。それ以降の記憶はないけど、きっとあの雰囲気だと

時間が巻き戻るまでの間仲良くやってたんじゃないかと思うよ。」

「じゃ、じゃあなんで……。そこまで知っててなんで!?
なんで『力になる』なんて言い方したんだよ!!」

やはり、そういうことか。

「なんでって、キミが重要なことを思い出せそうで思い出しきれないって
オレに打ち明けてきたから、オレが知ってる真実を伝えようとしただけじゃないか。」

もういい。

「なんだよそれ……。なんか、なんか違うじゃんか!!
だって私たち、その、そういう関係に一度はなったんだろ?
なのにそんな、失った記憶を探すための手掛かり程度のことみたいに……!」

結局キミたちは、『今の』オレを見てはくれないんだね。

「私たちって、なにさ。なんでオレをいれようとするの?」

終る世界、霞みゆく心［8］

「な、何言ってんだよ、オマエ……。」

「だっておかしいじゃないか。」

続ける。

「キミが好きなのは、『前の』オレだろ？」

続ける。

「キミが思い出したことって、『前の』オレとの生活だろ？」

続ける。続ける。

「こなたさんも。」

続ける。続ける。続ける。

「つかささんも。」

続ける。続ける。続ける。

る。続ける。続ける。続ける。

続ける。続ける。続ける。続ける。続ける。続ける。続ける。続ける。続ける。

「かがみさんも、みゆきさんも、ゆたかさんも、みなみさんも、パティさんも、ひよりさんも、
みいぃぃぃぃぃぃんな、『前の』オレが好きなだけじゃじゃないか。」

頬に冷たい感覚が流れる。
ああ、なんというかオレって無駄に涙もろいなあ。
でも泣いても仕方ないんじゃないか？

「『前の』オレと限りなく近いって理由でオレに告白してるだけ。
別の世界のオレなんて、オレに近いけど全く違う。
別人、他人なんだよ。近く、どこまでも遠いモノなんだ。」

だってオレ、誰にも必要とされてないんだぜ？

「え？」

え？

「え、オマエ……えっ？そんなこと気にしてたのか？」

「は、はい？」

「いやだってオマエ、あー……。まぁ、なんとなくわかるけどな。」

な、なんだなんだ？何を言ってるんだみさおさんは。

突然一人で納得したような態度を取られても困るだけだ。

「いやー、泣いて損した！割とガチで落ち込んでたぞ私！」

「みさおさん、キミは一体何を……？」

「今度こそ、言うよ。……わかってると思うけど、一回しか言わねえかんな！」

『……一回しかいわねぇから、良く聞いとけよ。』

昨日みさおさんは同じようなことを言いかけた。

オレはみさおさんのまっすぐ見据える瞳に胸の高鳴りを覚えながらも、

頷き、みさおさんに耳を傾ける。

「いつだって変わらない。私は今でも、オマエのことが、……好きだぞ。」

『いつだって変わらない。私は今でも、先輩の事が、……好きです。』

キミは……。

キミ達はどこまで、オレを呆れさせるんだ。

――――『いつだって変わらない。』

でもオレは『前の』オレから『変わっている。』

――――

「しっかりするんだ、みさおさん。」

オレはみなみさんに言った言葉と全く同じ言葉でみさおさんを叱る。

「前のオレはここにはいない。いまここに立っているのは、
君が好きなサトシじゃない。どうか目を覚ましてくれ。
……キミは今、オレの中に他人を見いだしているだけなんだ。」

「……この鈍感ヘタレ。女の方からこんな
こっ恥ずかしいセリフ言わせて、何を言ってるんだよ。」

どっ……。

この子までそんなこというのかよ。

みさおさんはオレをみると、呆れたように笑った。
でも、なぜかとて優しい笑い方だった。

「今、オマエと話してもきっと理解してくれないだろうけど。
私とオマエは同じなんだぞ、サトシ。」

「同じ？……何が？」

みさおさんはくるり、と体を翻すと、オレと反対方向にあるきだす。

「……その『何が』が解ったら、
もう一度ここで……思いを伝えるよ。」

そういうと、みさおさんは倉庫から音も立てずに歩き去った。

「なんなんだよ……一体。」

薄暗い倉庫に一人取り残されたオレは、そう呟くことしかできなかった。

終る世界、霞みゆく心［9］

一人でぼーっとしていても仕方がないと思ったオレは、
ゆたかさんの出し物の準備を行うべく歩きだす。

ゆたかさんは出し物の内容を「メイド喫茶」と言っていた。
ネット喫茶も兼ねているので、正しくは「メイド&ネット喫茶」と
言うべきだが。

……いや、本当はその呼び方すらも正しくはない。

『前の』出し物の準備の際、みなみさんも一緒にいたようで、
その時の光景は脳内で映像として残っている。

映像によると、「メイド喫茶をする予定だが、衣装合わせを願えない
か」と
ゆたかさんたちがオレたちの前に現れたらしく、それをこなたさん
が受け入れた。

しばらくして、天枷美夏のコスをしたゆたかさんと
綾波レイのコスをしたみなみさんがもじもじとしながら帰ってきた
のだ。

それを見てオレはどこがメイドなんだよとツッコミたくなったが、
『その火野サトシ』は特に疑問を感じなかったらしい。

だがこのオレからすればそれはメイド喫茶ではなくコスプレ喫茶な
ので、
申し訳ないが、これからは勝手に「ネットコス喫茶」と称させて頂

く。

「あ、サトシ先輩、練習お疲れ様です！」

辺りも暗くなっていて、もうゆたかさん以外は帰っているというのにゆたかさんは帰らず作業をしていた。

といっても残るはＰＣの調整作業だけのようで……。

「遅いよサトシ君。そろそろ作業おわっちゃうよー。」

そこにはこなたさんの姿があり、黙々と作業をしていた。

「あれ、こなたさんも呼ばれたの？オレだけでやることになると思ってたのに。」

「念には念を押さないとねー。サトシ君がネトゲを起動したら困っちゃうもん。」

「オレがネトゲの世界に飛ばされてしまうから？」

「そうそう。それについては話したハズだけど、何かの間違いで行かれちゃうと困っちゃうよ。」

ネトゲの世界で何時間過ごしても、こっちの世界に戻ってきたときは全然時間は経っていなかった。

だから直接的に困ることは無い筈だが、多分こなたさんは演劇のことを言っているのだろう。

ネトゲの世界に取り込まれたオレが何事もなく帰ってきたとしても、

多分オレは、疲れきって帰ったら倒れてしまうだろう。
それだと、せっかく今日の演劇練習を凌いだ意味がない。
「あーでも、私が好きな『ラッキースターユニバース』を起動したから飛んだんだよね。
別ゲーだとどうなるのかなー。集中力切れてきたしネトゲしたいなー。」

「お願いだからやめてくれこなたさん……。今日はちょっと疲れてるんだ……。」

「冗談だよ、冗談。さて、ちゃっちゃと終らせちゃいますかー。」

ＰＣがエラーを吐き出す理由をもう知っているオレ達は、
瞬く間にすべてのＰＣの環境を最適化させた。

ネット喫茶を開店するためにクラスの生徒が持ちよったＰＣは
ネットワーク接続設定が自宅用の接続設定になっていたので、学校のプロパイダに適応させたのだ。
手順は分かっていたので、時間は思ったより掛からなかった。

「いやはや、ネットワーク設定をいちいち変えなきゃいけないのが嫌なところだよね。」

「私のＰＣはＭａｃｉｎｄｏｗｓ７だからそういう設定は自動でやってくれるのだ！」

「なん……だと……！？」

Ｍａｃｉｎｄｏｗｓ７、ＭｉｃｒｏＡｐｐｌｅＳｏｆｔ社が開発した最新のＯＳじゃないか。
さすがはネトゲ廃人。オレですら少し評判の悪いＭａｃｉｎｄｏｗｓ　ＶＲＩＳＴＡだというのに。

「さて、やらなきゃいけないことも終ったし。それじゃ、サトシ君。おっさきー。」

「あ、うん。ばいばいこなたさん。」

「ばいばいさるさん。」

「いや確かに似た響きのセリフ言って悪かったけど
別れの挨拶にまで２ｃｈネタ持ってこないでよ……。」

「おおぅ、これも知っているとは。今回のサトシ君は本当に一味違うねぇ。」

こなたさんは、感心した！とオレの肩を叩いて、そのまま教室から出て行った。

予定より早く終わったとはいえ、１時間はここにいた。外はもう暗くなっている。
早く帰って演劇の台本を覚えなければ……。

「ゆたかさん、これでここにあるＰＣの設定は全部大丈夫だから。」

といっても、数十年前のネットにすら繋げないモデルがあったのでそれは諦めたのだが。
ＭＳ－ＤＯＳ時代のものがなぜあるんだよ。今じゃあ逆に貴重品だ

ぞ！？

「それじゃ、オレも失礼するね。」

「あ、あの、先輩っ。」

「ん？なんだい、ゆたかさ……。」

振り向くと、そこには大粒の涙をこぼすゆたかさんがいた。

「え、ええ、ゆたかさん！？どうしたの！！」

「寂しいんです……。」

「えっ？」

「……なんでかな……なんでかな……。……っ……寂しいっ……よぉっ……。」

「なんで寂しいんだろ……。……わかんない……。わかんないけど……寂しいよぉっ……！」

「ゆたかさん……。」

「なんだか……急に一人になっちゃったみたいで……。
ひよりちゃんもパティちゃんもいるのに……。……急に誰かいなくなっちゃったみたいで……！！」

必ず。

必ずみなみさんを、連れ戻してみせる。

「任せろ、ゆたかさん。オレに……先輩に、任せろ。」

「サトシ先輩……。」

「今は苦しいかもしれない。苦しい理由もわからないかもしれない。
でも、それはすぐに癒えるから。必ず癒すから。大丈夫、大丈夫だから……。」

『大丈夫』。……一体誰に対しての言葉だろう。
泣きじゃくるゆたかに対して？消えてしまったみなみさんに対して？

「大丈夫、大丈夫だよ……。大丈夫……。」

オレは自分に言い聞かせるように、その言葉を繰り返した。

「……先輩……。」

「なんだい、ゆたかさん。」

「私……、知りたいことがあるんです。」

オレには何を言っているのか、すぐに予想がつく。
だが、なぜゆたかさんが知りたいことをオレが知っているとわかったのだろうか？

「劇の後のこと……、かな？」

「やっぱり、知ってるんですね。先輩、私たちが知らないことを知っているみたいだったから。」

「言ってもいいけど、知る意味はあるの？」

ゆたかさんは静かに笑うと、首を横に振った。
その表情は、小さな体に反比例してとても大人びて見えた。

「いえ、意味はありません。」

「じゃあ、言わなくてもいい？」

「はい。劇の後に何かがあったってことがわかれば、十分でしたから。」

そういうと、ゆたかさんは突然静かになり、オレの目を見つめる。
ときどき紅くなりながら、俯きながら、それでも口を開こうとする。

オレはもう、ゆたかさんが何を言うか分かっていた。

終る世界、霞みゆく心［１０］

ごめんなさい、と。先に言ってしまおうと思ったが、それはいけない。
それはゆたかさんの覚悟を踏みにじる行為だ。

そしてなによりオレは、このゆたかさんの変わらぬ思いを聞かせてやりたいのだ。
どこか遠いところで。どこか近いところで聞いているであろう、『火野サトシ』に。

「えっと、……えっとね？」

「……お兄ちゃん。」

「……ごめｎ　……？」

おに、鬼？鬼ｌＣＨＡＮ？
え、もしかして、兄？

「ＡＮＩ……？」

「えっ？」

「あに、ＡＮＩとはなんだ！？なんのアニだ！！」

「キミが言うＡＮＩとは

本人から見て傍系2親等の年長の男性、通常は同じ父母から生まれた年長の男性をいう。

また自分の姉と結婚した男性、すなわち姉婿や配偶者の兄も本人から見たら兄になる。

その場合、義兄（ぎけい）と書いて「あに」と呼ぶ場合が多く、対象者より年上であるとは限らない。

また、親の養子や親の再婚相手の連れ子が年上だった場合も義兄にあたる。

一般的に兄にあたる男性は、本人から「お兄さん（おにいさん）」「お兄ちゃん」と呼ばれ、

一方で彼が自ら弟妹に対して呼びかける際に用いる自称でもある。　※Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　兄　より抜粋

の兄か！！」

「えっと、やっぱり違ったかな。私なら絶対こう呼んでると思って……。」

予想外のことを言われて混乱しきったオレに電流が走る。

そうだ。

劇の後……。オレは星桜の木の前休んでいて、そこにゆたかさんが現れる。

そしてそのまま二人は唇を重ねるわけだが……、その瞬間にゆたか

さんはこんなことを言っていた。

『お兄ちゃんって……呼んでもいいですか……？』

「い　い　に　決　ま　っ　て　ん　だ　ろ　！！！！！！！！！！」

「あ、あの……？」

なんて趣味をしているんだ前のオレよ！褒めて遣わす！
つーかそんなことを提案するゆたかさんもゆたかさんだよ！！
すごい、すごすぎる、犯罪的だ！！
後輩という立場……その小学生のような見た目の体の子からッッ……
……たった数日の間で「お兄ちゃん」ッッ！……染み込んできやがる……魂に！！
ぐっ……溶けそうだッッ……！！本当にやりかねない……！
ゆたかさん一人のために……強盗だって……！！
い、いかん、取り乱すな。彼女はいま間違ったことをしようとしている。
オレとその鬼ＩＣＨＡＮは別人だということをきちんとわからせなければ……。

「ご、ごごめんゆたかさん、おいらとりみだしちゃっちゃ。」

「今も十分取り乱してます……。」

「こ、この際言っちゃうけど確かにあってるよ。
劇の後、そのオレとゆたかさんはキスをしたんだ。」

「そ、そうなんですかっ……。」

ゆたかさんの顔が紅くなる。
予想はついてたのだろうが、それでも恥ずかしいらしい。

「その直前に、そういう風に呼んでもいいかって聞かれたんだけど……。」

どう答えたかは、覚えていない。
でも、その問いの後にキスをしたわけだ。想像がつく。

「あ、あのっ。じゃあ、これからも……。」

もちろん！て言うか是非呼んでください！！
……と、思わず言ってしまいそうになる。

駄目だ、駄目だ。

彼女のお兄ちゃんは誰だ？
オレじゃない、前のオレだ。

「……ダメだ。」

「えっ。」

「オレ的にはにぃにぃの方が……じゃなかった。
……ごめんけどオレはキミのお兄さんじゃない。」

本音が出かけてしまうが必死で抑え、ゆたかさんをなだめる。
まるで、わがままな妹を優しく叱るように。

「キミがお兄ちゃんと呼んだ火野サトシは、消えてしまったんだよ。
もしかしたら……、オレの代わりに帰ってくるかも知れないけれど。
」

だが、それに対しての反応は意外なものだった。

「それが、どうしたんですか？」

「えっ？」

「なにか、問題でもあるんですか？」

「いや、だからキミが好きだったサトシとオレは……。」

「別の時間を生きてきたあなただから、違う記憶、違う人格を持った
たあなただから別人……。
そういいたいんですね。それで、一体なんの問題があるんですか？」

「いやだから。」

「前のサトシさんも、今のサトシさんも、私は大好きですよ?」

「それは……、前のオレを……。」

今のオレも、好き?……嘘だ。
それは前のオレと同じ見た目をしているから……。

「私、わかっちゃうんです。最近、お姉ちゃんも暗い顔をしてる。悩んでるんですよね。なにか、あったんですよね。それと、戦ってるんですよね。
それなのに、私のことを受け止めてくれて、そして、心配ないって……。」

前のオレが好きだったから、その流れで……。

「どの時間軸でも、あなたは優しくて、かっこ良かった。
どんな時間を生きたあなたでも、変わらず私の心を動かした。」

自分が好きだった相手と同じ見た目だから好きなだけだろう……?

「キミだけじゃない……。そのオレは最低なヤツだ。
ほかにも片手に入らないほどの数の女の子たちと……。」

「でも、きっとそのなかの誰も、あなたを外見で選んだ人はいないと思うんです。」

「それはっ……。」

それは……。

「サトシ先輩。……お兄ちゃん。」

「私は、誓えるよ。私は、前の世界の記憶を失っても、絶対に、絶対にお兄ちゃんのことを好きになる。」

「オレは……『オレ』は……。」

「区別するような口調で言わないでいいんだよ。オレだろうと、『オレ』だろうと、『前の』火野サトシだろうと、『違う』火野サトシだろうと、……私たちを、変わらず守ってくれた。そしてそれは、今だって同じだった。」

「いつだって変わらない。私は今でも、お兄ちゃんのことが、……好きだよ。」

ああ

そういうことだったのか。

……その『わけ』が解ったら。

……その『何が』が解ったら。

今、解った。

キミたちは

今のオレのことも、こんなにも見てくれていたんだね。

終る世界、霞みゆく心［11］

「確かに私たちは出会ってまだ3日目です。」

「うん。」

「私は今のあなたが好きです。……だけど。
それは私に記憶を失う前のサトシさんと過ごした過去があるから、
未練に突き動かされているだけかも知れない。そう思っているんですよね。」

「……うん。」

「けど、私から見てのあなたは、今も前も関係なく魅力的だった。
サトシさんは、サトシさんだった。私はそれに確信をもてます。」

「……うん。」

感極まったオレは、優しく諭すゆたかさんに対して、うなずくことしかできない。

オレは何故、涙を流しているのだろう？

オレは何故、認められたがっていたのだろう？

ゆたかさんの言葉で、気付く。

オレが彼女たちと出会って、まだ3日目だということに。

何故だろう?

オレはここに転校してきた初日から、
『前の自分』と別物になるためだけに走り回っていた気がする。

たったの3日で友達を作るどころか、
自分の人格を認めさせることなんてできるわけがない。

なのに、オレは無意識に自分自身を認めさせようとしていた。

何故だろう?

もしかして、記憶は完全には失われてなかったんじゃないだろうか?

オレは転校初日の自己紹介の場面を思い出す。
その時のオレは、なぜかこなたさんたちの反応だけを聞き逃していなかった。

つかささんは、『知ってるよ〜、サトシ君。』と。

こなたさんは、『こんなに長々と話して疲れないのかねぇ。』と。

みゆきさんは、『そういえば、今回は自己紹介が長いですね。』と。

たくさんのクラスメイトがいるなかで、この3人に意識が言っていたのだ。
自分の趣味などの話をしている間も、ずっと彼女たちに目線がいっていた気がする。

みんなと、ずっと一緒にいたような気がして。
でも、みんなにとっての『サトシくん』は、オレの知らない誰かで。
みんなオレじゃなくて、違う誰かを見ていて。
なんだか、とても寂しい感覚に襲われたんだ。

「私はサトシさんの中に他人を見たつもりはないです。
そしてもし、前と今のサトシさんが別人だったとしても、
きっと私はどちらにも惹かれていたと思うんです。」

オレの考えすぎだったんだ。

みんなは、オレを通して前のオレを見出していたんじゃない。

「確かに、サトシさんの喋り方や仕草は前とは違います。
でも、あなたの本質は。私があなたにひかれた理由は何も変わっていなかった。」

どちらのオレも見て、オレの本質を見てくれていたんだ。
オレの表を見ずに、内面を見てくれていたんだ。

……涙が止まらなかった。あの転校初日の世界史の授業中の出来事以来から、
オレは心の中でずっと孤独を感じていたのに。

もう認めてくれていたんじゃないか。

オレの内面を。前も今もない、本当のオレを。

見せ掛けや建て前じゃない、本当のオレを。

声も出せず泣くことしかできないオレを、ゆたかさんは包み込むように抱きしめる。
……さっきとは、全く逆の立場。

自分のことを情けないと思いながらも、それでも離れたくはなかった。
ゆたかさんの温もりに、もう少し包まれていたいと思った。

オレよりも一回りも二回りも小さな体に、なぜこんなに大きな温もりを感じるのだろう？
自分に問う。……だが、答えはとっくにわかっていた。

これは、ゆたかさんの心の温もり。

「……ねぇ、ゆたかさん。」

「……なんですか？」

「お姉ちゃんって呼んでいい？」

「えっ？」

不思議なことに、オレの口から最初に出た言葉は、そんなジョークだった。

でも、ゆたかさんの温もりに、心優しい姉を感じたのは事実だ。

「いや、なんか姉でも出来たような感じだったからさ。」

「い、いや、おかしいですよ。後輩なのにお姉ちゃんなんて……。」

「まぁ、そうだよね。うん。オレは一体何を言ってるんだろう。」

「でも……、私が『お兄ちゃん』って呼ぶのは、おかしくないですよね？」

ゆたかさんはすこし恥ずかしそうにそんなことを口にする。

だが、オレはそれに対して即答した。

「おかしいね。」

「え……。」

「最近の兄妹が互いに敬語を使うのは、ちょっと不自然じゃないかな？」

ゆたかさんは頭上にクエスチョンマークをいくつも浮かべて、首を傾げる。
しばらくして意味が分かったのか『お兄ちゃんのバカ』と言って、もう一度オレを強く抱きしめた。

終る世界、霞みゆく心［12］

身体に纏わりつく不思議な浮遊感はベッドに倒れても離れなかった。
あんなことがあった後なんだ。そりゃあ足は浮き、感情が高揚するさ。

みなみさんを助ける決意と、ゆたかさんへの思いでオレの思考回路はパンク寸前だった。

そんなオレの混乱も、一通のメールで解けることとなる。

Ｐｒｒｒｒｒ．．．　Ｐｒｒｒｒｒ．．．

「メール……？ひよりさんだ。どうしたんだろう、こんな時間に。」

突然のメールにそんな言葉を発してしまうも、すぐに気付く。
同人誌即売会の準備を手伝うことになっていたんだ。

放課後は演劇練習、そしてネットコス喫茶の準備に行っており、
即売会の準備に行ける予定は最初からなかったのだが、
それならそうと連絡するべきだったと後悔せざるを得ない。

「メールの題名は……。げ、『来ないとは何事だ』って。」

さすがに怒っているのだろうか？

でも、ゆたかさんのクラスの準備ということは

クラスメイトであるひよりさんやパティさんにも関係があることであって。
それについてゆたかさんが説明していないとは思いづらいのだが。
とにかく、本文を開くことにする。

名前「田村　ひより」――　題名『来ないとは何事だ』

手伝ってくれるって約束したじゃないですかァーッ！！
ってまぁ冗談なんスけどね。
今日は先輩お二方がこれないことは知ってましたし、
2人でできる作業を中心に片付けてました。
明日は絶対来るッスよ～。

やはり知っていたようだ。安心した。
でも、それは連絡しなかった理由にはならない。反省しなければ。
それにしても、メールの内容を見るにこうさんもこなかったのだろうか？
彼女が来ない理由は考えづらいが、逆に無理に考える必要も無い。

人のプライベートに首を突っ込むのはやめておこう。

『行けなくてごめんね。一応、ＰＣのセッティングは終わったよ。』

これでよし、と。メール送信。

オレが送ったメールの返事はすぐに返ってきた。

―――――――――――――――――――――――――

名前「田村　ひより」―　題名『ありがとうございました。』

―――――――――――――――――――――――――

先輩お二方には感謝してます。

私たちではどうしようもなかったんで……。

いつかお礼はさせていただくッス！

―――――――――――――――――――――――――

お礼なんかいいのに、とオレは微笑んだ直後、なにかおかしいことに気付く。

先輩お二方？こうさんはＰＣのセッティングに何も関係してないんだが。

『こうさんも来る予定だったの？こなかったみたいだから、今回はこなたさんとゆたかさんで作業を終わらせておいたよ。』

オレは急いでメールを送る。

この時、オレはもう気付き始めていたのかもしれない。
この会話の噛み合わない感じに、オレは覚えがあった。

名前「田村　ひより」―　題名『そうなんスか？』

こう先輩は行ったっていってたんスけどね……。
なんだか先輩のクラスのみなさんにも迷惑かけたようで。
申し訳ないッス。

メールが届くと同時にオレは素早くメールを打ち始める。
どんな返信が来るか、もう予想がついているのに。

『こなたさんはオレのクラスだけど、ゆたかさんはキミのクラスだよ（笑』

少し時間を置いて、そのメールへの返信が届く。

名前「田村　ひより」―　題名『そうなんスか？』

ありゃ、また先輩の『記憶に封じ込まれてた恋人』ですか？

とりあえず、ウチのクラスにはそんな子はいないッスけど、大事な人なんスよね！諦めなければきっと見つかるッスよ！

――――――――――――――――――――――――――――――

また先輩の……？

とりあえず……？

ふざけるな。

消えたんだぞ。

また、キミのクラスメイトが消えたんだぞ……。

Ｐｒｒｒｒｒ．．．　Ｐｒｒｒｒｒ．．．

さっきのメールに返信もしていないのにまたも携帯が鳴る。

画面をみてみると、送信者の違うメールであった。

送信者は、かがみさん。

そうか。

あの子もか。

あの子も消えたというのか。

やけに理解の早い自分の頭に腹が立つ。

名前「柊　かがみ」―　題名『反省してるの？』

次抱きついてきたらグーで殴るわよグーで！

でも、頑張ってたみたいだから、今回は許すわ。

明日こそまともな演技できるように頑張りなさいよ。

かがみさん……。

それは、みさおさんの立ち位置なんだよ……。

「うぅうぅうおぁぁああぁああああぁあぁあああ！！」

夜の静けさに、様々な感情の篭った雄たけびがこだました。

終る世界、霞みゆく心［１３］

……一体、今はいつだろう。

そんなことを思うくらいに、オレの頭は一杯一杯だった。
携帯電話に表示されている時刻は、１３：１５。昼休みもそろそろ終わりだ。

授業中もずっと考え事をしていたからか、昼休みまでの時間がとても早く感じた。
……あのメールが届いてから、オレはずっとこんな調子だ。

昨晩、みさおさんとゆたかさんが消えたことがわかってから、それ以降のことをオレは断片的にしか覚えていない。

寝て、起きて、今朝もみんなが迎えにきて。
……その中には、みなみさんも、みさおさんも、ゆたかさんもいなくて。

みんなと何か話したかも知れないし、何も話さなかったかもしれない。

そのまま学校につき、記憶の不完全なオレ以外には何の意味もない授業を繰り返し、今に至る。

そんな状況でも、オレは気付いていた。
みさおさんとゆたかさんに関する記憶が頭に入っていることに。

昼休みの練習では別のことを考えながら演じたが、それでもなお、場を圧倒した。

前のオレが演劇で練習を共にしていたみさおさんと過ごした映像が脳裏に焼きついていたから、演劇の台本の内容及び演じ方はわかっていたのだ。

不思議がるみんなに話しかけられたが、まともに相手にしなかったような気がする。

……さて、オレが一体何を考えているのか。

それは、あの3人が消えた理由と、それに対してオレがどう動くべきかだ。

さすがに気付いていた。白石に相談するまでもない。

消えた人はみんな、『前のオレと恋愛関係にあり、今のオレに告白した』んだ。

そして、前のオレはどうだった？

……他にもたくさんの子達と恋愛関係にあったじゃないか。

自意識過剰かもしれないが、前のオレと恋愛関係にあった他の子達が自分に思いを告げてくる可能性は、少なくないような気がする。

オレが積極的にその子達と行動すれば、いつしかその子は消える。

つまりはそういうこと。

前のオレとの関係が今回の件に関連するのか不明だが、
全く無関係の人間が消されるというのもおかしな話。

仮に『オレに告白した』ことだけが理由であるとしても、
更に危険性が増えるだけで、現状は何も変わらない。

オレは考える。

みんなと一緒に行動してもいいのか？

みんなを無視するか、避けるかでもしないと、みんなが危ない。

でも、今消えている人を助け出すためにも、少しでも多くの手がかりが必要だ。

冷静になれ。それだと、これからも誰かが消える可能性が付きまとうんだぞ。

いや、前の自分の行動の再現はするべきだ。記憶は順調に戻っているのだから。

それはそうだけど、それじゃあまた誰かが消えてしまう。

じゃあもう消えたみんなはどうなるんだ！？オレはみんなを助けるんだ！！

これ以上被害を増やす気か、完全にチェックメイトじゃないか！

そんなこと言ったって、行動しないと始まらない！

だめだ、うかつな行動はできない……！！

何度も、何度も考える。

それでも答えは、出てはくれない。

「こんなの……こんなの……八方塞がりじゃないか……ッ！くそっ、くそぉっ……！！」

時刻は１３：２０。あと１０分で昼休みは終了だ。

……この非常階段にはいつも人がおらず、みんなと出会うわけにはいかない

オレにとって、休み時間を過ごすには絶好の場所だった。

「……こんな所に何か用事でもあるの？シロウ君。」

突然、背後から発せられた声に驚き、反射的に声のした方へ顔を向ける。

「ごめんね、劇が終わってから後をつけちゃった。」

「……あやのさん。」

声の主は、あやのさんであった。

あやのさんであるということを認識した瞬間、一つの息がこぼれる。
無意識に息が出たものだから、その息の理由が自分でわからずにいた。

「ふふ、残念だった？……それとも、安心した？泉ちゃんや柊ちゃんじゃなくて。
サトシ君、今日は私とは話してくれたけど、高良ちゃん達にはそっけなかったものね。」

……その言葉で、気付く。

そして、新たな光が見える。

八方塞がり……？

チェックメイト……？

何を言っているんだオレは。

あるじゃないか。

道が。

いるじゃないか。

――クイーンを突ける位置に立っている一人のナイトが。

この息は、後者だ。あやのさんで安心した。そして救われた。

こんな深くにナイトが抉りこんでいたなんて。

こんな立ち位置にあやのさんがいてくれたなんて……！

「今日のサトシ君の様子が気になってね。劇の演じ方も異常なほど変化があって――。」

「あやのさん。」

「え？」

あやのさんの言葉を遮り、彼女の手を取る。

「あやのさん……。オレに、協力してくれないか。」

あやのさんだけだ。

オレと行動しても消えることなく、今の状況を引っくり返せる協力者は……！！

終る世界、霞みゆく心［14］

「信じがたいけど……。その話、本当なのね？」

「うん、そうだよ。全て事実だ。」

オレはあやのさんに全てを話した。

みさおさん、みなみさん、ゆたかさんが存在ごと消されたこと。
故に、あやのさんもその子達のことを覚えていないこと。

彼女達には『前の自分と恋愛関係にあった』ことだけでなく、
『今の自分に告白してきた』という共通点があること。

なので、オレはこれ以上被害者を増やさないよう、
前の自分と関係があった人には近づけないこと。

それでも、みんなを救うためには手がかりがいること。

「まぁ、それだとサトシ君の変化にもつじつまがあうし、
まずサトシ君がそんな嘘をつくメリットは何もないものね。」

「話が早くて、助かるよ。」

「結論から言うわ。ごめんけど、協力できない。」

「……だろうね。」

みんなと近づくことなく、前の自分の行動を真似て手がかりを探す。

そのために考え付く方法は、単純明快なものであれば
前の自分の行動を起こす際に近づかなければいけない関係者を、
先に除外しておくという強引なものがある。

簡単に言えば、役者の変更だ。

こなたさんやかがみさん達を参加させず、他のひとに役を頼むという方法だ。
これならば、誰も消えることはなく、オレは前の自分の行動を再現できる。

演劇において一番重要な台本の製作を任されたあやのさんなら、
それができるほどの立場にいるとオレ踏んだのだ。

「確かにやろうと思えば不可能ではないけれど……。
みんな、それぞれの役を本気で頑張って来たの。それをやめさせるなんて……。」

「そうだよね、さすがにこれはないか。」

そう、これは強引な手なのだ。

『今まで演劇の練習頑張ってたみたいだけど、このまま続けたら
君の存在消えちゃうからごめんけどこの役降りてねー。』

……なんて話が通るわけがない。誰がそんな話を信じるものか。

仮に本当にあやのさんの立場を使って、みんなを強制的に演劇から退場させて、
オレがなんとかしてみんなを救い、この状況を打破したとしても、この件で互いの関係に亀裂が入って、卒業まで気まずい雰囲気で過ごす事になるだろう。

彼女たちにとって最後の発表の場を奪えば、みんなが助かる。

でもきっと、誰かが消えていたという事実も、誰かが救われたという事実も、
彼女たちが気づくことはないのだろう。

そこに残るのは、意味もわからぬままに役を外されたことに対しての、疑心、不満。
優しい彼女達なら表面上には出さないだろうが、敵意すら持つだろう。

果たしてそれはハッピーエンドか？

「あやのさん。こんなことしか思いつけなかったオレを見ればわかると思う。
この問題の解決はオレ一人じゃ無理なんだ。協力者が欲しいんだ。
だから……。」

あやのさんは静かに微笑むと、オレの手を握る。

「ええ。わかったわ。どこまでが本当かわからないけど、乗るわ。
というか、そんな話を聞かされた後に断るなんて、無理な話よね。」

あやのさんはイタズラに微笑んで言う。

いまさらながら、みんなとは接触しないといいながら
あやのさんとは接触している理由は、『あやのさんにはすでに彼氏がいる』からである。

いつかの時間軸でオレは、あやのさんに恋をしたらしい。
オレが覚えていなくても、その映像は脳裏に焼き付いている。

だが、最終的に結ばれることはなかった。
つまるところ、『前の自分と恋愛関係になかった』のだ。

消えていったみんなとの共通点から外れる彼女であれば、消えることはない。

そして彼女は消えない存在でありながらみんなと友人だ。

そんなあやのさんがさらに演劇での大きな権限を持っている。

最高のシチュエーションだ。

だがしかし、残念なのはオレの頭の回転がそれほど早くはないということ。
この状況に対してのまともな打開策が一つもみつからないのだ。

それでも、二人で協力して考えればなんとか……。

「早速だけど、ひとつ方法を思いついたわ。
ちょっと強引だけど、これなら特に問題はないと思う。」

終る世界、霞みゆく心［15］

「あれー？サトシ君来てないの？」

帰りのＨＲが終わった途端に、サトシ君は教室から飛び出した。

今日はサトシ君の様子がおかしかったから、心配になって後を追ってみたのだが、
足は私の方が数段と早いハズなのに、なぜか振り切られて見失ってしまった。

早く練習に向かうつもりだったのだろうと思って体育館に来てみたが、
そこにはサトシ君の姿はなく、かがみとみさきちが突っ立っているだけである。

「あ、こなた。早いわね。」

「よう、ちびっ子。あいつならいないぜ。しばらくはここにこないらしい。」

「へぇ……。……ん？」

サラリと言われたものだから、『へ～、そうなんだ。』などと返しそうになったが、
言われたことを頭の中で復唱していると、今のが重大な発表だったことに気づく。

「えぇっ！？なんでさ。練習間に合わないじゃん！」

ただでさえ時間が惜しいというのにしばらく来ないだなんてどうかしている。
そして、そのことをなんの抑揚もなく口に出せるみさきちもみさきちだ。

「どうするの、代役いるの!?あぁ～っこんな大事な時期に!!
私とのキスシーンが嫌なんならハッキリ言って欲しかったよっ!!
私だってその場のノリで言っただけで峰岸さんに頼んでやめることくらい……!」

「あー、そうそう。その峰岸なのよね。」

さすがに苛立ちを覚えて誰に向けてでもなく怒声を浴びせる私だったが、
軽いチョップとともに放たれたかがみの言葉に一時停止を余儀なくされる。

「アイツがさぁ、秘密の特訓がどうとか言っててな。
サトシをここに来させずに別の場所でマンツーマンで教え込んでるんだと。」

「いやー、何考えてんのかしらねあの子は。
峰岸がやることなんだから間違いじゃあないんでしょうけど。」

つまりなんだ。峰岸さんはサトシ君の様子のおかしさに気付いてフォローしようとしたということか。

……いや、『秘密の特訓』？

……まさか。

「何だ、何だよ、何ですかァ！？このフラグはァ！攻略するのは私のはずなんですけど！？
高校の文化祭の演劇でＮＴＲ物をやりやがるつもりですかあのお人はァ！！」

「あー？何よこなた、フラグって。」

「いやね、かがみ様。『二人きりで秘密の特訓』なんてもうアレしかないじゃないですの！」

「アレってなんだよー、ちびっ子。」

……さすがにどれだけ鈍感でもここまでワードが揃ってれば普通気付くだろう。
それともわざと気付いてないフリをしているとでもいうのかこの二人は。

「てかお前さ、何を勘違いしてるのか知らないけど。
あやのにはもう私の兄貴という彼氏がいるんだぜ。」

「あ、そうだった。」

私は思わずホッと胸を撫で下ろした。

……なぜ、今、私は無意識に胸を撫で下ろした？
ここで峰岸さんとサトシ君が繋がったら、演劇のラストシーンに影響するから？

自分の意志とは関係なく苛立ちを覚えていた自分に困惑していた私だったが、
他の演劇メンバーが来たところで、それを考えるのをやめ、練習を始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0788f/

【らき☆すた】遠く、どこまでも近いモノ

2011年12月17日06時50分発行